

会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告13

西木流C遺跡（1次）

2014年

福島県教育委員会
監製 福島県文化振興財団
国土交通省東北地方整備局郡山国道事務所

会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告13

西木流 C 遺跡 (1次)

序 文

文化財は、それぞれの地域の歴史に根ざした文化遺産であり、我が国の歴史や文化を正しく理解するために必要不可欠なものです。

そのため、当時の姿がよく理解できるように、可能な限りそのままの形で文化財を保存し、後世に伝えていく努力が現代に生きる私たちに求められています。

会津縦貫北道路は、喜多方市と会津若松市を結ぶ全長13.1kmの高規格道路であり、平成8年度に都市計画道路として建設が決定され、平成9年度からは建設省（現国土交通省）直轄事業として建設工事が進められています。

この路線内には、周知の埋蔵文化財包蔵地を含め、先人が残した貴重な文化遺産が包蔵されています。福島県教育委員会では、数多くの遺跡等の所在を確認するとともに、国土交通省東北整備局郡山国道事務所と埋蔵文化財保護のための協議を重ねてきました。その中で現状での保存が困難なものについては、詳細な記録を残すために発掘調査を実施してまいりました。

本報告書は、平成24年度に発掘調査を実施した会津若松市所在の西木流C遺跡の1次調査の成果をまとめたものです。

西木流C遺跡の1次調査では、河川の流路跡から、平安時代の土器などとともに東北地方で3例目となる農具「コロバシ」や椀・皿・下駄などの木製の生活道具、齋串などの祭祀具などが見つかри、この時代の会津地方の生活を考える上で貴重な資料を得ることができました。

今後、この報告書が、県民の皆様の文化財に対する理解を深めるとともに、地域の歴史を解明するための基礎資料として、さらには生涯学習等の資料として広く活用していただければ幸いです。

最後に、発掘調査の実施に当たり、御協力いただいた会津若松市教育委員会、国土交通省東北地方整備局郡山国道事務所、財団法人福島県文化振興財団をはじめとする関係機関及び関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成26年3月

福島県教育委員会
教育長 杉 昭 重

あ い さ つ

当財団では、福島県教育委員会からの委託を受けて、県内の大規模な開発に先立ち、開発対象地域内に所在する埋蔵文化財の調査を実施しております。会津縦貫北道路にかかる埋蔵文化財については、平成9年度の表面調査を経て、平成13年度から発掘調査を実施してまいりました。

本報告書は、平成24年度に発掘調査を実施した会津若松市西木流C遺跡の1次調査の成果をまとめたものです。今回の調査では、平安時代の河川流路跡から、この時代の土器類とともに、農具、生活用具、祭祀具などの大量の木製品がみつかりました。農具には竖杵や東北でも3例目となる「コロバシ」が、生活用具には椀・皿・下駄などが、祭祀具には斎串などがあり、会津地方で営まれていた当時の生活の一端をうかがい知ることができる貴重な資料となりました。

本報告書がふるさとの歴史を解明するための一助となれば幸いです。

終わりに、今回の発掘調査にご協力をいただきました関係諸機関ならびに地元住民の皆様へ厚く御礼申し上げますとともに、当財団の事業の推進につきまして、今後とも一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成26年3月

財団法人 福島県文化振興財団

理事長 遠藤俊博

緒 言

- 1 本書は、会津縦貫北道路(会津若松市～喜多方間)遺跡発掘調査において、平成24年度に実施した会津若松市西木流C遺跡の発掘調査報告書である。

西木流C遺跡：会津若松市大字木流字木流 遺跡番号：202-00241

- 2 当遺跡発掘調査事業は、福島県教育委員会が国土交通省の委託を受けて実施し、調査に係る費用は国土交通省が負担した。
- 3 福島県教育委員会は、発掘調査を財団法人福島県文化振興財団に委託して実施した。
- 4 財団法人福島県文化振興財団では、遺跡調査部遺跡調査課の下記の職員を配して調査にあたった。

副 主 幹 藤 谷 誠 嘱 託 鶴 見 諒 平

- 5 本書の執筆分担は、担当職員が分担して行い、各文末に文責を記した。
- 6 本書に使用した地図は、国土交通省国土地理院発行の2万5千分の1地形図、並びに同省東北地方整備局郡山国道事務所が製作した工事用地図を複製したものである。
- 7 本書に掲載した自然科学分析については、株式会社バレオ・ラボに委託し、その分析結果及び考察は巻末に付編として掲載した。
- 8 本書に収録した調査記録及び出土資料は、福島県教育委員会が保管している。ただし、1号流路跡出土の杭類は図41-5、図44-5のみを保管し、それ以外については文化庁の「出土品の取り扱いについて」に準じて現地にて必要な記録・試料を採り本報告書に収録した。
- 9 発掘調査及び報告書の作成に際して、次の機関及び個人から協力・助言をいただいた。
会津若松市教育委員会 石田明夫 菅野和博 高橋 満 森 幸彦

用 例

- 1 本文中及び遺物整理に使用した略記号は、以下の通りである。

会津若松市…AW	西木流C遺跡…NKG・C	土 坑……SK
溝 跡……SD	遺構外堆積土…L	遺構内堆積土…ℓ
グリッド……G	トレンチ……T	サブトレンチ…ST

- 2 遺構挿図における遺構番号は、当該遺構は正式名称、その他の遺構は記号化した略称で記載している。
- 3 本書における遺構実測図の用例は、以下の通りである。
- (1) 方位記号がないものは、全て上を真北とする。
 - (2) 縮尺は、各挿図版に示した。
 - (3) 遺構内の傾斜面は「 ∇ 」で示した。
 - (4) 断面図及び地形図における標高は、海拔標高を示す。
 - (5) 平面図における座標は、平成23年3月11日に発生した「東北地方太平洋沖地震」による歪みを補正した平面直角座標系のIX系の数値を示している。
 - (6) 遺構外堆積土は大文字のLとローマ数字、遺構内堆積土は小文字のℓと算用数字で表記した。
- 4 本書における遺物実測図の用例は、以下の通りである。
- (1) 縮尺は各挿図ごとに示した。
 - (2) 土器断面は、土師器、陶磁器を白ヌキ、須恵器をベタ黒とした。
 - (3) 挿図中の網点は、図版ごとに凡例を示した。
- 5 本書における遺物写真でここに付した番号は、挿図番号と一致する。
- 6 引用・参考文献は、執筆者の敬称を省略し付編を除き本文末に一括した。

目 次

第1章 調査経過

第1節	調査に至る経緯	1
第2節	歴史的環境	2
第3節	地理的環境	6
第4節	調査経過と調査方法	8
	1 調査経過 (8)	
	2 調査方法 (10)	

第2章 遺構と遺物

第1節	遺構の配置と基本土層	11
第2節	1号流路跡	13
	1 検出状況と上部の土層 (13)	
	2 流路跡の形状について (18)	
	3 遺物の出土状況について (20)	
	4 出土遺物について (25)	
	5 杭と杭列 (55)	
	6 東側施設について (63)	
	7 礫層以下の調査 (64)	
第3節	2号流路跡	67
第4節	溝 跡	68
	1 平安時代の溝跡 (68)	
	2 近世以降・その他の溝跡 (72)	
第5節	土 坑	83
第6節	遺構外出土遺物	84

第3章 ま と め

第1節	1号流路跡出土の土器について	85
第2節	出土木製品について	88
第3節	ま と め	90

付 編

1	放射性炭素年代測定	151
2	西木流C遺跡出土木製品の樹種同定	155
3	西木流C遺跡出土の骨片について	158

挿図・表・写真目次

<p>[挿 図]</p> <p>図1 会津縦貫北道路位置図…………… 1</p> <p>図2 西木流C遺跡と周辺遺跡位置・一覧…… 3</p> <p>図3 西木流C遺跡調査位置図…………… 7</p> <p>図4 グリッド配置図……………10</p> <p>図5 基本土層柱状図……………11</p> <p>図6 遺構配置図……………12</p> <p>図7 1号流路跡サブトレンチ 横断面位置図……………14</p> <p>図8 1号流路跡サブトレンチ1～3, 8・9土層断面図……………15</p> <p>図9 1号流路跡サブトレンチ4・6, 5・7土層断面図……………16</p> <p>図10 1号流路跡I区調査区北壁, I・II区調査区西壁, II区調査区西壁土層断面図……………17</p> <p>図11 1号流路跡全体図……………19</p> <p>図12 1号流路跡遺物出土状況(1)……………21</p> <p>図13 1号流路跡遺物出土状況(2)……………22</p> <p>図14 1号流路跡遺物出土状況(3)……………23</p> <p>図15 1号流路跡遺物出土状況(4)……………24</p> <p>図16 1号流路跡出土遺物(1)土師器①……………27</p> <p>図17 1号流路跡出土遺物(2)土師器②……………28</p> <p>図18 1号流路跡出土遺物(3) 土師器③・赤焼土器①……………29</p> <p>図19 1号流路跡出土遺物(4) 土師器④・赤焼土器②……………30</p> <p>図20 1号流路跡出土遺物(5)土師器⑤……………31</p> <p>図21 1号流路跡出土遺物(6)土師器⑥……………32</p> <p>図22 1号流路跡出土遺物(7) 須恵器①・陶質土器……………34</p>	<p>図23 1号流路跡出土遺物(8)須恵器②……………35</p> <p>図24 1号流路跡出土遺物(9)須恵器③……………36</p> <p>図25 1号流路跡出土遺物(10)須恵器④……………37</p> <p>図26 1号流路跡出土遺物(11)須恵器⑤……………38</p> <p>図27 1号流路跡出土遺物(12)木製品①……………40</p> <p>図28 1号流路跡出土遺物(13)木製品②……………41</p> <p>図29 1号流路跡出土遺物(14)木製品③……………42</p> <p>図30 1号流路跡出土遺物(15)木製品④……………43</p> <p>図31 1号流路跡出土遺物(16)木製品⑤……………44</p> <p>図32 1号流路跡出土遺物(17)木製品⑥……………46</p> <p>図33 1号流路跡出土遺物(18)木製品⑦……………47</p> <p>図34 1号流路跡出土遺物(19)木製品⑧……………48</p> <p>図35 1号流路跡出土遺物(20)木製品⑨……………50</p> <p>図36 1号流路跡出土遺物(21)木製品⑩……………51</p> <p>図37 1号流路跡出土遺物(22)木製品⑪……………52</p> <p>図38 1号流路跡出土遺物(23)木製品⑫……………53</p> <p>図39 1号流路跡出土遺物(24) 土製品・石製品・金属製品……………54</p> <p>図40 1号杭列……………56</p> <p>図41 1号流路跡出土遺物(25)木杭①……………58</p> <p>図42 1号流路跡出土遺物(26)木杭②……………59</p> <p>図43 2・3号杭列と単独杭……………61</p> <p>図44 1号流路跡出土遺物(27)木杭③……………62</p> <p>図45 1号流路跡東側施設……………64</p> <p>図46 1号流路跡深掘りグリッド・ トレンチ位置図……………65</p> <p>図47 1号流路跡深掘りトレンチ 土層断面図……………66</p> <p>図48 1号流路跡出土遺物(28) 礫層以下の遺物……………67</p> <p>図49 2号流路跡……………68</p>
---	--

図50	5号溝跡	69
図51	5・9号溝跡出土遺物	70
図52	6・9号溝跡	71
図53	1号溝跡(北半)	73
図54	1・8号溝跡	75
図55	1号溝跡出土遺物(1)	76
図56	1号溝跡出土遺物(2)	77
図57	2・3号溝跡	78
図58	3号溝跡出土遺物	79

図59	4・7号溝跡	79
図60	4・7号溝跡出土遺物	80
図61	10～12号溝跡、 10・11号溝跡出土遺物	81
図62	13号溝跡	82
図63	1・2号土坑	83
図64	遺構外出土遺物	84
図65	1号流路跡出土土器	86
図66	1号流路跡変遷図	90

[表]

表1	会津縦貫北道路関係遺跡の調査履歴	2
表2	杭列・杭計測値一覧表	57

表3	深掘りグリッド・トレンチ出土遺物数	67
----	-------------------	----

[写真図版]

1	調査区全景	95
2	調査区全景	95
3	調査前遺跡全景	96
4	Ⅲ区全景	96
5	1・2号流路跡全景	97
6	1号流路跡(1)	98
7	1号流路跡(2)	99
8	1号流路跡(3)	100
9	1号流路跡(4)	101
10	1号流路跡(5)	102
11	1号流路跡(6)	103
12	1号流路跡遺物出土状況(1)	104
13	1号流路跡遺物出土状況(2)	105
14	1号流路跡遺物出土状況(3)	106
15	1号流路跡遺物出土状況(4)	107
16	1号流路跡遺物出土状況(5)	108
17	1号流路跡遺物出土状況(6)	109
18	1号杭列(1)	110
19	1号杭列(2)	111

20	1号杭列(3)	112
21	2・3号杭列、単独杭	113
22	1号流路跡東側施設	114
23	1号流路跡深掘りトレンチ	115
24	1号流路跡深掘りグリッド	116
25	2号流路跡	116
26	1・8号溝跡(1)	117
27	1・8号溝跡(2)	118
28	2・3号溝跡	118
29	4号溝跡	119
30	5号溝跡(1)	119
31	5号溝跡(2)	120
32	5号溝跡(3)	121
33	6号溝跡	121
34	7・9・10～12号溝跡	122
35	10・13号溝跡、1・2号土坑	123
36	1号流路跡出土土器器杯	124
37	1号流路跡出土土器器杯・赤焼土器杯	125
38	1号流路跡出土赤焼土器杯・ 土器器高台杯	126

39	1号流路跡出土土師器杯・甕、須恵器杯	127
40	1号流路跡出土筒形土器、須恵器杯・ 長頸瓶、.....	128
41	1号流路跡出土須恵器長頸瓶・壺、 陶質土器器台.....	129
42	1号流路跡出土須恵器甕（1）.....	130
43	1号流路跡出土須恵器甕（2）.....	131
44	1号流路跡出土墨書土器.....	132
45	1号流路跡出土木製品（1）椀・皿.....	133
46	1号流路跡出土木製品（2）椀・皿.....	134
47	1号流路跡出土木製品（3）椀・曲物・ 筒状容器.....	135
48	1号流路跡出土木製品（4） 曲物・下駄.....	136
49	1号流路跡出土木製品（5）簾串.....	137
50	1号流路跡出土木製品（6） 串状木製品・ヘラ状木製品・曲物側板.....	138
51	1号流路跡出土木製品（7）	

付 編 1

[挿 図]

図 1	暦年較正結果.....	154
-----	-------------	-----

付 編 2

[表]

表 1	樹種同定結果一覧.....	155
-----	---------------	-----

付 編 3

[挿 図]

図 1	同定されたヒト右上腕の位置.....	158
-----	--------------------	-----

	曲物側板・舟形状木製品・紡織具・脚類	139
52	1号流路跡出土木製品（8）脚類・ ヘラ状木製品・田下駄・箱部材.....	140
53	1号流路跡出土木製品（9）部材・ クサビ.....	141
54	1号流路跡出土木製品（10）部材・ 火付木・他.....	142
55	1号流路跡出土木製品（11） 堅杵・コロバシ・建築材・杭、土製品・ 金属製品 勾玉・土錘・刀子.....	143
56	1・5・7・9号溝跡出土須恵器甕、1号溝 跡出土磁器、1・3号溝跡出土木製品椀	144
57	1・10・11号溝跡出土木製品椀・下駄・櫛	145
58	1号溝跡出土石製品・金属製品、 遺構外出土須恵器杯・石製品・石器.....	146
59	1号溝跡出土木製品顕微鏡写真.....	147

[表]

表 1	測定試料および処理.....	151
-----	----------------	-----

表 2	放射性炭素年代測定および 暦年較正の結果.....	152
-----	------------------------------	-----

[写真図版]

図版 1	西木流C 遺跡出土木製品の 光学顕微鏡写真.....	157
------	-------------------------------	-----

[写真図版]

図版 1	西木流C 遺跡流路跡出土の骨片.....	159
------	----------------------	-----

第1章 調査経過

第1節 調査に至る経緯

会津縦貫北道路は、会津盆地北部の会津若松-喜多方間を結ぶ自動車専用の基幹道路で、喜多方市関柴町大字西勝を起点とし、湯川村を経て会津若松市高野町大字中沼を終点とする全長13.1kmの道路として計画されている。平成8年に計画が策定され、同9年度からは、建設省(現国土交通省)直轄事業として、建設が進められている。

平成21年には塩川ICから湯川北IC間、平成23年には喜多方ICから塩川IC間、平成25年には湯川北ICから湯川南IC間が開通した。平成27年度には会津若松北ICまでの全線が開通する予定である。

福島県教育委員会では、会津縦貫北道路建設予定地内にある埋蔵文化財の保護を図るために、平成9年度より財団法人福島県文化センター(現財団法人福島県文化振興財団)に委託して表面調査を実施した。表面調査では、平成9年度に周知の遺跡21か所、遺跡推定地3か所、平成19年度に周知の遺跡4か所、遺跡推定地2か所を確認した。

表面調査により確認された周知の遺跡、遺跡推定地については、工事計画において優先箇所となる地点を対象として、平成12年度から試掘調査が実施された。平成18年度までに喜多方市に所在する遺跡、平成23年度までに湯川村に所在する遺跡の試掘調査を完了した。会津若松市に所在する遺跡の試掘調査は、平成23年度から開始し、本年度も継続中である。

試掘調査によって、保存範囲が確定された遺跡については、福島県教育委員会と建設省東北地方

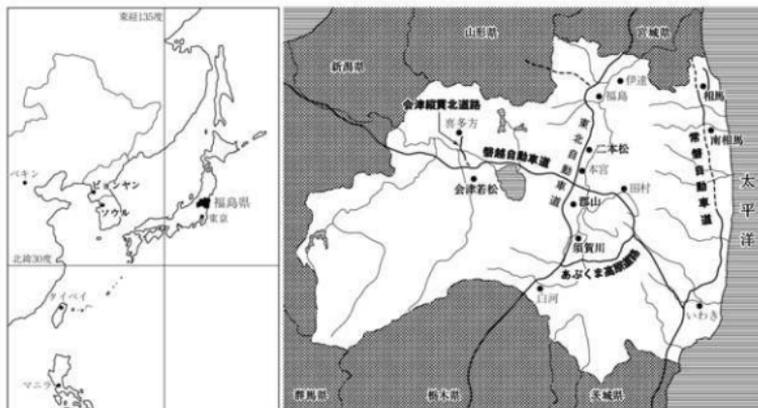


図1 会津縦貫北道路位置図

表1 会津縦貫北道路関係遺跡の調査履歴

遺跡名 (調査次数)	調査内容	調査年度	報告書名
麻生館遺跡	分布	2000年	県内遺跡分布調査報告7
	発掘	2001年	会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告1
荒屋敷遺跡(1～5次)	分布	2000年～2002年、2004年	県内遺跡分布調査報告7～9、11
	発掘	2001年～2004年	会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告2～6
高堂太遺跡(下高瀬館跡) (1～4次)	分布	2004年～2006年	県内遺跡分布調査報告12、13
	発掘	2005年～2008年	会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告6～9
沼ノ上遺跡	分布	2002、2007年	県内遺跡分布調査報告9、14
	発掘	2007年	会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告8
桜町遺跡(1～4次)	分布	2003、2004、2008、2010年	県内遺跡分布調査報告10、11、15、18
	発掘	2004、2009～2011年	会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告5、10～12
西木流C遺跡	分布	2011年	県内遺跡分布調査報告18、20
	発掘	2012年	会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告13
西木流D遺跡	分布	2011年、2012年	県内遺跡分布調査報告18～20
鶴沼B遺跡	分布	2011年、2012年	県内遺跡分布調査報告19、20
鶴沼C遺跡	分布	2012年	県内遺跡分布調査報告20
西坂才遺跡	分布	2012年	県内遺跡分布調査報告20

建設局郡山国道工事事務所(現国土交通省東北地方整備局郡山国道事務所)が協議を行い、発掘調査を実施して記録保存を図ることとなった。

本年度まで実施された分布調査と発掘調査について表1に示す。試掘調査では、平成12年度より本年度まで、麻生館遺跡から西坂才遺跡までの10遺跡について実施され、発掘調査は平成13年度の喜多方市麻生館遺跡から本年度の西木流C遺跡までの6遺跡について実施された。(藤谷)

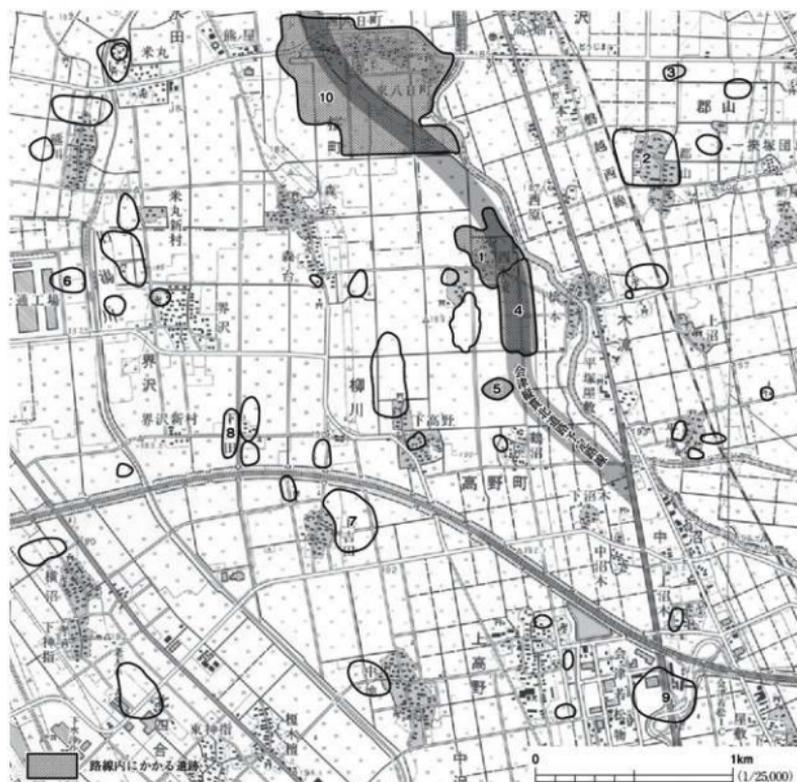
第2節 歴史的環境

本節では西木流C遺跡が所在する会津若松市を中心に、主に発掘調査が行われた会津地方の遺跡から見た歴史的動向について概観していく。

『会津若松市埋蔵文化財分布調査報告書』(会津若松市教育委員会1999)によると、会津若松市では354の遺跡が確認されている。

会津盆地周辺における旧石器時代遺跡の事例は少ないが、笹山原遺跡群(会津若松市)、塩坪遺跡(喜多方市)などが調査されている。笹山原遺跡群はナイフ形石器などを含む後期旧石器時代前半期の遺跡で、福島県内でも有数の旧石器時代遺跡である。その他調査された遺跡では小石ヶ浜遺跡、遺物散布地では廻戸B遺跡など、現在確認されている市内の旧石器時代遺跡は猪苗代湖に近い山麓部に集中する傾向にある。

縄文時代の遺跡は旧石器時代と同様山間部や山麓部に多い。縄文時代は草創期から遺跡が確認できる。笹山原No.11遺跡からは隆起線文土器が出土し、西会津町塩吹岩陰遺跡からも草創期の遺物が出土している。早期の遺跡としては常世式の標識遺跡ともなっている喜多方市塩川町の常世原田遺跡が確認されている。早期から後期にかけての会津若松市内の調査事例では笹山原No.11遺跡・大野原A遺跡などからも早期の土器が出土している。中期の本能原遺跡では環状集落が確認されており、福島県内では有数の規模である。晩期には会津若松市上雨屋遺跡で300基以上の土坑墓が検出され、弥生時代中期までの土坑が確認されている。墓料遺跡でも縄文時代晩期の土坑墓が確認さ



番号	遺跡名	所在地	時代	備考
1	西木流C遺跡	会津若松市 高野町大字木流字木流	平安・近世	1995・1996市発掘調査 2012県発掘調査
2	郡山遺跡	河東町郡山字村北・神明台他	弥生～中世	2002～市発掘調査
3	金屋遺跡	河東町郡山字村北	奈良～中世	2002市発掘調査
4	西木流D遺跡	高野町大字木流字木流	奈良・平安	
5	鶴沼B遺跡	高野町大字鶴沼	奈良・平安	
6	東高久遺跡	高野町大字界沢・神指町大字高久	平安	1995・1996市発掘調査
7	上吉田遺跡	高野町大字柳川字吉田	平安	1989年調査
8	矢玉遺跡	高野町大字柳川字下吉田	平安	1992・1994市発掘調査
9	屋敷遺跡	町北町大字始字宮北	弥生～中世	1989・1990県発掘調査 1993～1995市発掘調査
10	桜町遺跡	湯川村 桜町字千荷他	弥生・平安	2004・2009～2011 発掘調査

図2 西木流C遺跡と周辺遺跡位置・一覧

れている。

会津若松市周辺では弥生時代の著名な遺跡が多い。弥生中期には再葬墓が会津若松市墓料遺跡・南御山遺跡、会津美里町油田遺跡などで確認されているほか、一ノ堰B遺跡・川原町口遺跡では土坑墓群が調査された。再葬墓は縄文時代以来の埋葬方法であり、東日本で多く見られる。会津盆地では弥生時代後期になると再葬墓が見られなくなり、それに代わるように方形周溝墓が確認され始める。桜町遺跡では弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての方形周溝墓が多数確認されている。また、井戸跡から木製農耕具が出土し、会津地方では弥生時代後期までには農耕が始まっていたことがわかる貴重な遺跡である。弥生時代後期には会津若松市宮越貝塚・上高野貝塚など全国的にも類例の少ない淡水性の貝塚も確認されている。

古墳時代になると会津盆地でも前方後円墳の築造が開始される。会津地方では前期古墳が多く知られる。前期古墳はいくつかの集中地点があり、盆地南東部では会津若松市周辺の会津大塚山古墳・堂ヶ作山古墳・飯盛山古墳、盆地西部の会津坂下町杵が森古墳・亀ヶ森古墳・鎮守森古墳、盆地北東部は雄国山麓の喜多方市田中舟森山古墳・観音森古墳・十九壇古墳群などで大型前方後円墳が築造されている。会津大塚山古墳からは東北地方で唯一の三角縁神鏡が出土し、会津地方のみならず東北地方の古墳時代史を考える上で重要な発見となった。

古墳時代中期以降は会津盆地で大型古墳の築造が低調になる。会津坂下町長井前ノ山古墳は前方後円墳であるものの墳丘規模は約36mと前期よりも小型である。中小の古墳で構成される古墳群も確認されているが、その大半が未調査で、遺物も採集されていないため不明点が多い。会津若松市村北古墳群・大塚山西古墳・長山古墳などが調査されており、後期の古墳と考えられている。7世紀代には横穴墓も構築され、駒板新田横穴墓群・山崎横穴墓群では小札甲が出土するなど、後期・終末期古墳と遜色のない副葬品が確認できる。

古墳時代の集落は古墳同様に不明点が多い。古墳時代前期の集落遺跡は弥生時代後期から継続して営まれている遺跡で確認できる。屋敷遺跡では、古墳時代前期の竪穴住居が確認されており、弥生時代に引き続いた集落形成が確認できる。しかし、古墳時代前期初頭以降の集落は会津若松市では村西遺跡・門田ほ場遺跡などで竪穴住居が確認されている以外は不明点が多く、古墳時代集落の様相は明らかになっていない。周辺では喜多方市古屋敷遺跡で古墳時代中期から後期にかけての豪族居館が発見されているほか、中期から後期の中平遺跡、後期の樋渡台畑遺跡などが調査されている。7世紀代の遺跡もあまり確認されておらず、喜多方市内屋敷遺跡・会津坂下町竹原遺跡など数えるほどである。

奈良時代の遺跡は古墳時代に続いて遺跡の確認・調査数ともに少ないため不明点が多い。会津若松市郡山遺跡は継続して調査が行われている数少ない遺跡で、奈良時代から平安時代の遺物が確認されている。掘立柱建物跡や、「會」と書かれた墨書土器や瓦、一般の集落には流通しない灰釉陶器などが出土していることから、会津郡衙の有力地とされている。生産遺跡としては村北瓦窯跡がある。この遺跡は会津盆地で唯一確認されている瓦窯跡であるが、操業期間は短期であった。瓦

の供給地は明確ではないが、7世紀後半から8世紀初頭の年代が想定される。奈良時代後半には東北地方でも有数の規模である大戸窯で須恵器の生産が開始される。大戸窯の須恵器は会津地方だけではなく周辺各地へ供給されており、特に長頸瓶は大戸窯を特徴付けるものである。

平安時代以降、集落遺跡が急激に増加する。会津若松市に限ってみても屋敷遺跡・矢玉遺跡・上吉田遺跡・東高久遺跡など整然と並んだ掘立柱建物跡が多く検出され、官衙と関連することが想定できる。ほ場整備にかかわって会津若松市が実施した西木流C遺跡の調査でも、寺院や有力者の住居と考えられることが多い四面廂を持つ掘立柱建物が確認されているほか、灰軸陶器や緑軸陶器などが含まれていることから、官衙に関連する遺跡として考えられる。喜多方市内屋敷遺跡・鏡ノ町遺跡A・B、会津坂下町大江古屋敷遺跡・吉原遺跡などでも掘立柱建物跡が検出されており、郡衙とその周辺における土地の開発の状況から、平安時代における会津の社会の発展の状況がうかがえる。湯川村勝常寺の国宝である木造薬師如来及び両脇侍像を含む12体の仏像は9世紀代の造立と見られ、同じく807年に徳一によって建立されたと伝わる磐梯町恵日寺など、平安時代の会津盆地における仏教の発展の状況をうかがえる寺院が存在する。11世紀以降は集落の様相が再び不明瞭になるが、平安時代末の会津坂下町陣が峯城跡の調査によって当該期に関する多くの知見が得られた。

中世に入ると武家社会が成立し、会津地方では三浦董名氏が台頭するほか、新たな支配者層が成立する。会津盆地の各所に中世城館跡の存在が伝えられ、史料中にその城主名などが記されている。近年、会津貫貫北道路関連の発掘調査によって、喜多方市荒屋敷遺跡・麻生館遺跡・高堂大遺跡・下高瀬遺跡などの中世城館跡が調査されたほか、喜多方市新宮城、湯川村北田城なども一部発掘調査されている。これらの調査により中世城館の構造などの状況が次第に明らかにされてきており、文献に残された記録との対比が可能となり、中世の会津地方の歴史を考える上での資料が充実してきている。

戦国時代には董名氏が全盛を迎えるも、次第に衰退へ向かう。天正17年(1589年)には董名義広と伊達政宗による摺上原の戦いが起こり、伊達政宗が勝利、董名氏は事実上滅亡する。伊達政宗が一時的に会津に入るも、その後は、蒲生秀行、上杉景勝、加藤嘉明らが会津地方を治めている。この歴史の動向に関わる城跡が会津地方には確認できる。浜崎城は豊臣秀吉の奥州仕置後に廃城になるはずのところを蒲生氏が御茶屋として残している。神指城は慶長3年(1598年)に会津に入った上杉景勝が築城を開始したが、徳川家康の会津征伐の計画によって、その途中にある白河城の修築を優先したため築城が中断した。その後、関が原の戦い後の慶長6年(1601年)に上杉景勝が米沢に移封となり、完成を待たずに破却された。神指城はその一部が試掘調査されており、二の丸の南辺と東辺の土塁跡と堀跡が確認されている。

江戸時代の会津地方は徳川秀忠の庶子である保科正之が寛永20年(1643年)に会津藩主となり、その後の会津藩の藩政の基礎を固めた。若松城やその城下に広がった武家屋敷跡も発掘調査によって確認されており、当時の武家の生活を示す遺物が出土している。西木流C遺跡の近隣にある馬頭

観音堂に競馬場があり、会津藩主が毎年観覧に来ていたことが伝わっている。(鶴見)

第3節 地理的環境

西木流C遺跡は、会津若松市高野町大字木流字木流地内に所在する。南東方向に直線距離で約4.5kmのところにはJR会津若松駅があり、最寄りの駅は北西約1kmにあるJR磐越西線堂島駅である。また、遺跡の東側約400mには会津若松と喜多方を結ぶ国道121号線が南北に走っており、南側では約2.3km先で東北自動車道会津若松インターチェンジと連結し、北側約1kmで県道会津坂下-河東線の交差点となる。会津盆地は東北地方でも有数の米産地となっており、遺跡周辺でも各集落間の平地は水田として利用されている。遺跡は、西木流集落からその東側の水田地帯まで広がっているが、今回調査した建設予定地内も調査前は、水田として利用されていた。

遺跡の位置する会津盆地は、東西約32km、東西約13km、面積約324km²の縦長の盆地である。遺跡は盆地の中央よりやや南東側に位置している。盆地南半部の東側は背負山地となっており、その東側には猪苗代湖を含めた猪苗代盆地が位置している。盆地南側の東縁部は背負山地山麓から盆地床に続く扇状地が広がっている。遺跡は大きくはこの扇状地の最下位の区域に入る。5万分の1の土地基本分類調査図「若松」では、遺跡付近はFtⅢ下位扇状地に分類されている。盆地床は東縁部からは中央を流れる阿賀川に向かって、南からは北側に向かってゆるやかに傾斜しており、最高位の部分は約220m、最下位の盆地北西の阿賀川の盆地出口付近で約170mとなっている。遺跡付近の標高は、約188mで、調査区の中ではほぼ平坦ながらも南から北に向かって約20cmの比高差が認められる。

盆地内では、南会津に水源を持ち盆地内の最大の河川である阿賀川をはじめ、その支流の鶴沼川・宮川などが北流している。盆地中央東側では唯一猪苗代湖に水源を持つ日橋川が西流しており、そこに遺跡の約50m東側を流れる潤川(せせなぎがわ)が流れ込んでいる。これらの河川は、扇状地を侵食し、段丘状の地形等を形成させている。遺跡周辺も扇状地が侵食され平坦な低位段丘上に位置すると考えられる。

会津盆地の表層地質は、大きくは腐食を含む黒ボク土、灰色の低地土、褐色の低地土に分かれ、遺跡の位置する付近は、灰色の低地土が分布する地域に含まれている。遺跡の基本土層はLⅡ黒褐色粘質土、LⅢ灰褐色粘質土となっており、遺構の検出面になっているLⅢは灰色の低地土に含まれると考えられる。その形成は粘質の細かい粒子からなるところから水成堆積によるものであり、本来LⅡのように上部が植物の腐食作用を受けた層であったが、水田耕作などの人為的な行為でその部分が削平されたか、河川の氾濫によって削り取られたため、下部のLⅢが残ったものと考えられる。

また、LⅢ以下に堆積している礫層については、近くを流れる潤川(せせなぎがわ)等の諸河川によって形成された段丘堆積物であると思われる。段丘堆積物は周辺の地形に左右されるため、地域



圖3 西木流C遺跡調査位置図

の中での分布にある程度偏りがあることが想定される。

(藤 谷)

第4節 調査経過と調査方法

1 調査経過

平成24年度は、西木流集落の東を通る路線部分6,000㎡の調査を実施した。調査を実施するにあたり、4月18日(水)に国土交通省郡山国道事務所、県教育庁文化財課、会津若松市道路維持課を交えて、西木流集会所にて住民説明会を開催し、西木流地区の住民に対して調査の方法や時期について説明した。その中で、調査区を横断している市道については両側に水路があるため、水稲耕作に影響しない時期に撤去することとした。

現地調査は、住民説明会の翌週の4月23日(月)より開始した。まず、調査連絡所や器材倉庫、作業員駐車場などの作業用ヤードを確保するために、調査区の南側を東西に走る市道の両側に広がる道路用地の整備を実施し、この週の末の4月27日(金)には調査連絡所の仮設ユニットハウスやトイレ等を設置した。

4月26日(木)より表土削除作業を調査区の一帯北側にあるⅠ区から着手し、5月18日(金)には終了した。作業員は、ゴールデンウィーク明けの5月7日(月)に登録し雇用を開始した。

5月中は、調査区の東西側や道路際に、調査区への水の侵入に備えた排水溝掘りなどの現場整備や各調査区の粗掘り、遺構検出を実施した。その中で、1号溝跡(SD1)等のほ場整備前の近世のものと思われる溝跡とともに、Ⅱ区の西半部を北東から南西方向にかけて明瞭に分かれる土層(黒褐色土)がある部分が明らかとなってきた。また、国土座標に沿ったグリッド基準杭と標高杭の打設を委託し、5月28日(月)に完了した。

6月4日(月)からは、このⅡ区の西半部の黒褐色土の堆積土の部分について、その性格を明らかにするため、幅1mのサブトレンチを設定した。サブトレンチについては、堆積土中の遺物の出土状況も明らかにする必要があるため、手掘りで掘り進めた。最初に開けた1号トレンチ(1Tとする以下同)で急激に立ち上がるラインが認められたり、約1.5m下の底面付近からは、平安時代の遺物も見つかったため、更に北側についても、サブトレンチを増やすこととした。

サブトレンチは、全部で9本設定したが、このうち、4Tと6T、5Tと7Tについては、東西方向に合体させたため、実質7本のトレンチとなっている。調査を進めて行く中で、2Tや5・7Tなどでは、検出面からの深さが2mを超える深いものとなり、断面の観察により平安時代の流路の跡であることがはっきりした。また、土層の遺物出土状況より、遺物が多く出土するのは、調査区西側の上層土層と、底面付近に堆積する砂層であることや、Ⅱ区北側に多数の杭が並ぶ杭列があることがわかった。

サブトレンチの掘り込みは、その深さが深いこともあり、最終的に7月第1週の2日(月)までかかった。7月の前半には西側上層土層を手掘りし、その後調査期間を短縮するため底面から40cm

前後を残して、重機を使って7月18日(水)から8月3日(金)まで、上部土層の除去作業を実施した。7月24日(火)には、流路跡の東側の壁際付近の堆積土中から農具「コロバシ」も出土した。また7月後半には、Ⅲ区の遺構検出を実施し、4号溝跡(SD4)等の近世のものと思われる溝跡や1号溝跡(SD1)の続き部分等が検出された。

8月からは、Ⅲ区の遺構掘り込みと並行して、流路跡の底面上部の土層の除去も開始した。除去した土層については、遺構の底面が検出面からの深さ2mと深いため、8月21日(火)よりベルトコンベア3台をリースし、作業の効率化をはかった。底面上部の土層からは、木質遺物も多く見付かり、8月前半には挽物の皿が2点出土した。

9月も流路跡底部上面の土層の除去とⅢ区の遺構精査を中心に調査を進めた。流路跡からは、多くの木質遺物が見つかり、下駄や皿などの日用品とともに祭祀具の斎串も見つかった。9月25日(火)からは杭列の精査を開始し、杭列が建茶材を転用したものを含む約50本で作られていたことがわかった。9月9日(日)には、地元会津若松市高野町のウォーキング大会の会場となり、参加した約50名の地域住民にそれまでの調査成果について説明した。また、水稲耕作の進展に伴い、南側流路に流す水の必要性がなくなり、9月12日(水)、13日(木)の2日間で南側市道の撤去を実施した。

10月半ばまでには、Ⅱ区の底面上部の土層の撤去が終了し、挽物皿や曲物など多くの木質遺物が出土した。Ⅲ区の遺構精査も継続し、特に西半分にある5号溝跡(SD5)のプランが明確になったため、4本のサブトレンチを入れて土層の状況を確認し、遺物の出土状況から上部の一部については機械により削除することとした。周辺の水田の稲刈りが初旬で終わり、農道の使用頻度が少なくなったことから、Ⅱ区西側の取り付け側道と北側道路、Ⅰ区東側一部の撤去を10月16日(火)から24日(水)までの間に実施した。Ⅰ区の底面上部の土層の撤去についても、10月半ばから実施した。同時に、Ⅱ区の流路跡中央部に底面礫層下部の土層状況を確認するための深掘りトレンチを1本設定した。深掘りトレンチからは、わずかな遺物しか出土しなかったため、底面以下礫層の調査は部分調査とすることにした。

11月には、前半にⅠ区の流路跡底面上部の土層の除去及び、Ⅰ区で更に追加設定した深掘りトレンチの掘り込み及びⅢ区遺構の精査を実施した。11月7日(水)には、いわき市から鹿島歴史の会の会員約20名が現場見学に来跡し、調査成果について説明をした。11月10日(土)には、県教育庁文化財課主催による現地説明会を開催した。地区の住民をはじめ40名の参加があり、資料を配布し現地の調査成果を説明するとともに、出土品の一部を持参し、説明した。11月は、前半から雨などの悪天候に見舞われたが、その合間を縫って11月16日(金)にラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を実施した。11月19日からは、地形等の測量を行うとともに流路跡底面に設定したグリッドに沿った14か所の深掘りを行い、礫層から少量の遺物を取り上げた。11月29日(木)、30日(金)の2日間で現地仮設連絡所及び、仮設トイレの撤去を行いすべての調査を終了した。

12月3日(月)に県文化財課と国道交通省の立ち合いで現地引き渡しを実施した。その後深い部

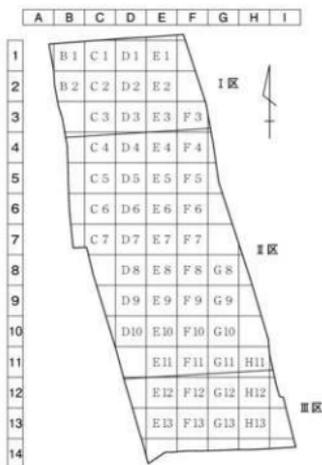


図4 グリッド配置図

今回の調査では、国土座標IX系を利用して、グリッド設定を行った。調査区の北東隅付近のX = 171,590, Y = 6,530の座標を基準として、10mごとに北から南にアラビア数字を1から番号順に、西から東にAからアルファベット順に番号を付けて、グリッド番号とした。また調査区を横切る農道を基準に北からI～III区の調査区を設定した。今回設定した国土座標は、東日本大震災でのずれを補正したものを利用している。グリッド杭については、表土削除後に検出面に、測量

による基準となる20本の杭の打設を委託し、それを元に他の杭を設定した。グリッド配置図については、図4に示した。

標高は、調査区の周囲に標高基準杭の打設を委託し、3か所にそれぞれ188,368m, 188,333m, 188,575mの標高基準杭を設定した。標高基準杭を元にして、現地に打設したグリッド杭にも標高を移動し、それを調査時の基準標高として利用した。

遺跡内での土層は、遺跡全体を基本土層となるものを「L I, L II…」で表記し、遺構内の堆積土については「ℓ 1, ℓ 2…」で表記した。

遺構の記録は、土坑・溝跡を原則1/20の縮尺で、流路跡を1/40の縮尺で実施した。また、流路跡内の杭列については、1/10の縮尺、遺物については、小さなものを1/10の縮尺、大型のものを1/20の縮尺で記録を行った。地形測量は1/200の縮尺で行った。測量にあたっては、遺構の密集している部分の平面図は水系を1m間隔で設置して実施し、それ以外の平面図については、光波測距儀を用いて記録を行った。遺物の番号は、特に流路跡を中心として、No.1から順番に番号を振り、出土地点と標高を記録した。

取り上げた遺物は、土器等については遺物カードに遺構・地点名・遺物番号・層位名・日付を記載しビニール袋に入れて持ち帰った。木製品については、小型のものは複数の種類の水を入れたタッパーに前記の遺物カードを入れ持ち帰った。大型の木製品については、水を入れた大型の平箱に遺物カードをつけて保管し、一部をサンプルとして持ち帰った。持ち帰らなかったものについては現地で樹種試料を採取し、簡易な記録を採った。

写真撮影は、35mm一眼レフカメラ2台を利用して、モノクロフィルムとカラーリバーサルの両

分の転落防止や調査区境界の崩落防止等の安全確保のために12月4日(火)から14日(金)の日程で、国土交通省と現地工事担当者の了解の下、埋戻し作業を行った。

2 調査方法

今回の調査では、国土座標IX系を利用して、グリッド設定を行った。調査区の北東隅付近のX = 171,590, Y = 6,530の座標を基準として、10mごとに北から南にアラビア数字を1から番号順に、西から東にAからアルファベット順に番号を付けて、グリッド番号とした。また調査区を横切る農道を基準に北からI～III区の調査区を設定した。今回設定した国土座標は、東日本大震災でのずれを補正したものを利用している。グリッド杭については、表土削除後に検出面に、測量

方のフィルムを使って実施した。更に一部については、デジタルカメラによる写真撮影も行った。調査区と流路跡の全景写真については、ラジコンヘリコプターを利用した空中写真撮影を行い、フィルムには35mmカメラと6×7判カメラによるリバーサルフィルムを用いた。また、空中写真撮影には、35mmデジタルカメラも利用した。(藤 谷)

第2章 遺構と遺物

第1節 遺構の配置と基本土層

本年度の調査では、溝跡13条、流路跡2か所、土坑2基が検出された。

溝跡は、近世以降と思われるものが、1・2～4・8・10～12号溝跡の8条、古代と思われるものが5・6・9号溝跡の3条である。近世のものは、特に2号溝跡と3・10～12号溝跡が調査区の中ほどで連続している。古代のものには、1号流路跡に流れ込むと考えられるもの(SD6・9)、1号流路跡に切れ、それより古いもの(SD5)がある。5号溝跡については、東側に支溝となるものが4か所で検出されている。

流路跡では、調査区の北半分を南南西から北北東方向に縦断する形で1号流路跡が検出されている。2号流路跡は1号流路跡の北半部の西側で検出されたもので、南南東から北北西方面に流れていたものと推定される。

土坑は、調査区中央よりやや南で1号土坑が5号溝跡の南壁の西側付近で検出されている。

基本土層は、大きく5層に分かれる。L Iが黒褐色の表土で、L IIが黒褐色粘質土、L IIIが灰褐色粘質土、L IVが礫層となっている。

L IIは、L IIIの上面に薄く堆積しており、調査区の中では、F 10～H 10グリッド付近から南に分布している。L IIIへの移行は連続的で漸位層的な部分も認められた。

L IIIは、表土下が流路跡の堆積土となっている調査区の北半部分とL IIが堆積している以外の部分で認められる層で、大部分の遺構がこの上面で検出されている。(藤 谷)

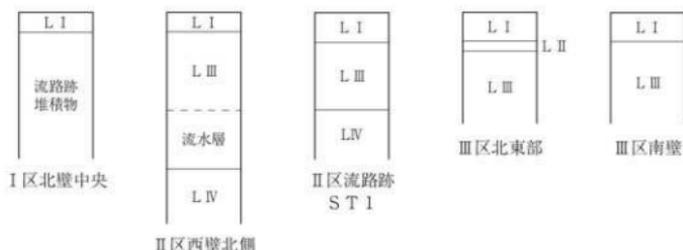


図5 基本土層柱状図

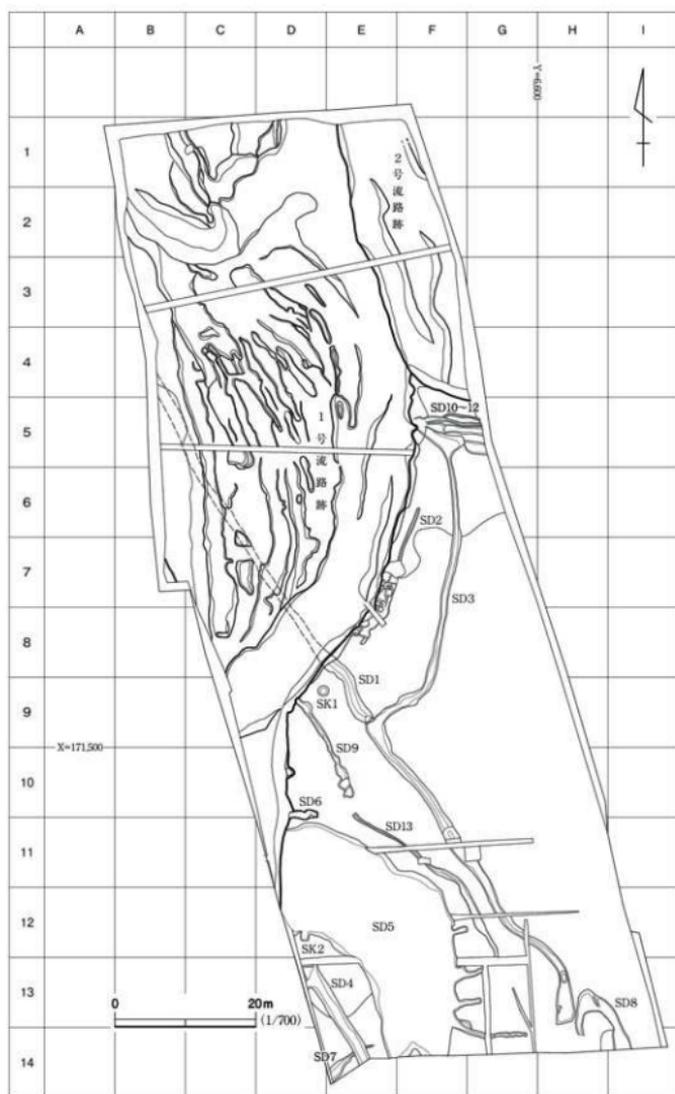


図6 遺構配置図

第2節 1号流路跡 (遺構 図7・15・40・43・45~47 写真5~24、 遺物 図16~39・41・42・44・48 写真36~55)

1 検出状況と上部の土層

流路跡検出面の堆積層については、当初試掘調査成果を元に、沼地等低湿地に堆積する土層で基本土層の一部となると考えていた。しかし、遺構検出を進めて行く中で、Ⅱ区を北東-南西方向の斜めに縦断する形でLⅢと流路跡上部堆積物である黒褐色粘質土が明瞭に分かれる形となった。そこで、黒褐色粘質土が堆積する部分の性格を確認するために、最初に検出した部分を横断する形で、幅約1mのサブトレンチを3本(ST1~ST3)設定し、土層の状況を確認した。その結果、LⅢとの境界部分が明瞭に立ち上がり、最下部では完形に近い形の土師器の杯や木製品が見つかり、人為的に掘り込まれた可能性と木製品を含む遺存状況の良い遺物が埋まっている流路の跡である可能性が高まった。

そこで、サブトレンチの本数を増やし、ST1~ST7の7本のトレンチを設定してその土層の状況等を確認することとした。ST4とST6については、特に東側への広がりを確認するべくⅡ区北側の道路の南に設定した。ST5と7については、Ⅰ区内での東西への流路の広がりを確認するために設定した。ST8については、2T西側から6T西側へと続く流水層の状況を確認するために設定した。ST9については、東側の壁面の立ち上がりを設定するために流路方向を横切る形で設定した。設定したトレンチのうちST4とST6、ST5とST7については、当初両サイドのみ設定し、必要に応じてつなげる予定であったが、1本につながり、結果的に1本のトレンチとした。

各トレンチの断面図を図8・9に示した。各トレンチともに底面に礫層が出てくる深さまで掘った。各トレンチの土層を観察すると大きくは以下の3層に分かれことがわかった。

まず、最上部に堆積する土(ℓ1)は、バミスと思われる白色の砂粒を含む黒褐色土(a層)で、Ⅱ区の北側とⅠ区ではそれが褐色の小礫層(b層)となっている。1a層は、特にⅡ区の西側で多くの遺物(摩耗した土師器など平安時代の土器)を含んでいた。これは、西木流C遺跡の集落の中心部分が調査区の西側に広がっており、そこから流れ込んだものと推定される。1b層は瀬川(せせなぎがわ)の氾濫によってもたらされた暗褐色砂質土で、Ⅱ区北側からⅠ区にかけて堆積しており、ℓ2を削る形で堆積している。

中ほどに堆積している層(ℓ2)は、黒褐色の粘質の強い土で小枝や茎・葉などの植物残存体を多く含む層で、流路跡が機能を停止した後、止水状態の湿地状の場所に周辺の植生を巻き込みながら徐々に堆積していったものと推定される。Ⅰ区では、湿地周辺に好んで生えるヤナギの原木が倒れ込み形で検出されている。この層からは11世紀~12世紀の年代測定結果が出た農具「コロバシ」も出土しており、流路としての機能停止後かなり長い年月をかけて埋まったものと考えられる。また、炭化物を多量に含む薄い層も共通で検出されており、周辺でおきた野火や山火事等を示す堆積物で

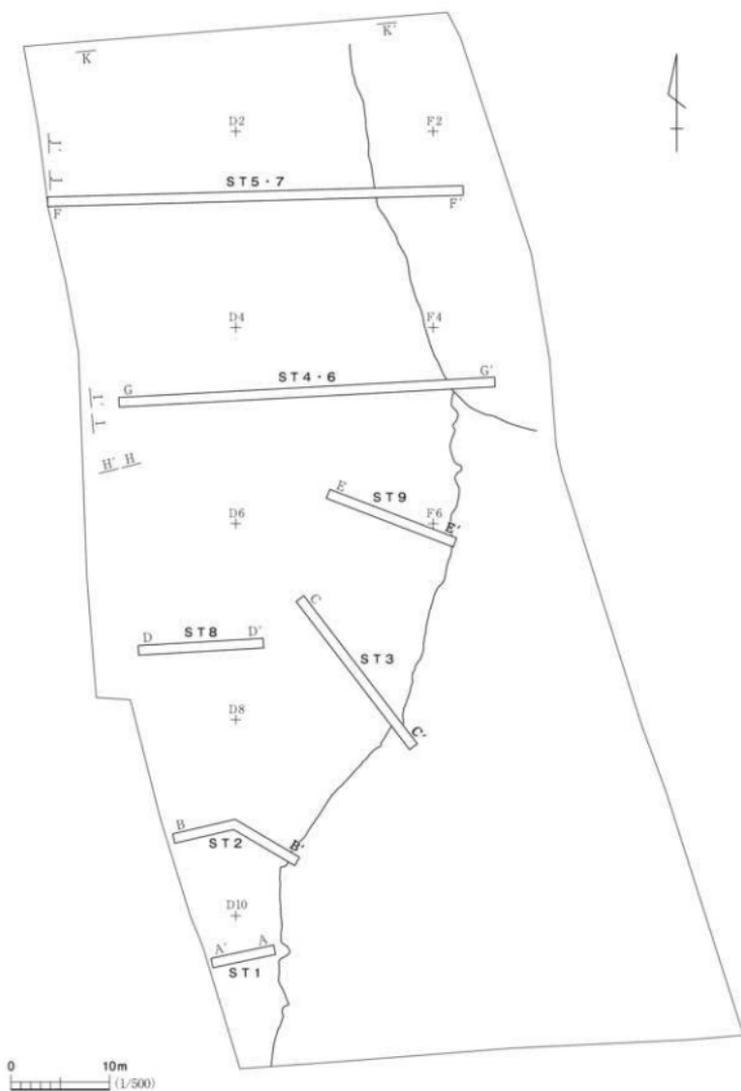


図7 1号流路跡サブトレンチ壁断面位置図

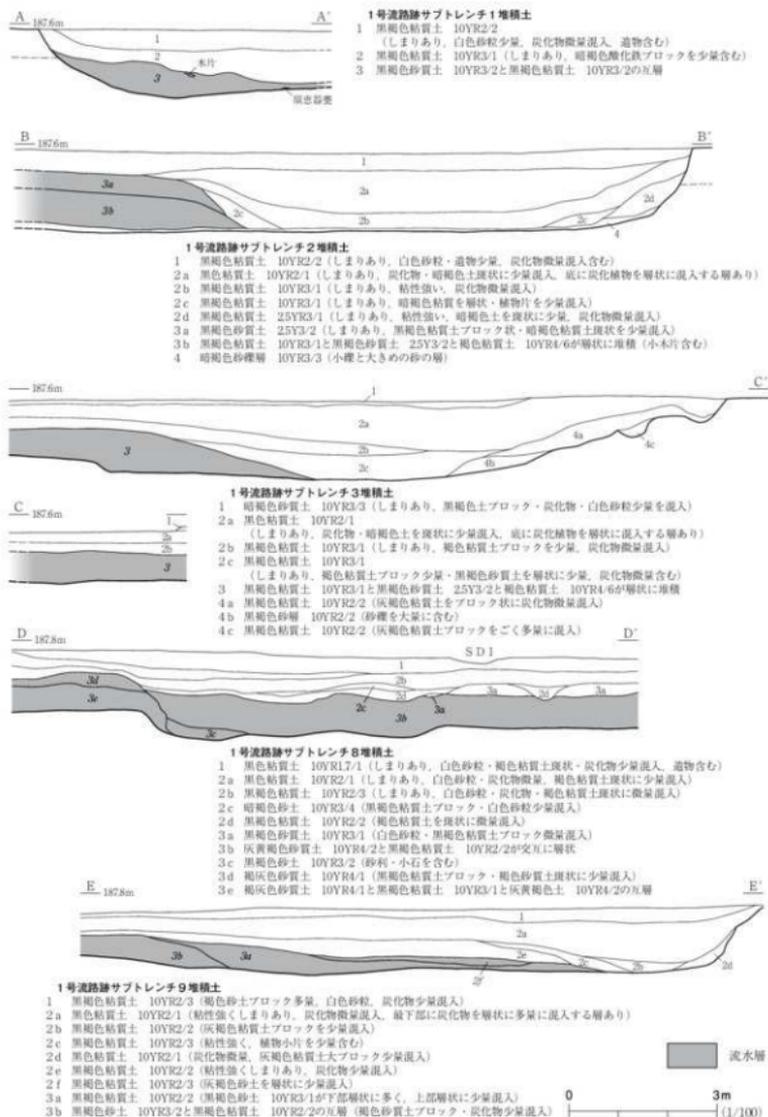


図8 1号流路跡サブテラス1～3、8・9土層断面図

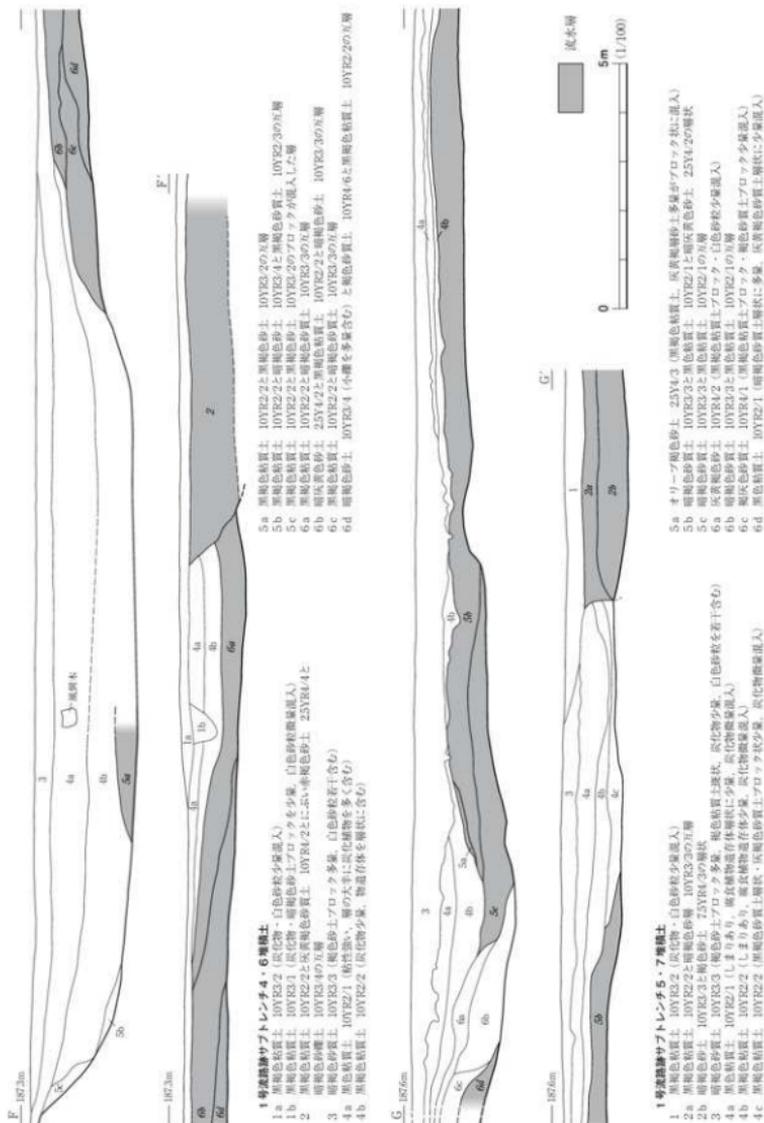
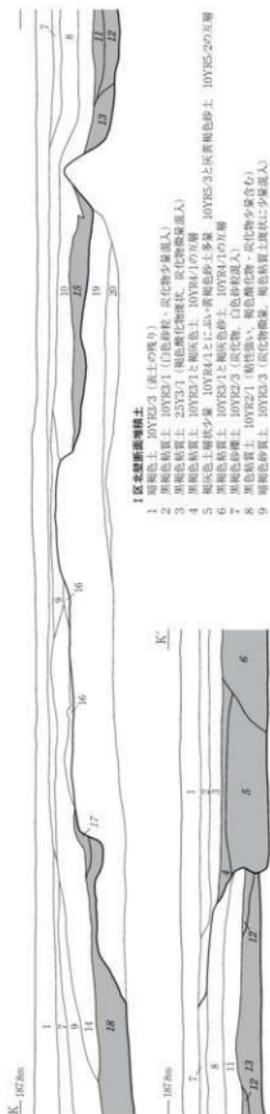


図9 1号流路跡サプトレンチ4・6・5・7土層断面図



1 区本群層地質略図

- 1 暗褐色土 10YR5/3 (粘土の残り)
- 2 黒褐色粘質土 10YR5/1 (白色砂状、炭化物少量混入)
- 3 黒褐色粘質土 25Y3/1 (褐色炭化物状、炭化物微量混入)
- 4 黒褐色粘質土 10YR2/2 と同じ、黒褐色土 10YR4/1 の互層
- 5 黒褐色粘質土 10YR2/2 と同じ、黒褐色土 10YR4/1 の互層
- 6 黒褐色粘質土 10YR2/2 と同じ、黒褐色土 10YR4/1 の互層
- 7 黒褐色粘質土 10YR2/2 (炭化物、白色砂状混入) (1層)
- 8 黒褐色粘質土 10YR2/1 (粘性強い、褐色炭化物、炭化物少量含む)
- 9 暗褐色粘質土 10YR3/3 (炭化物微量、褐色粘質土層状に少量混入)

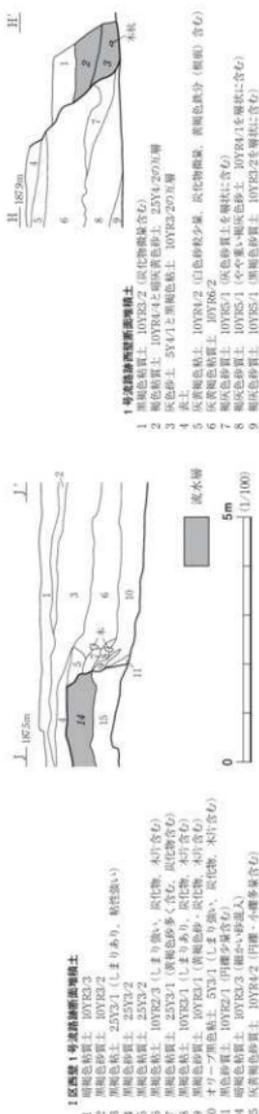
II 区西壁 1 号流路断面地質略図

- 1 粘土上
- 2 暗褐色粘質土 10YR3/3
- 3 黒褐色粘質土 25Y3/2
- 4 オリーブ褐色砂質土 25Y4/3 (細かい砂混入) 5
- 5 暗褐色粘質土 10YR2/2 (粘性強い、褐色炭化物、炭化物少量含む)
- 6 暗褐色粘質土 25Y3/2 (1層多量、オリーブ褐色砂質土を層状に含む)
- 7 オリーブ褐色粘質土 25Y4/6 (細かい砂混入)
- 8 黒褐色粘質土 25Y3/1
- 9 暗褐色粘質土 5G5/1 (しまりあり、粘性強い)
- 10 粘土上、黒褐色粘質土 10YR5/3
- 11 灰色砂質土 10Y3/1 (細かい砂混入)
- 12 灰オリーブ褐色粘質土 5Y5/3 (細かい砂混入)

III 区西壁 1 号流路断面地質略図

- 1 暗褐色粘質土 10YR3/2 (炭化物微量含む)
- 2 暗褐色粘質土 10YR2/2 (炭化物微量含む)
- 3 灰色砂土 5Y4/1 と黒褐色粘質土 10YR3/2 の互層
- 4 粘土上
- 5 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 (白色砂状少量、炭化物微量、黒褐色粘質土を層状に含む)
- 6 灰黄褐色粘質土 10YR6/2
- 7 灰色粘質土 10YR5/1 (やや細かい褐色砂土、10YR3/1 を層状に含む)
- 8 灰色粘質土 10YR5/1 (やや細かい褐色砂土、10YR3/1 を層状に含む)
- 9 暗褐色粘質土 10YR5/1 (細かい砂混入)

図10 1号流路跡 I 区調査区北壁、I・II 区調査区西壁、II 区調査区西壁土層断面図



1 区西壁 1 号流路断面地質略図

- 1 暗褐色粘質土 10YR3/2
- 2 黒褐色粘質土 10YR3/2
- 3 暗褐色粘質土 25Y3/1 (しまりあり、粘性強い)
- 4 暗褐色粘質土 25Y3/2
- 5 暗褐色粘質土 10Y3/2 (しまりあり、炭化物、木片含む)
- 6 暗褐色粘質土 25Y3/1 (黒褐色砂多量含む、炭化物微量含む)
- 7 暗褐色粘質土 10YR3/1 (しまりあり、炭化物、木片含む)
- 8 暗褐色粘質土 10YR3/1 (黄褐色砂、炭化物、木片含む)
- 9 オリーブ褐色粘質土 5Y3/1 (しまりあり、炭化物、木片含む)
- 10 暗褐色粘質土 10YR2/1 (同層少量含む)
- 11 暗褐色粘質土 10YR3/3 (細かい砂混入)
- 12 暗褐色粘質土 10YR3/2 (同層少量含む)
- 13 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 (1層、小量多量含む)

II 区西壁 1 号流路断面地質略図

- 10 黒褐色粘質土 10YR3/1 (褐色炭化物少量、炭化物微量混入)
- 11 黒褐色粘質土 10YR3/1 (褐色炭化物を層状に少量含む)
- 12 黒褐色粘質土 10YR2/2 と同じ、黒褐色土 10YR4/3 を層状に含む
- 13 黒褐色粘質土 10YR2/2 と同じ、黒褐色土 10YR4/3 を層状に含む
- 14 炭化物、木片少量混入)
- 15 暗褐色粘質土 10YR3/4 (暗褐色粘質土層状、炭化物微量混入)
- 16 暗褐色粘質土 10YR3/2 (暗褐色粘質土を層状に含む)
- 17 暗褐色粘質土 10YR3/2 (暗褐色粘質土を層状に混入)
- 18 粘土上、黒褐色粘質土 10YR4/3 と黒褐色粘質土 10YR3/2 の互層
- 19 礫層 (砂とコブナク-5mmの礫を含む)
- 20 粘土上、黒褐色粘質土を層状に少量含む) 10YR5/4

ある可能性がある。ℓ2については、遺物の出土はあまりなく、底面の礫層上面でやや多く見つかる傾向があった。

底面の礫層上面に堆積している層(ℓ3)は、砂層と粘土層が細かい幅で交互に堆積している層で、流水の作用によって堆積した層と考えられる。Ⅱ区のST1では完形に近い土師器の甕や木製品が、Ⅰ区のST4・6ではこの層から土師器甕のほぼ完形のものが出土しており、底面近くで良好な状態の遺物が残されている可能性が考えられた。

ST4・6とST5・7では2号流路跡との重複関係にあるため、4層がℓ2に、5層がℓ3に該当する。

ℓ2とℓ3の関係を見てみると、Ⅱ区の東側に設定したST2・3・9の各トレンチでは、ℓ2が東側に偏って堆積しており、西側でもゆるやかに立ち上がる傾向が認められる。これらからⅡ区については、最終的に主要な流路跡として機能して埋没したのは、東側であると推定される。

検出時に入れた7本のサブトレンチ以外にも、3か所の調査区の壁面とグリッド付近の西壁立ち上がり付近で記録を取り、図10に示した。

西壁の断面H-H'、I-I'から1号流路跡が基本土層のLⅢ灰褐色粘質土を切った形で検出されているのが観察される。

また、Ⅰ区に設定したJ-J'の断面では、Ⅱ区西側の流水層を中心とした古い段階の流路跡を止水堆積土が明確に切る形で検出された。これは、ST4・6の西側の止水堆積が認められる流路跡部分については、Ⅱ区東側同様に西側の古い段階の流路跡よりも新しいことを示すものと思われる。Ⅰ区のこの新しい段階の流路跡とⅡ区西側の古い段階の流路跡との境界については、南北の断面で検出することはできなかったが、底面の形状からⅠ・Ⅱ区境界の旧道付近と推定される。

この他、ST5・7とST4・6、それにⅠ区北壁の断面では、東側で1号流路跡を切った形で2号流路跡が検出されている。

7本のトレンチ設定後、遺物が多く含まれるⅡ区の西側部分について手掘りでℓ1の掘り下げを行い、その後、流路部分のℓ2及びℓ3については、遺存状態の良い遺物が含まれる底面礫層上部の40cm位の部分を残して重機を用いて掘り下げを行った。

2 流路跡の形状について

流路跡の全体図を図11に示した。調査区の中での規模は、南北の長さが約106m、東西の長さが約30mとなっている。底面の標高は、調査区の南端部分で186.3m、中央のE5グリッド付近で186.1m、調査区北側のD1グリッド付近で185.2m、調査区内での南北の比高は約90cmとなっており、基本的に南から北流した流路跡であると考えられる。検出面からの深さは南半部の東側で約140～160cm、北部のB2グリッド付近で150cmとなっている。また、図示した全体図の礫層底面については、後述のとおり、礫層下部に更に砂層が認められるところから、流路として機能した時期の最後の礫層面であると理解している。

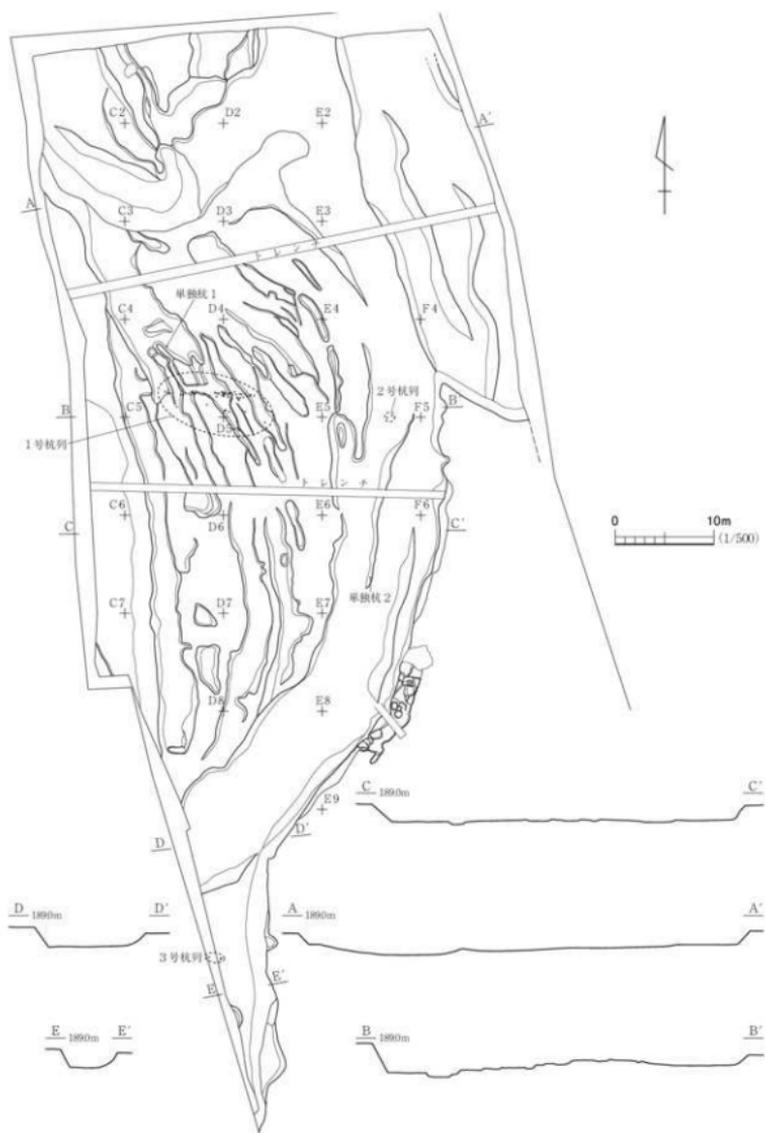


图11 1号流路跡全体图

この底面の東側部分はほぼ平坦な形状であるのに対してC7・D7グリッドより北側のC3・D3グリッド付近までは、流水による作用によってできた結果と思われる階段状の形状が認められる。D8グリッドから北流し、さらにC5・D5グリッド付近からやや西よりに流れの方向が変わったことが認められる。

更に北側底面についてはC1グリッド付近の礫層が高まる箇所があり、それを囲むようにD1グリッドからC2グリッドを通りB1グリッドまでゆるい逆「U」字状の形状を呈している。調査区西壁F-F'の土層断面から、また検出時の状況では、 $\ell 2$ の黒褐色土が底面の状況と同じ状態であったため、中央付近を南より北流してきた古い段階の流れよりも新しい時期に形成された可能性が高い。東側の新しい流れとの関係については、北壁の断面の状況から時期差を確認することができなかった。同時期である可能性もある。

3 遺物の出土状況について

流路跡内で、Noを付けて取り上げた遺存状況の良好な遺物の出土位置を図12・13に示した(番号は図16以降の遺物番号である)。更に、グリッド付近にある集中部については、拡大図を図13に掲載した。遺物のほとんどは底面礫層のすぐ上の流水層である砂層から出土している。

遺物の出土状況を流路跡の平面の状況と照合したところ、大きく、以下の3つのグループに分けることができた。

Aグループ：断面の状況や底面の状況から新しい流れと思われる東側部分の底面近くで見つかったグループ

Bグループ：流水による階段状の底面の形状付近から見つかったグループ。一番大きなまとまりはD6～D7グリッド付近にある。こちらについては、図13に拡大図を示した。他にC3グリッド付近にもまとまりがある。

Cグループ：北側部分の逆「U」字形の底面付近から見つかったグループ

Aグループについては、含まれる31点中、木製品に占める割合が低く、5点となっている。一番多いのは、土師器で杯類がほとんどである。No67の刀子のような金属製品も含まれていた。

Bグループについては、一番集中しているD6～D7グリッド付近で見ると、19点中土器類は2点のみで、他はすべて木製品といった特徴を持っている。この付近で出土した木製品の内訳は、挽物類が6点、曲物底板が4点、齋串が3点となっており、日常生活用具に混じって祭祀具も出土している。C3グリッド付近の12点の内、木製品が10点と同じように木製品類が多くを占めている特徴がある。木製品の中では祭祀具の齋串が5点と半数を占め、南側の集中地点よりも祭祀具が多い特徴をもつ。

Cグループについては6点中、木製品は1点のみとAグループ同様に土器類が多い状況となっている。

最も深い部分にある礫層の上面に近い部分であるA・Cグループでは、土器類が圧倒的に多いの

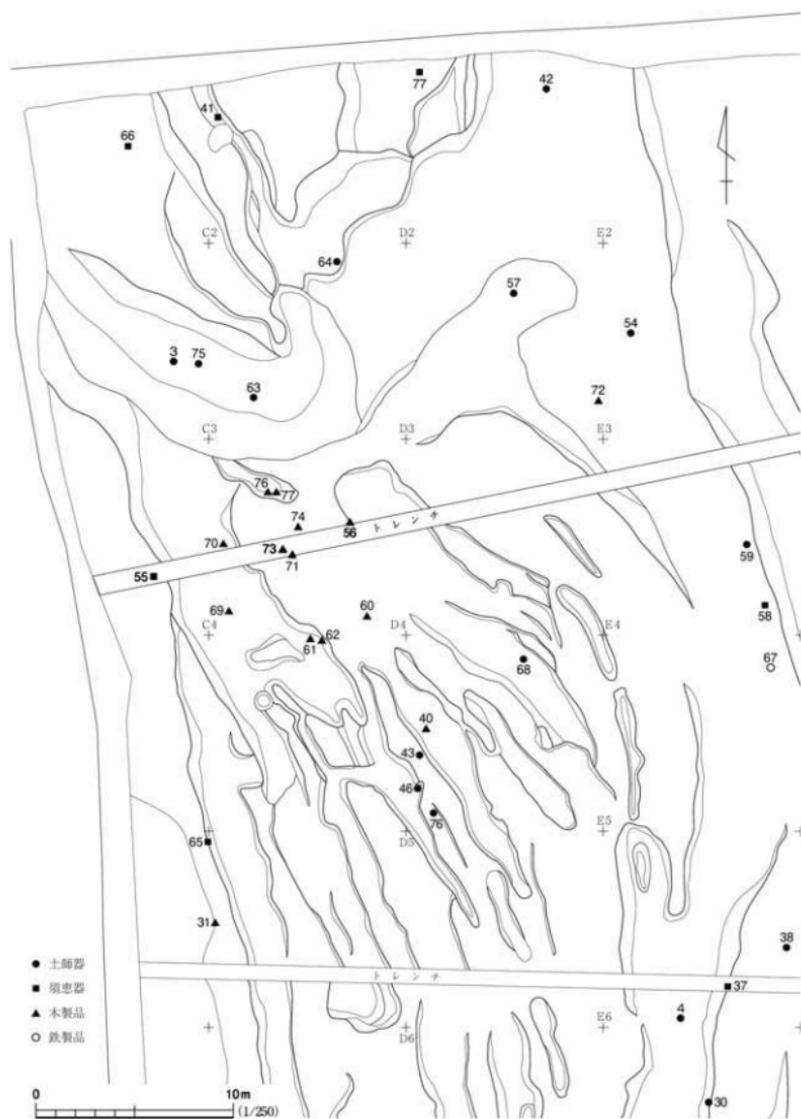


図12 1号流路跡遺物出土状況(1)

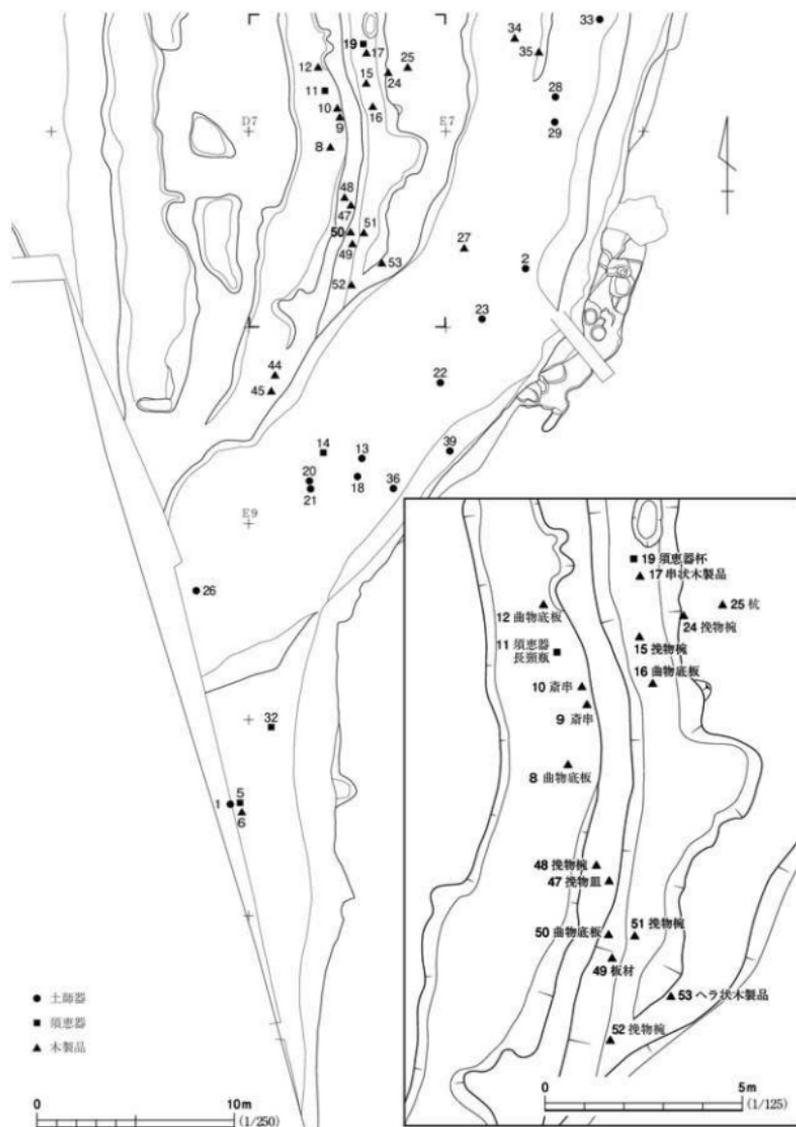


図13 1号流路跡遺物出土状況(2)

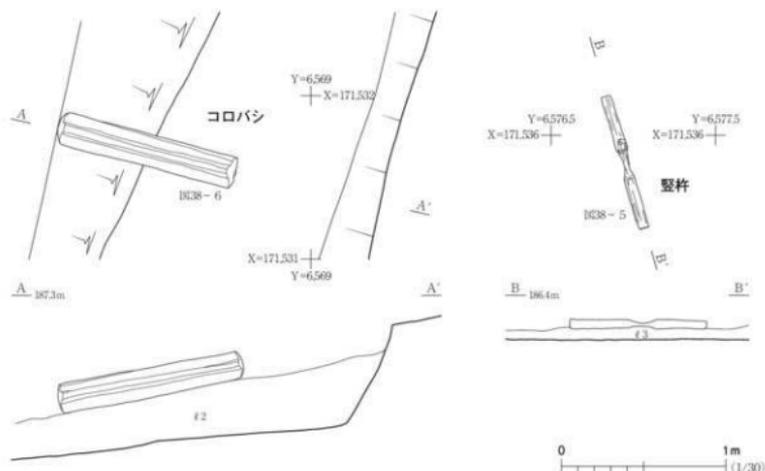


図14 1号流路跡遺物出土状況(3)

に対して、流路の流水による階段状の底面で見つかったBグループでは、木製品が多い傾向がある。これは、遺構の性格からして当然と思われるが、軽い木製品は流水によって上部を流れ、その流れの中に上流から流れてきた遺物等がたまりやすい場所が形成され、その部分がBグループであると考えられる。これに対して流路の深い中心部分であるAグループについては、重量のある土器類が残されていたものと思われる。

図14に示した農具「コロバシ」については、流路跡中央部東壁際の堆積土②中から検出されている。礫層底面からの「コロバシ」までの高さは25～30cmとなっており、検出時の状況から流路跡が埋没時に東方向から流れ込んだか、または廃棄されたものと思われる。竪杵については、底面でのBグループに近い場所で検出されており、上流から流れた途中で埋没したものと思われる。

建築部材の可能性がある部材については、流路跡の南側のD8・9グリッド付近で検出されている。木材1は本来1本であったと思われるが、南のものは長さ100cm、幅30cm、材はマツである。木材2は長さ140cm、幅20cmである。木材3は、長さ104cm、幅38cm、材はコナラ節である。いずれの部材も底面の礫層より若干上にあり、こちらについても上流から流れた途中で埋没したものと思われる。

流木類については、2つのグループを図示した。B4グリッドの溝状の底面から見つかったものは長さ305cmのものと220cmのもの2本で、西側が散孔材、東側がコナラ節であると思われる。加工した痕跡は認められないが、②中等に含まれる明らかに埋没中に流れ込んだ木材とは異質で、建築部材の一部として利用可能な木材であると考えている。

図15の流木2として示した大木は、ST4・7の掘り込み中に途中の②から一部が検出され

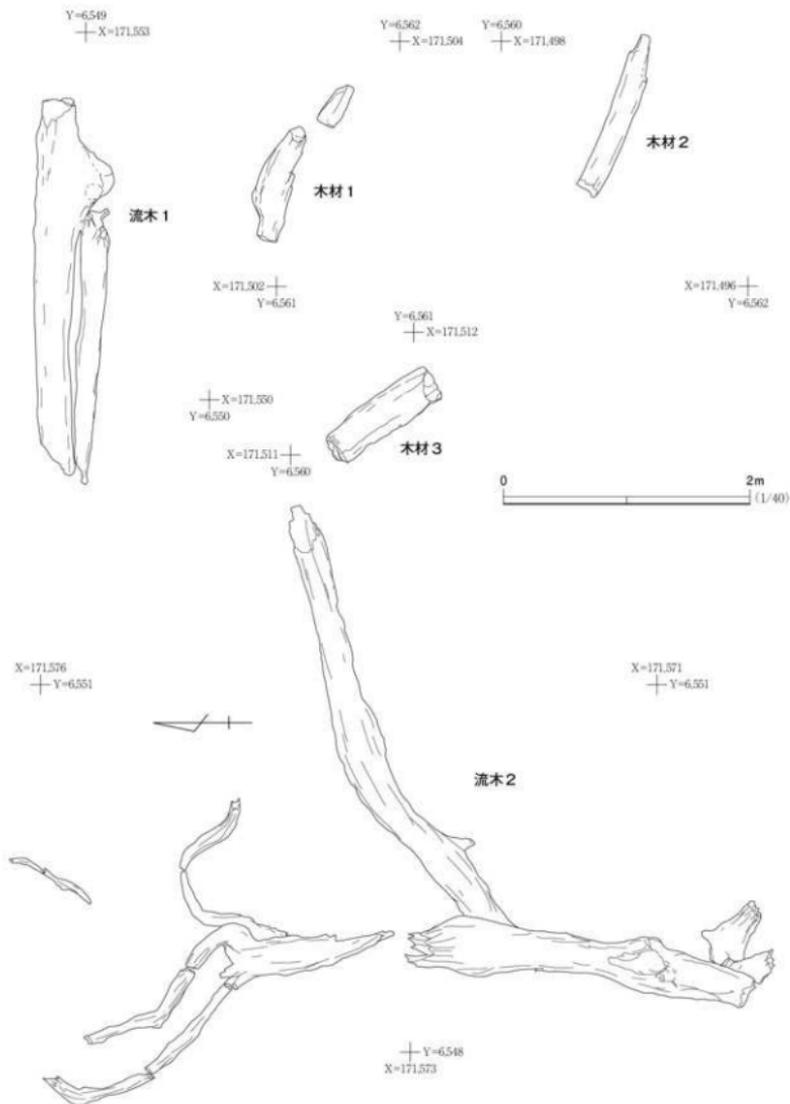


图15 1号流路迹遺物出土狀況(4)

たものある。検出当初、流木1のような建築部材に利用可能なものかと思われたが、樹種を同定した結果、ヤナギであることが判明した。周囲を掘り進み全体を検出していく中で、湿地帯に好んで生育するヤナギが倒れてそのまま埋没したものと推定した。

4 出土遺物について (図16～39 写真36～55)

流路跡の最終礫層面上及びその上部の堆積土から出土した遺物を図16～39に示した。以下、種類ごとに概観する。

土師器杯 (図16, 図17, 図18-1～5)

流路跡から出土した土師器杯については、そのすべてがロクロ成形のもので、器形、底部から体部下端の調整、内外面の調整にかなりのバリエーションが認められる。1号流路跡については、断面等の状況から複数の時期にわたって機能していたと考えられるため、その時期をある程度、反映したと思われる。

図16-1～12は、内面黒色処理・ヘラミガキされ、底部から体部下端にかけてケズリ調整が施された杯である。底部全面から体部下端に回転ヘラケズリが施されたもの(1～9)、底部端から体部下端に回転ヘラケズリが施されたもの(10・11)、底部から体部下端に手持ちヘラケズリが施されたもの(12)がある。器形としては、口径に対して深めの器形をもつもの(1・2)、体部がやや内湾気味に立ち上がり口縁部がやや外反するもの(4・7・10)、口縁部が外傾気味に立ち上がるもの(9)等がある。これらのうちで、1については体部に二本の縦書きのものが、2については体部に円形の中に点が入る墨書が認められる。文字としては判読できなかった。

図16-13・14, 図17-1～12は内外面にミガキ調整が施されたものである。これらのうち図16-14, 図17-4・5・7・8は内外面に黒色処理が施されている。また、図17-12については、内面に黒色処理が施されていない。底部から体部下端にかけての調整は、回転ヘラケズリ調整のものと手持ちヘラケズリ調整のもの双方がある。器形については、底径指数が36以下と口径に対して底径が小さく、底部から内湾気味に立ち上がり、口縁部に向けて外傾気味に立ち上がるもの(図17-3・5・6・8)、器高指数が30前後と口径に対して器高が浅く、口縁部が外反するもの(図17-4・12)、外傾気味に立ち上がり口縁部が内湾するもの(図17-1)等がある。

図17-13・14, 図18-1・2は、内面がミガキのみの調整で黒色処理されていないもので、底部から体部下端までの調整はいずれも手持ちヘラケズリとなっている。器形には底部から口縁部にかけて外傾気味に立ち上がるもの(図17-13・14)と小型の底部から内湾気味に立ち上がり口縁部が外反するものがある。図18-2には「大」の墨書がある。

図18-3～5は、内面にヘラミガキ・黒色処理され、底部から体部下端にかけて調整が施されず、糸切り痕を明瞭に残すものである。器形は、底部から口縁部にかけて外傾気味に立ち上がるもの(3, 5)と内湾気味に立ち上がるもの(4)がある。

赤焼土器杯 (図18-6～14, 図19-1～10)

内外面に調整が施されず、底部に切り離し痕が認められる所謂赤焼土器と呼ばれるものである。器形には底部からやや丸みを帯びて立ち上がり、口縁部が外反するもの(図18-6)、器高指数が25前後と口径に対して器高が浅い器形で、外傾気味に立ち上がるもの(図18-7~10、図19-1)、底部から内湾気味に立ち上がり口縁部が外傾するもの(図18-11)、底部から内湾気味が立ち上がり、口縁部が外反するもの(図18-12~14)、器高指数が30以下と浅い器形の小型のもので、口縁部が内湾気味に立ち上がるもの(図19-2・3)がある。

他に図19-4・6~8・10は土師器杯の体部破片、5・9は底部破片である。体部破片については、高台杯となる可能性もある。うち6~10に墨書が認められ、6が「大」、7が「西」と判読できる。

土師器高台杯 (図19-11~19)

器形の判別する11では、外傾する体部に高台が付く器形で、内面にはヘラミガキ・黒色処理が施されている。高台部の破片では、高台下部に段を有するもの(17・18)があり、17については、外面にも黒色処理が施されている。

土師器壺 (図19-20)

複合口縁の壺の破片が1点のみ出土している。古墳時代の土師器壺の口縁で器面も荒れており、周辺より流れ込んだ遺物と思われる。

土師器甕 (図20、図21-1~5)

すべてロクロ成形で、長胴のものと小型のもの、器高が浅く鍋状を呈するものが出土している。

図20-1は、口縁部と体部との境界が「く」の字状に括れ、口縁部が外傾する長胴のものである。体部下半と内面にはナデ調整が施されている。

図20-2~7は、口縁部と体部との境界が強く括れ、口縁部に段を有する長胴のもので、3を除いて胴部中位付近に最大径がある。口縁部の段については、口縁が直立に近い形の明瞭な段を有するもの(4・7)と、外傾する中に段が認められるもの(2・3・5・6)がある。このうち、6はST4・6の底面付近からはほぼ完形の状態で見つかったもので、胴部内面にナデ痕が、外面にはタタキの後にナデの痕跡が認められる。

図20-8、図21-1・2は、体部と口縁部との境界の括れが弱い器形の長胴のもので、口縁部が緩く外反し口縁が肥厚するもの(図20-7)、口縁が外傾し、口縁部に段を有するもの(図21-1・2)がある。このうち、図21-2について内面にナデ調整が認められる。

図21-3は小型の甕で、体部中位が丸みを帯びる器形で、体部下端に手持ちヘラケズリが施されている。口縁部外面には不明瞭な稜線が認められる。

図21-4は鍋形を呈する甕で内面に黒色処理・ヘラミガキが施されている。口縁部は強く外反し外面には明瞭なロクロ痕が残されている。

図21-5は、甕の底部で内面にナデが施されている。

土師器筒形土器 (図21-6~27)

内外面に輪積み痕を明瞭に残す土器で、口縁部を含む細片が出土している。うち、22点を図示

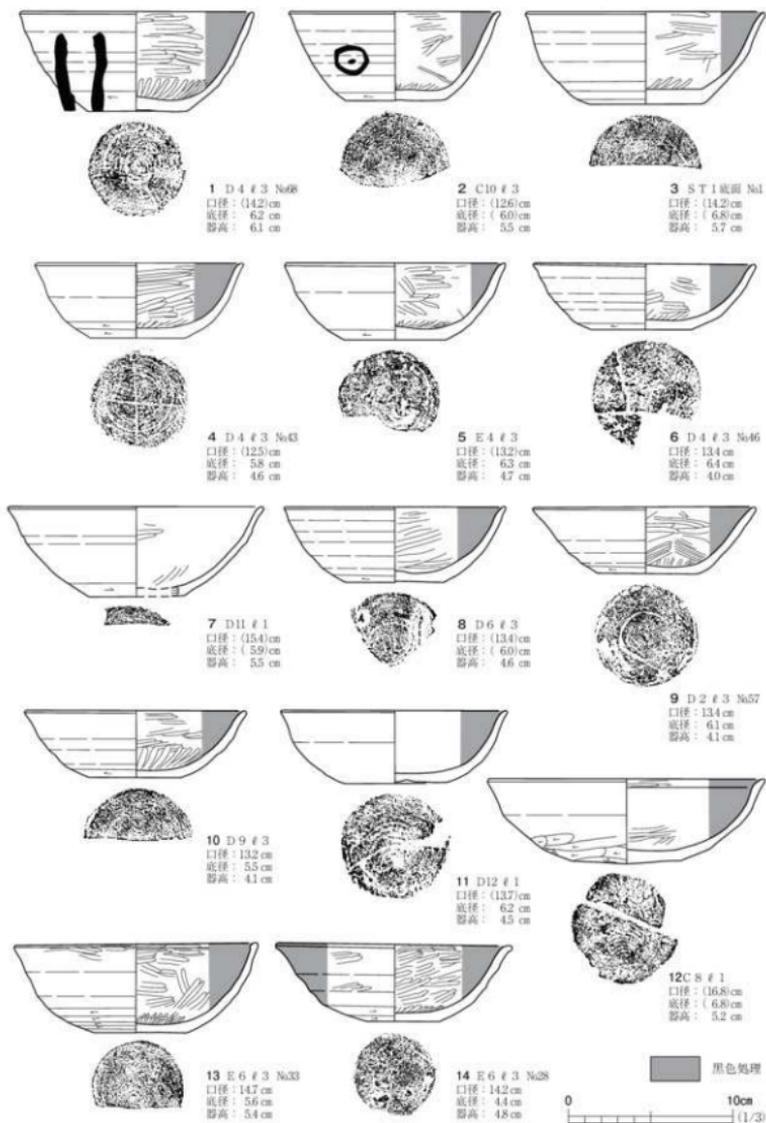


图16 1号流路跡出土遺物(1) 土師器①

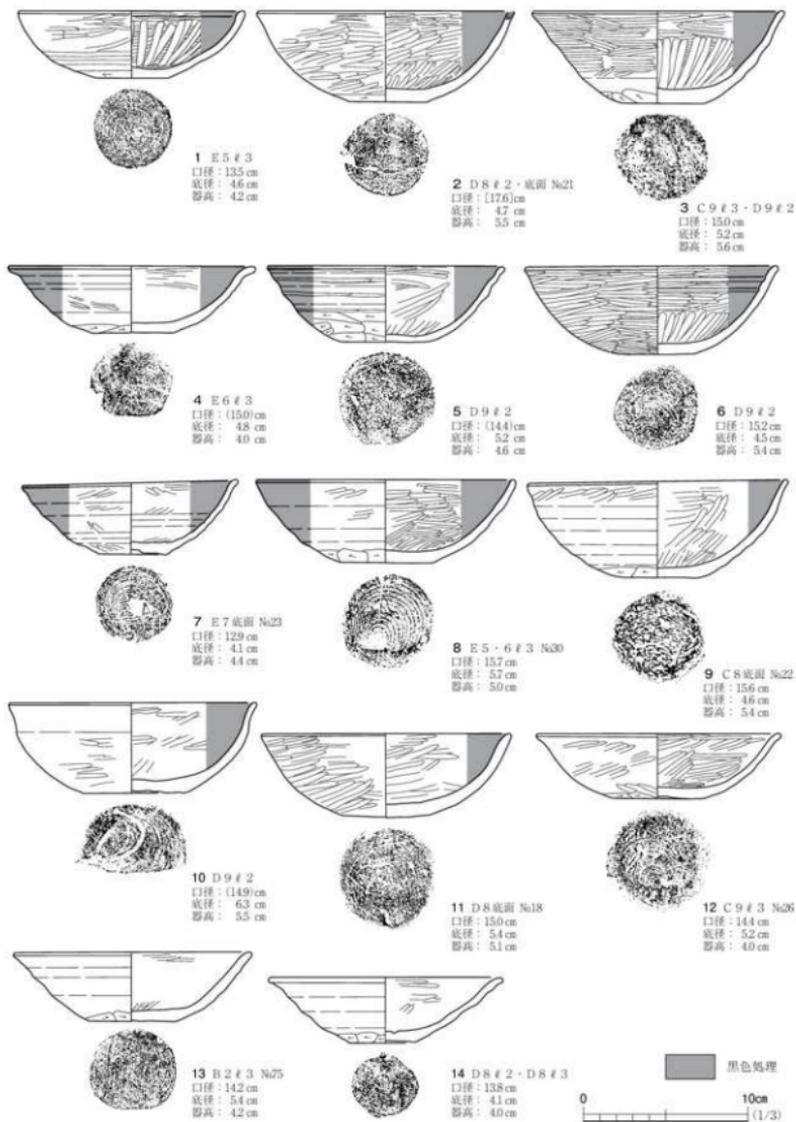


図17 1号流路跡出土遺物(2) 土師器②

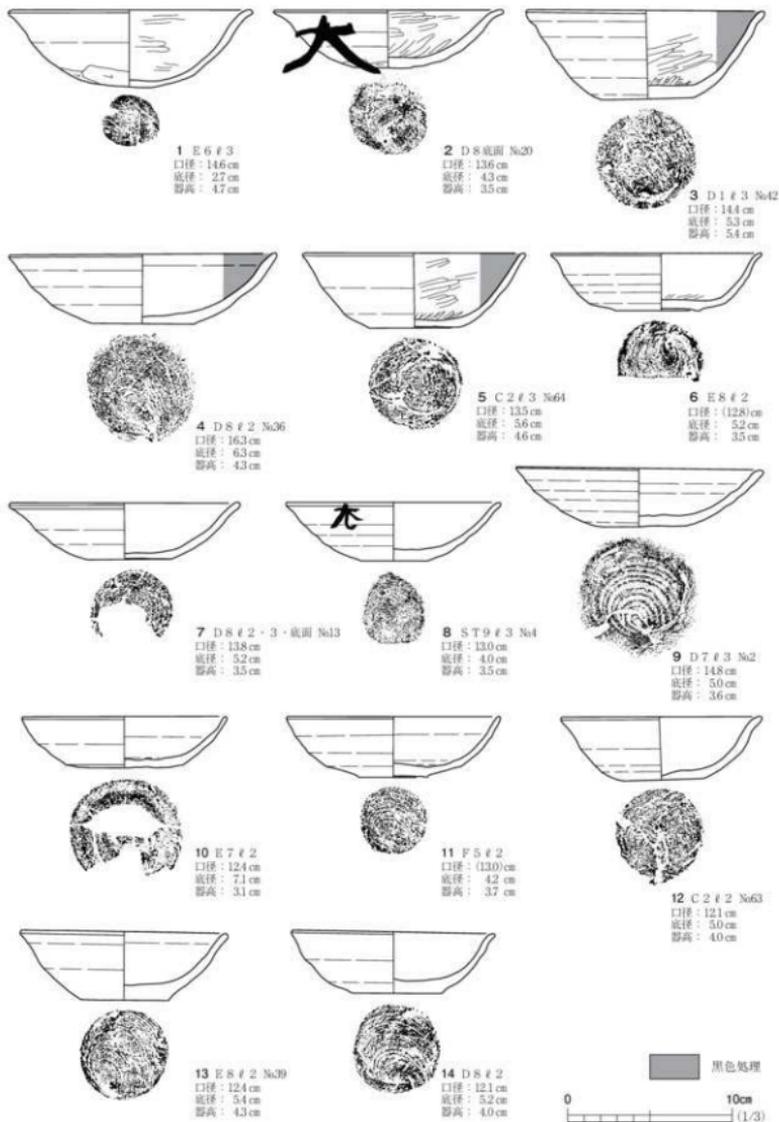


图18 1号流路跡出土遺物(3) 土師器③·赤焼土器①

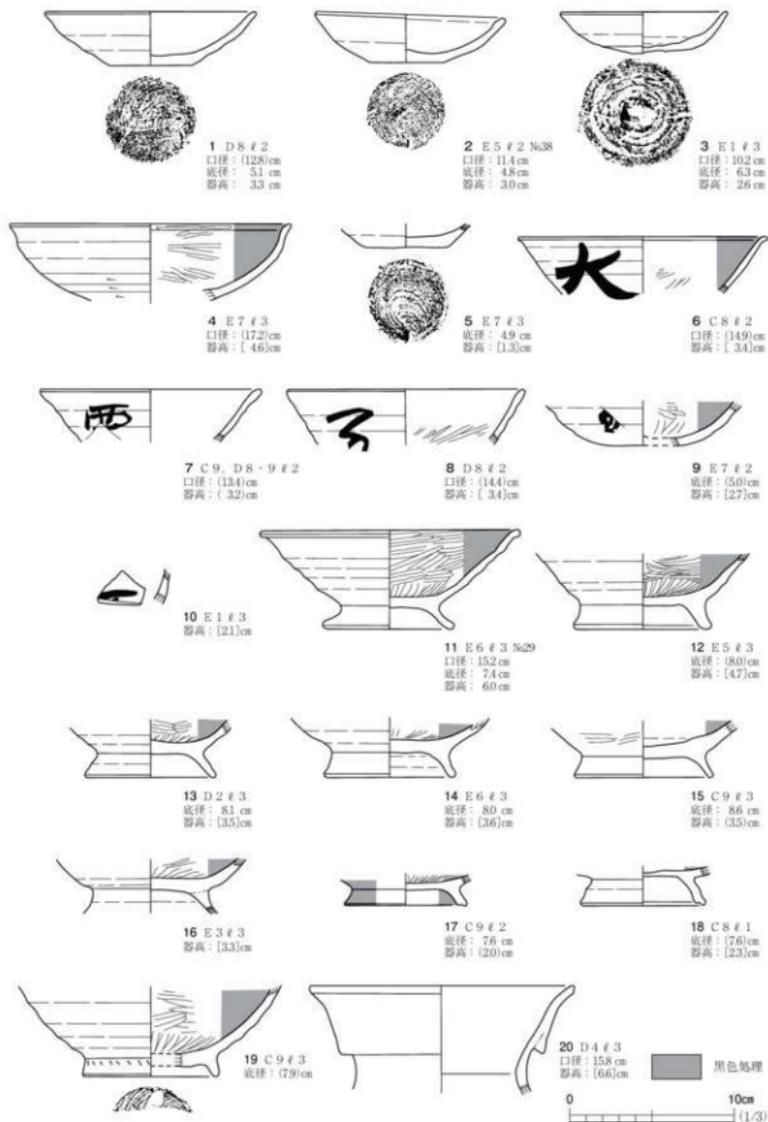


図19 1号流路跡出土遺物(4) 土師器④・赤焼土器②

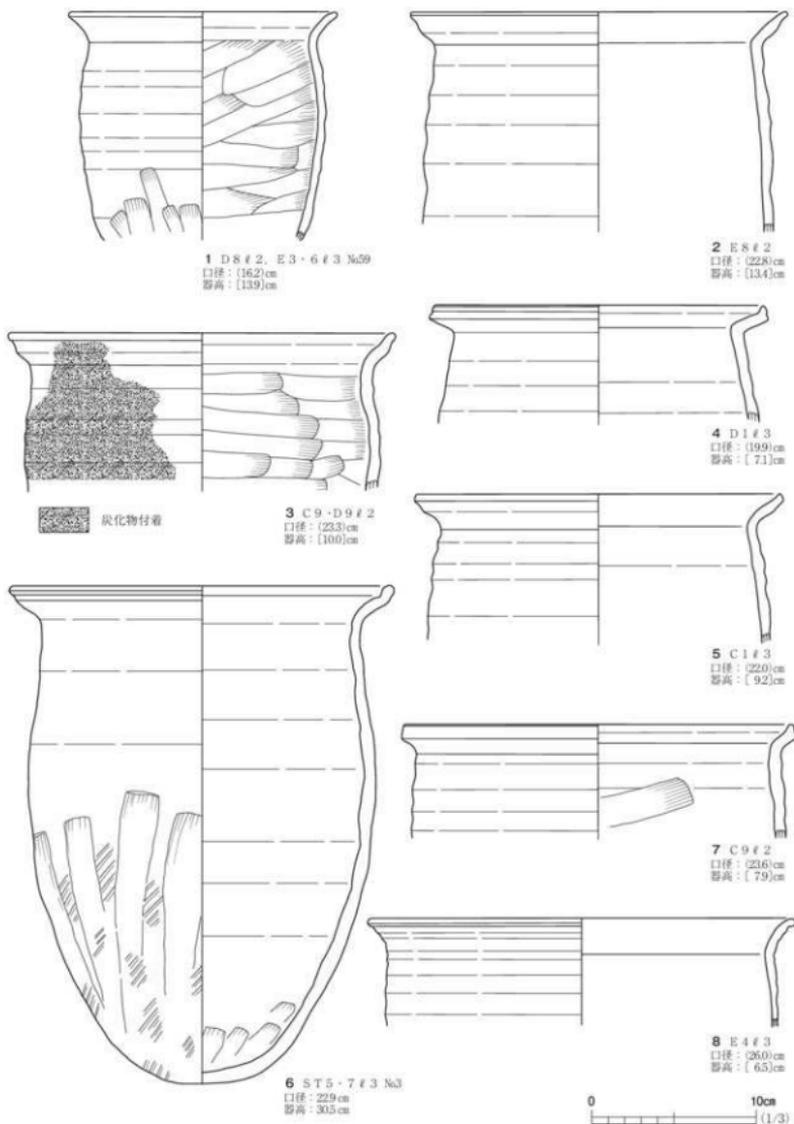


図20 1号流路跡出土遺物 (5) 土師器⑤

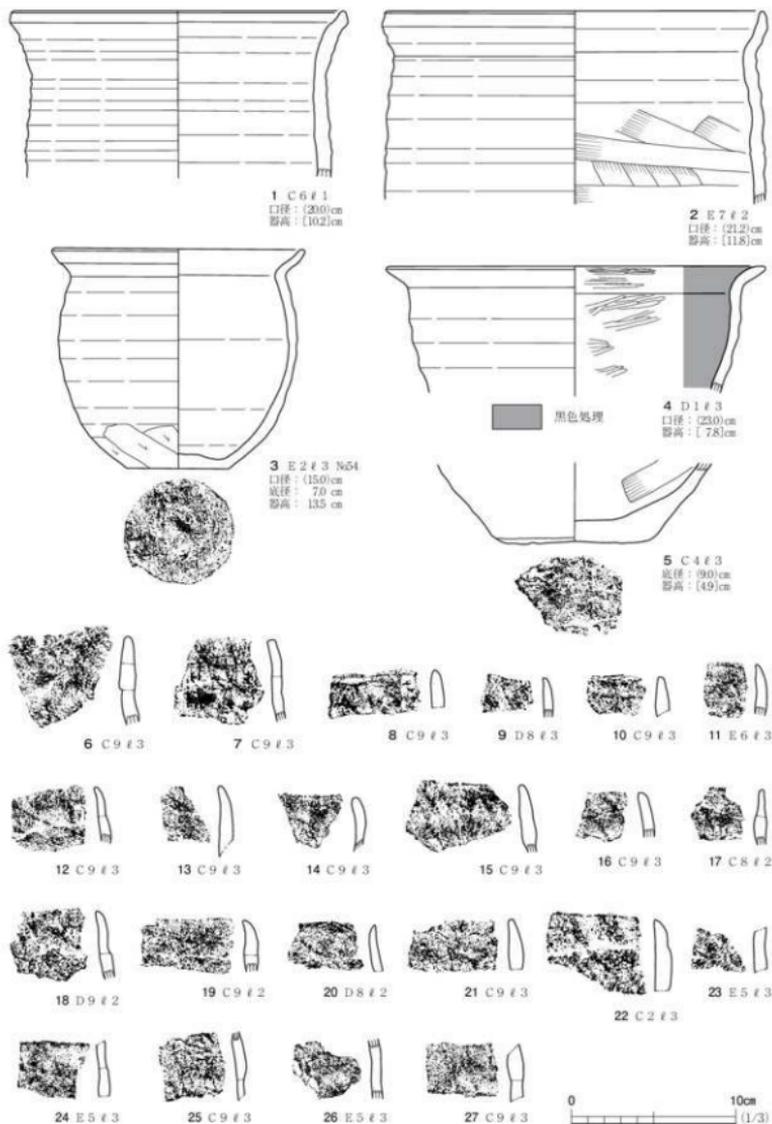


図21 1号流路跡出土遺物(6)土師器⑥

した。6～22は口縁部の破片で、口縁部が内湾気味に内傾するものや直立に近い形態のものなどがある。胎土に砂粒を多く混入し、内面はナデ調整されている。内陸に運ばれた製塩関係の土器と考えられる。

須恵器杯・高台杯 (図22-1～8)

回転ヘラ切り痕を残すもので、器形がわかるものは4点で、体部が内湾気味に立ち上がり口縁部が外傾するもの(1)、外傾気味に立ち上がるもの(2・3)、外傾気味に立ち上がり口縁部がわずかに外反するもの(4)がある。底径指数は46～55、器高指数は25～28となっている。

6は高台杯で、高台内面に段を有する。

杯のうち、2・5・7・8には墨書が施されている。文字については、5が「中万」、7が「山根」「池」と判読できる。2については篇の部分が不明瞭であるが、旁の部分は「子」と判読できるので「仔」の可能性が高い。

須恵器蓋 (図22-9・10)

摘み部は欠損しているが、小型で口縁部に段を有し直立するもの(9)、体部上位がやや膨らみ口縁部に向かって開き、口縁部に段を有するもの(10)がある。

須恵器長頸瓶・壺類 (図22-11～15、図23-1～11)

図22-11・12・14・15は長頸瓶の口縁部である。口縁が遺存しているものでは、外側に張り出す段を有するもの(14)と張り出し部を持たず鋭い段が付くもの(11)がある。体部との境界が遺存しているもの(12・13)ではその部分にリング状の凸帯が回っている。

図23-1・2は広口の壺で、1は小型のもの、2は大型で甕に近い器形と思われるものである。

図23-3～11は、長頸瓶を含めた壺類の底部である。体部下半の外面には回転ヘラケズリ調整があるもの(3・4・7)とそれ以外の明確な調整が認められないものがある。高台部分については、明瞭な高さのものが付くもの以外に断面三角状の低い高台部が付くもの(7・9～11)がある。

陶質土器器台 (図22-16)

C5グリッドのℓ3から出土したもので、本遺跡出土の遺物類の中でも異質なものである。非常に硬質で焼きで外面の色調は暗灰色(N3/0)である。器形は器台と推察され、口縁部下半から脚部の上位部分の破片が遺存していた。口縁部には明瞭な段があり、直立する口縁が付くと思われる。脚部最上段には稜線で囲まれた区画に鋭いヘラ描き沈線による三角形の文様が巡っている。出土例が少ない朝鮮半島起源の陶質土器と思われる。

須恵器大甕 (図23-12～14、図24、図25-1～5、図26)

タタキの痕跡が残る大甕を一括した。口縁部が遺存しているもの(図23-14)では、有段の口縁に大きく膨らむ体部が付く器形となっている。外面のタタキ痕の間に沈線が施されたもの(図24-1・3・10)もある。また、内面に当て具痕を明瞭に残すものもあり、外面同様連続する沈線状のもの他に同心円の円弧状のものが連続したもの(図23-12、図24-2)や放射状を呈するもの(図24-7)がある。図示した大形破片の図26-3・4は同一個体と考えられる。図25-5は底部の

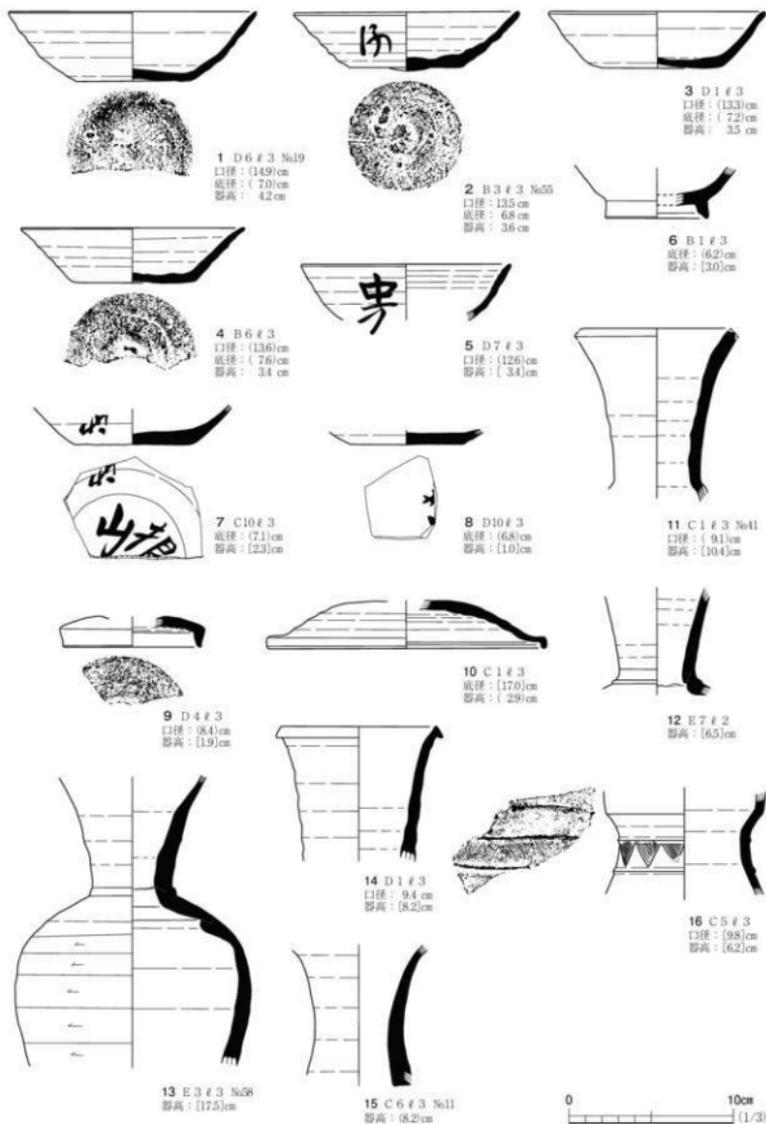


图22 1号流路跡出土遺物(7)須恵器①・陶質土器



图23 1号流路跡出土遺物(8) 須恵器②

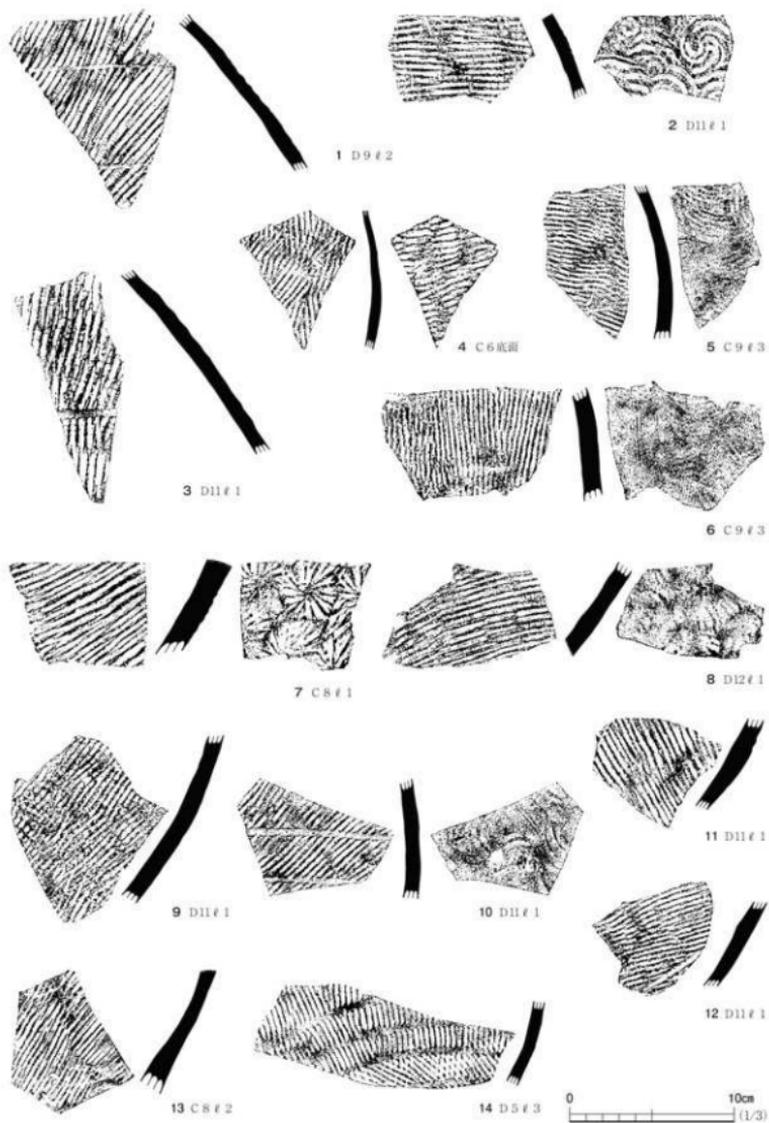


图24 1号流路跡出土遺物(9)須惠器③

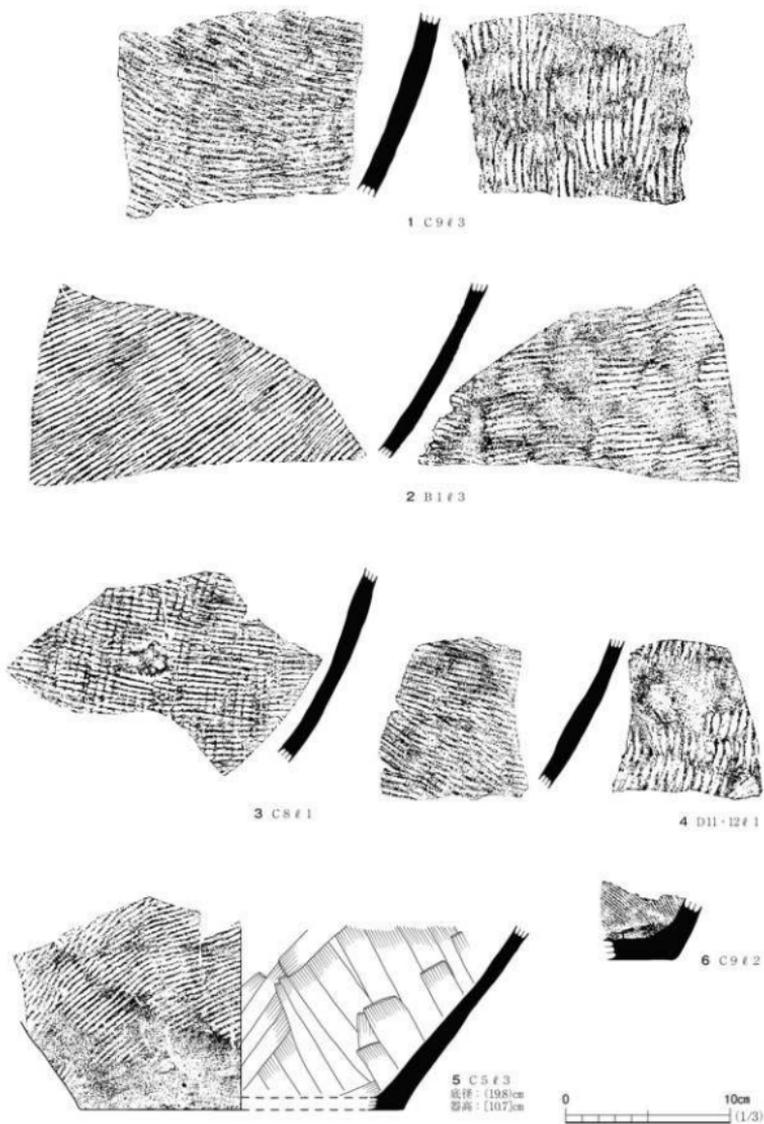


图25 1号流路跡出土遺物 (10) 須恵器④

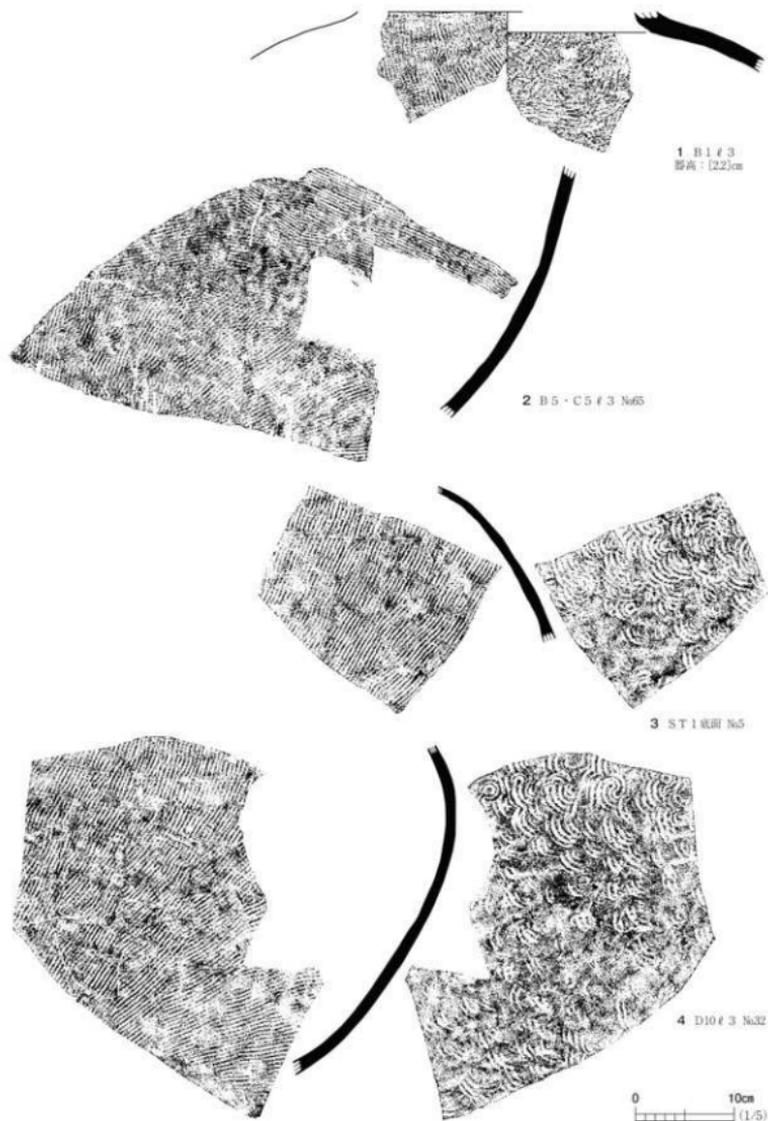


图26 1号流路跡出土遺物 (11) 須恵器⑤

破片で、内面にはヘラナデによる調整が施されている。

須恵器搥鉢 (図25-6)

内面に櫛状工具で多条の沈線を刻んだ搥鉢と思われる底部破片である。

挽物 椀 (図27, 図28-1・3・4・6・8・9・11, 図29-8・9)

1号流路跡から出土した木製品の中でも製品と認められるものの中では数が一番多く、その数は13点に及んでいる。

図27-1は、ほぼ完形のもので、底部が厚手の高台となっており、口縁が内湾気味に立ち上がる器形となっている。口縁部と底部との境界には明瞭な段がつく。

図27-2・4は底部に薄手の高台が付き、体部が内湾気味に開く器形である。2の口縁部は外反し、4の口縁部は僅かに内湾している。

図27-3と図28-1・3・4・6・8・9は、いずれも底部破片である。体部の立ち上がりやや急なものを椀とした。底部の作りについては、図27-2・4と同様薄手の高台のものがほとんどである。図29-9は、口縁部破片で内外面に漆が塗られている。

挽物 皿 (図28-2・5・7・10, 図29-1~7)

底部に高台が付かない浅いものと高台が付く盤状の器形のもので出土している。図29-1・2・4・5は広い底部内湾気味に立ち上がる口縁部が付く器形である。図29-3は盆状を呈する浅いタイプの皿で、広い底部に内湾気味に立ち上がり、外反する口縁部が付く器形であり、内外面に漆が塗られている。図29-6・7は底部破片で、高台が付かない薄手のものである。図28-2・5・7・10は、高台が付き体部が横に大きく開く盤状の皿となる可能性が高いものである。

筒状容器 (図29-10)

埋没中にかなり変形が進んでおり、原型を明確に留めないが、上部に段を持つ筒状の容器と思われる木製品である。本来、この段の上に木製の蓋がセットになっていたものと思われる。

曲物 (図29-11・12, 図30, 図31-1・2)

図29-11・12, 図30-1~7は曲物の底板と思われるものである。このうち図30-5・6については、周縁に段を有する形態をしている。盤状木製品底部の可能性も考えられたが、周縁端部が完結する形態であったため、上部に側板が付く曲物底板とした。

図30-8~14, 図31-1・2は側板と思われるものである。図30-10, 図31-1は板の合わせ部に使った木の皮が残っている。図30-8・10・11, 図31-2については、内面にケビキ線が残っているもので、曲がった板状の形態であるところから、曲物側板と判断した。図30-12・14については、内面にケビキ線がないものの湾曲が認められたため、同じく側板と判断した。別な部材となる可能性もある。

下駄 (図31-3・4)

古代のものと思われる下駄が2点出土している。いずれも削り出して作られたものである。

図31-3は、長楕円形の高い脚部が付く形態で、先端部が欠損している。鼻緒を通す穴が2か

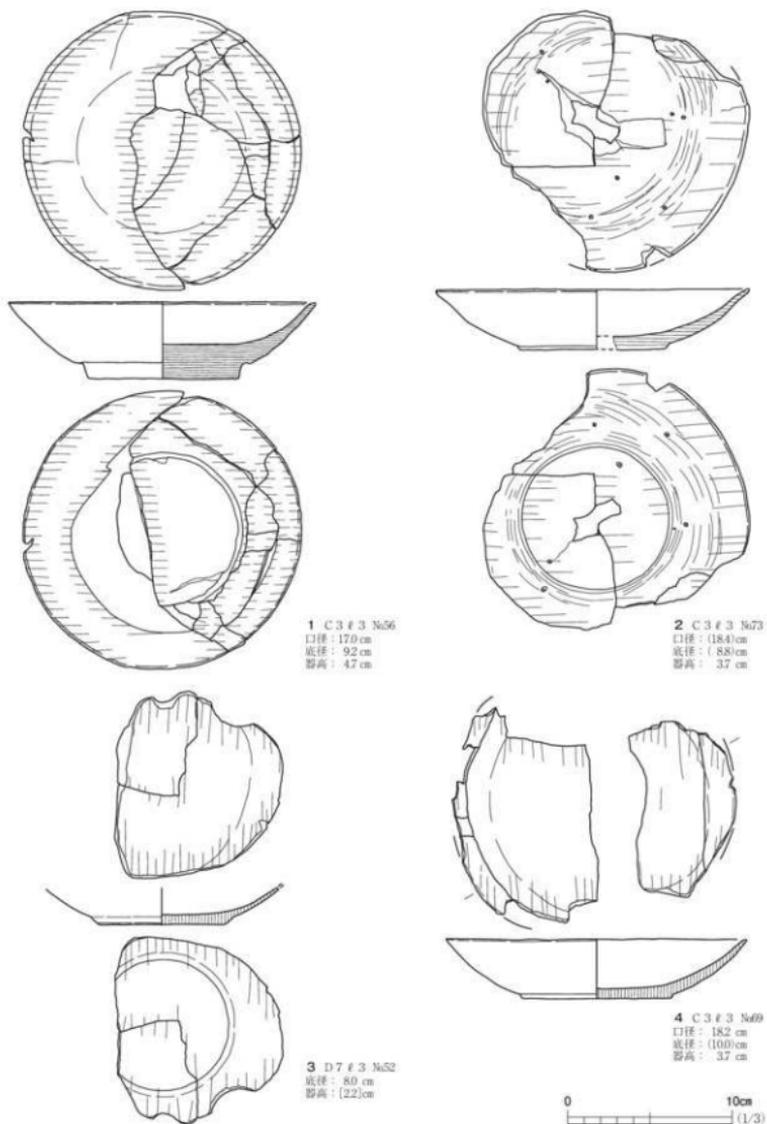


图27 1号流路跡出土遺物 (12) 木製品①

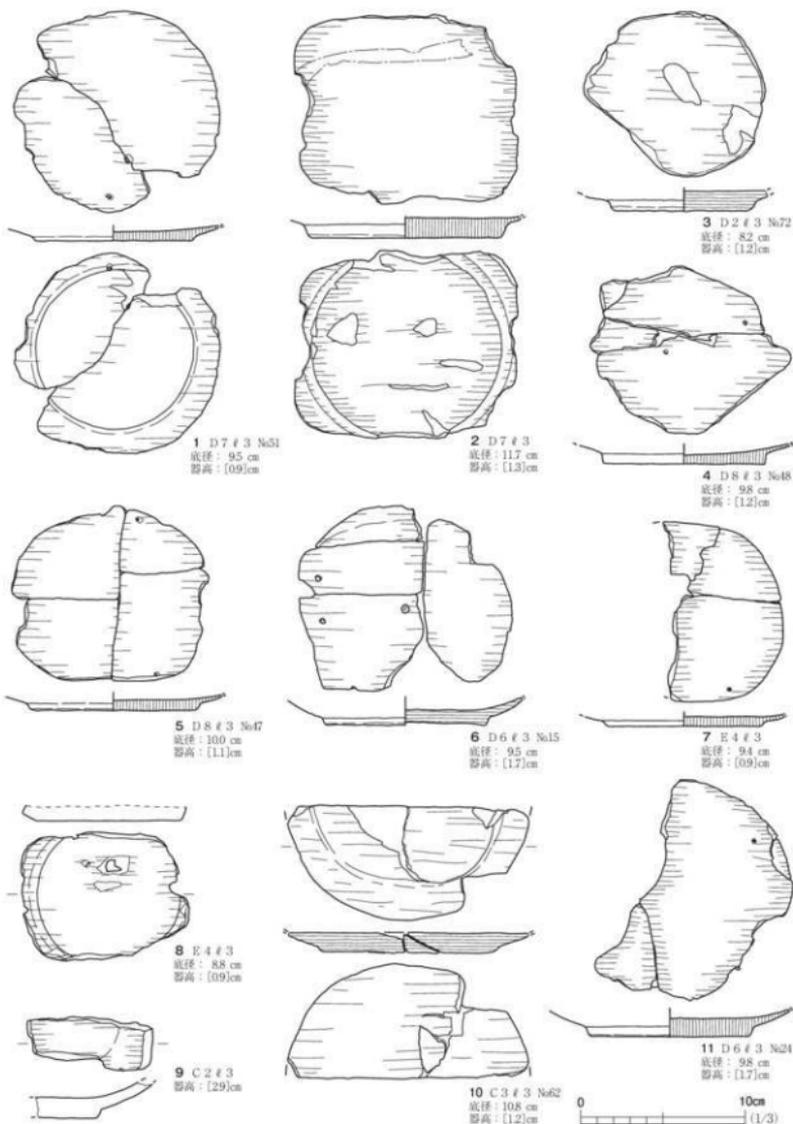


图28 1号流路跡出土遺物 (13) 木製品②

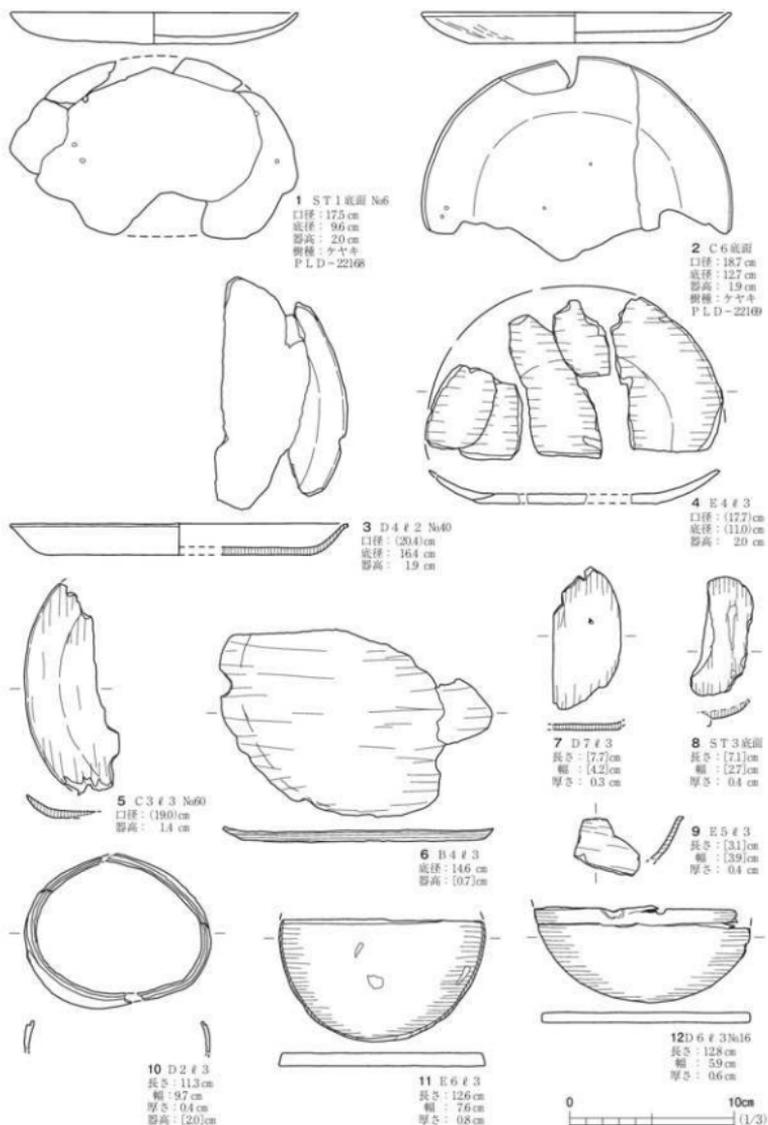


図29 1号流路跡出土遺物 (14) 木製品③

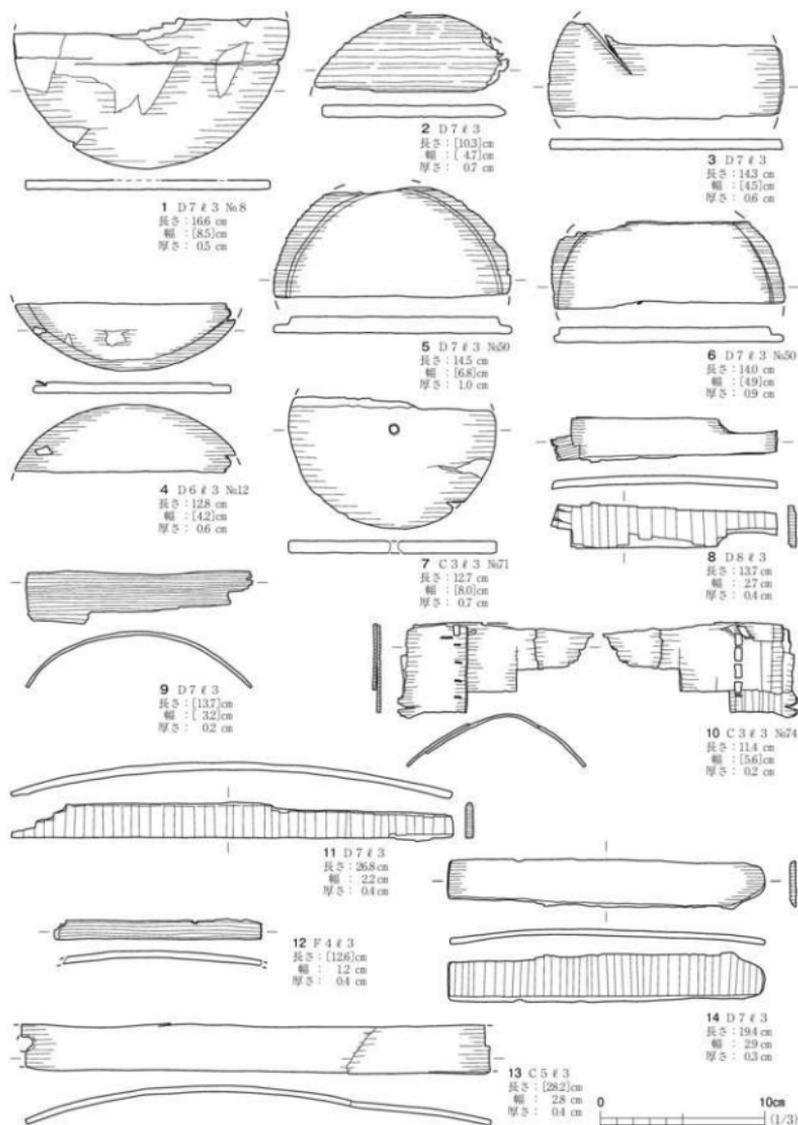


図30 1号流路跡出土遺物 (15) 木製品④

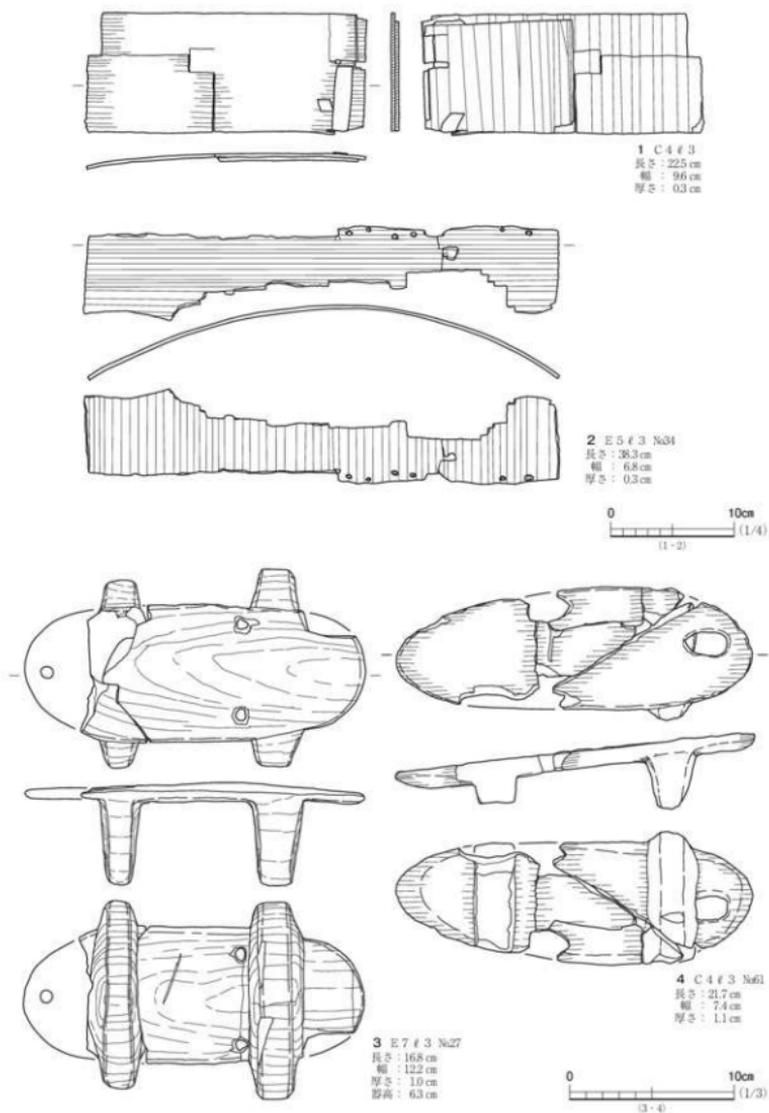


図31 1号流路跡出土遺物 (16) 木製品⑤

所に残っている。

図31-4は、先端部がやや尖る長楕円形の形態の下駄で、2つある脚部は、前のものが後ろのものより高く、使用した上面は前から後ろに向かってやや傾斜する形態である。鼻緒を通すための穴はやや大きめのものが3か所に残されている。

齋串 (図32)

齋串と思われる木製品は全部で13点出土している。遺物の出土状況の項目でも述べたように、特に北側のグリッド付近で多く出土している。

1は、上部にキザミの入った薄く作られたのはは完形のもので、中央部は両側から削りが入り所々でえぐられている。先端は尖った形態となっている。

2は、上部両端が削られ摘み状の形態となっており、中央部には両側から削りが入られている。

3～6は、上部両端が削られ摘み状の形態となっているものの、中央部には削りが入られず、真っ直ぐに尖った先端部になる形態と思われるものである。

7・8は、短いタイプの齋串で、上部両端が削られそのまま尖った先端部に続く形態のものである。

9・10は、厚手の板状の部材を使ったもので、加工する工程で残された削りの痕跡が残っている。上部の両側には削られ、側面がささくれ立っており、そこから先端に続く形態となっている。

11～13は、薄手の部材を使った齋串の一部と思われるものである。11と12には側面に削りの痕跡が残されている。13については削りの痕跡等残されていないが、その厚さと先端に続く形状より齋串の一部と判断した。

串状の木製品 (図33-1～10・14, 図34-10)

小型の串状を呈するものを一括した。1～5については、断面が角柱状を呈しており、図33-6～10については、断面が丸い形態を呈している。このうち、9は大きさや形態などから箸としての機能が推定される。14については、串状の木製品に含めたが、やや大型で棒状を呈している。図34-10は、上半部が板状、下半部が串状の木製品で、齋串などととも祭祀具として使われた可能性がある。

へら状の木製品 (図33-11～13)

小型で、先端部の断面が斜めとなっているへら状のものを一括した。幅の狭いもの(11)とやや広いもの(12・13)がある。

ケビキ線のある板材 (図33-15～19, 図34-1～7)

ケビキ線のある板材で、断面に明瞭な湾曲が認められないものを一括した。曲物側板の部材等として利用されたものと考えられる。

舟形木製品 (図34-8)

板状の部材の片面を削り出して、両端部に段、中央部に長方形の窪みが作り出された舟形状を呈する木製品である。祭祀具舟形としての機能が推定されるが、出土例にみられる舟形は上下が尖る形態のものであるので、他の木製品の部材の一部である可能性もある。

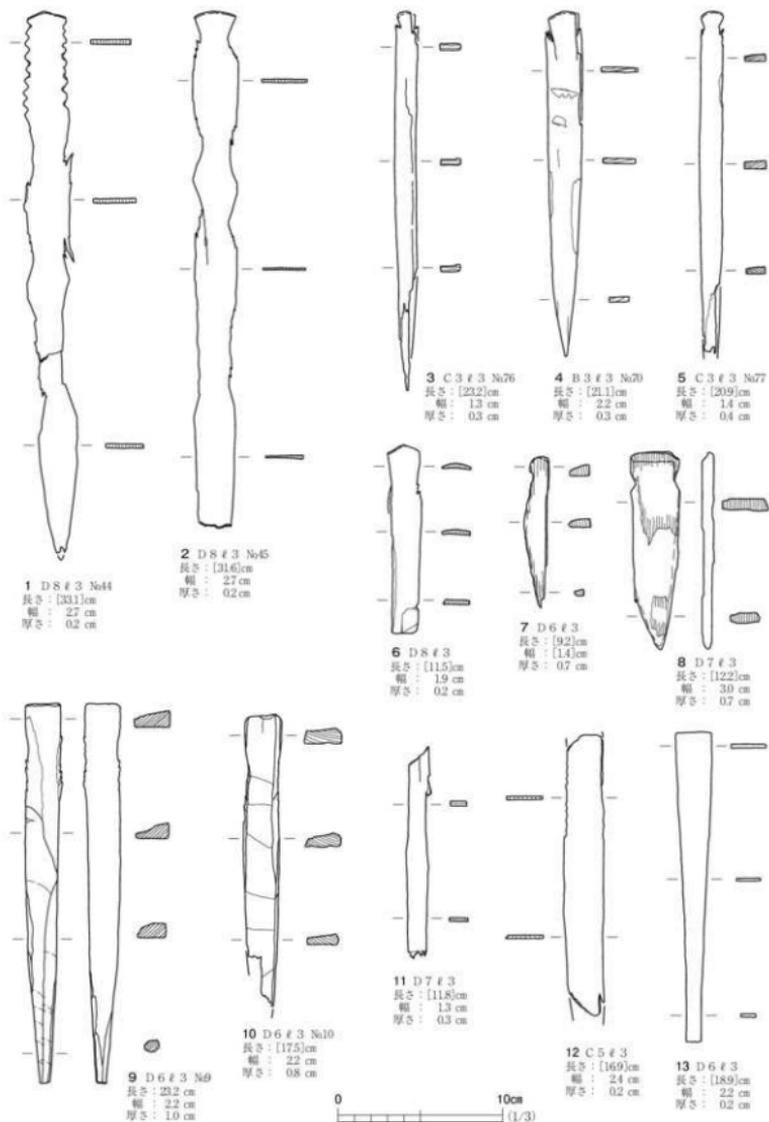


図32 1号流路跡出土遺物 (17) 木製品⑥

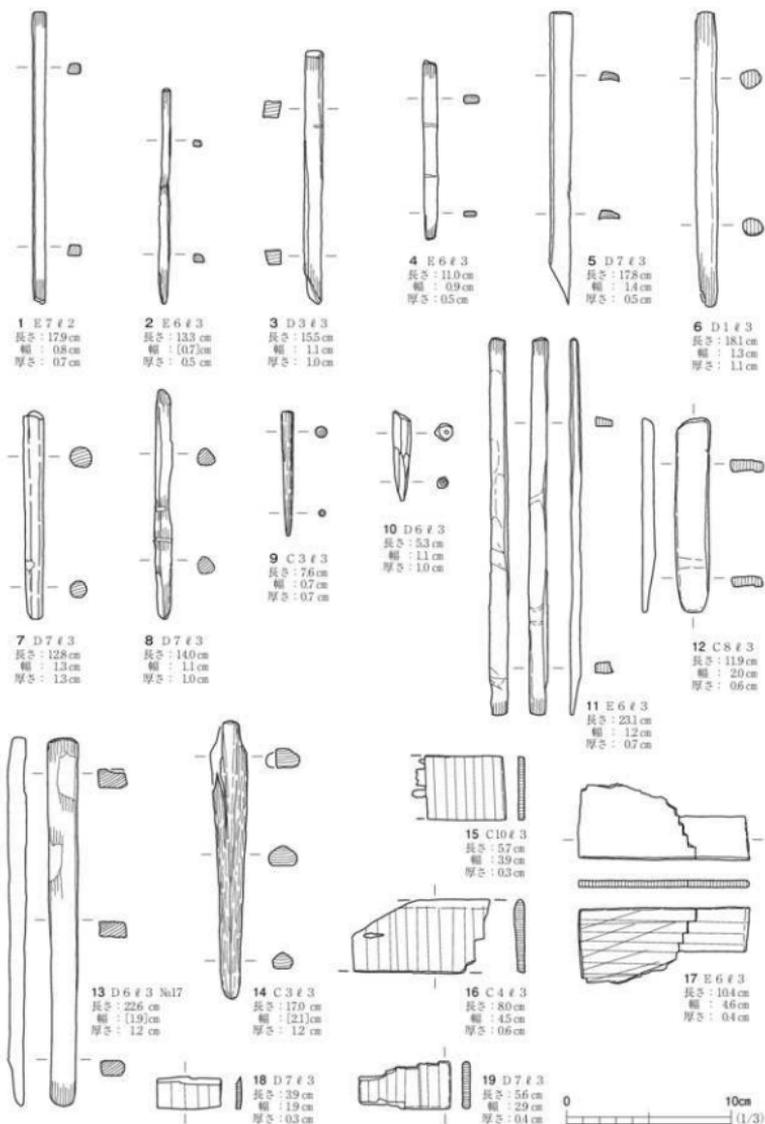


図33 1号流路跡出土遺物 (18) 木製品⑦

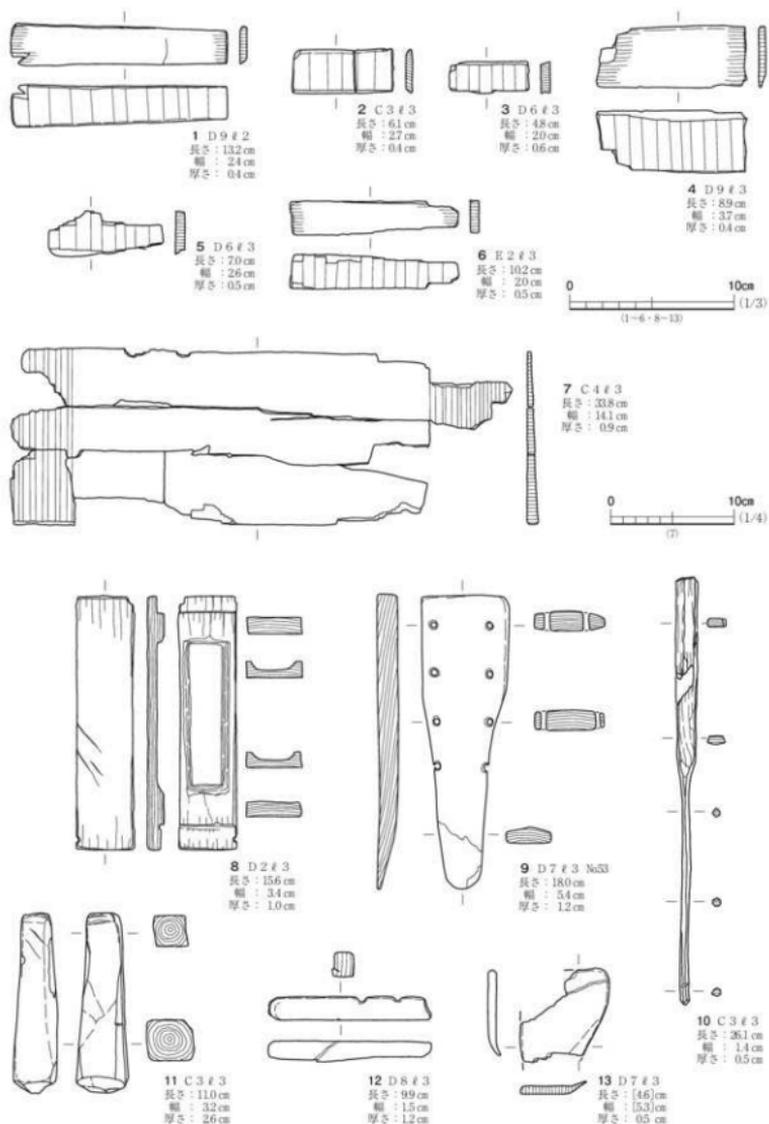


図34 1号流路跡出土遺物 (19) 木製品⑧

木製の紡織具類 (図34-9・12)

図34-9は、両端にそれぞれ4つの穴が開いたヘラ状の木製品で、先端部はクサビ状となっている。両端に穴の開いた木製品の民俗例等から、紡織の経糸を整形するための整形ヘラである可能性が高い。図34-12は、上部にキザミがある木製品で、紡織具の糸かけと思われる。

木製品脚類 (図34-11, 図35-1)

図34-11は、下部が太くなる形態で上部に付くものを支える脚と思われるものである。図35-1は角柱状を呈し、上部が組み込むための一部が削り出された形態で、机の脚と思われる。

田下駄 (図35-10)

穴が3か所に開けられた板状のものである。穴は上部の1個が中央に、2個が側面近くに開けられており、板状の部材を再加工して田下駄に転用したものと思われる。

木製箱 (図35-6)

上部中央に穴が開けられ、上部両端が丸く加工された板材で組み合わせて作られた箱形の木製品の部材であると推定される。

その他の木製品 (図34-13, 図35-2・5・7・9, 図36-2, 図37-2・4)

皿状を呈するもの(図34-13)、ヘラ状を呈するもの(図35-2・5・7・9)、不整形のもの(図37-2・4)がある。図36-2は、木製のクサビと思われる。

木製品部材 (図36-1・3・15, 図37-1・5)

部材と思われるものと加工痕のある木製品を一括した。大型の板状のもの(図36-3・5)とその他の小型の板状のものがある。このうち図36-12については平滑な板状の形態を呈するところから斎串の一部、図36-15については紡織具の一部である可能性がある。

火付木 (図37-6・15, 図38-1・4)

端部に炭化痕のあるもの、及びそれに近似する形態のものを火付木とした。形態には、幅広の板状のものを利用しているもの(図37-11)とそれ以外の串状を呈するものがある。

竪杵 (図38-5)

芯持ち丸太材の中央に取っ手を削り出して作り、両端を平らに加工した木製品で、形態から竪杵であると判断した。両端に使用に伴う摩耗の痕跡が認められないところから、使用前に流路跡に遺棄、あるいは流れ込んだものと推察される。

コロボシ (図38-6)

壁近くのℓ2から出土したもので、大型の芯持ちコナラ材を使って作られた木製品である。断面が六角形を呈し、両端部には穴が開けられている。民俗例や出土例から農地に緑肥をすき込んだり、整地したりするのに使う農具と考えられる。付編でC14年代による分析結果が述べられているが、その結果は11世紀前半～12世紀前半の年代となっている。

建築材 (図38-7・8)

大型の建築部材と思われる2点を図示した。ともにケズリの痕跡が認められ、7は断面が楕円状

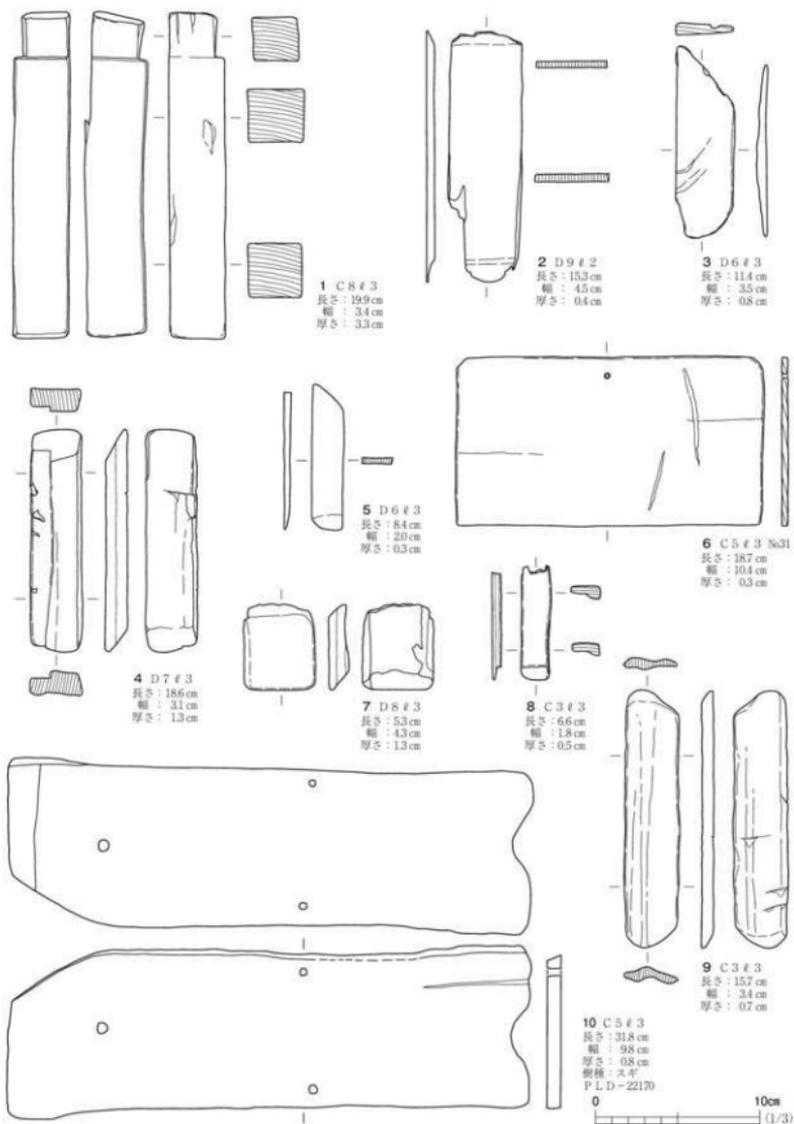


図35 1号流路跡出土遺物(20)木製品⑨

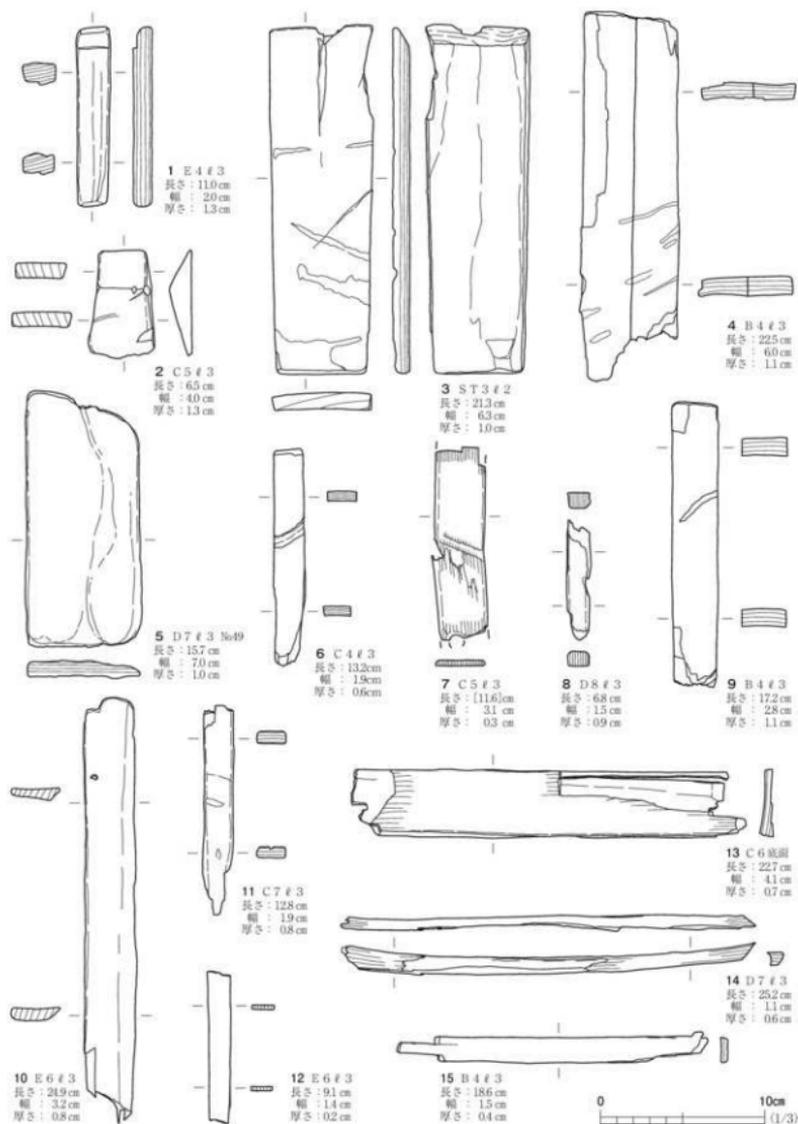


図36 1号流路跡出土遺物 (21) 木製品⑩

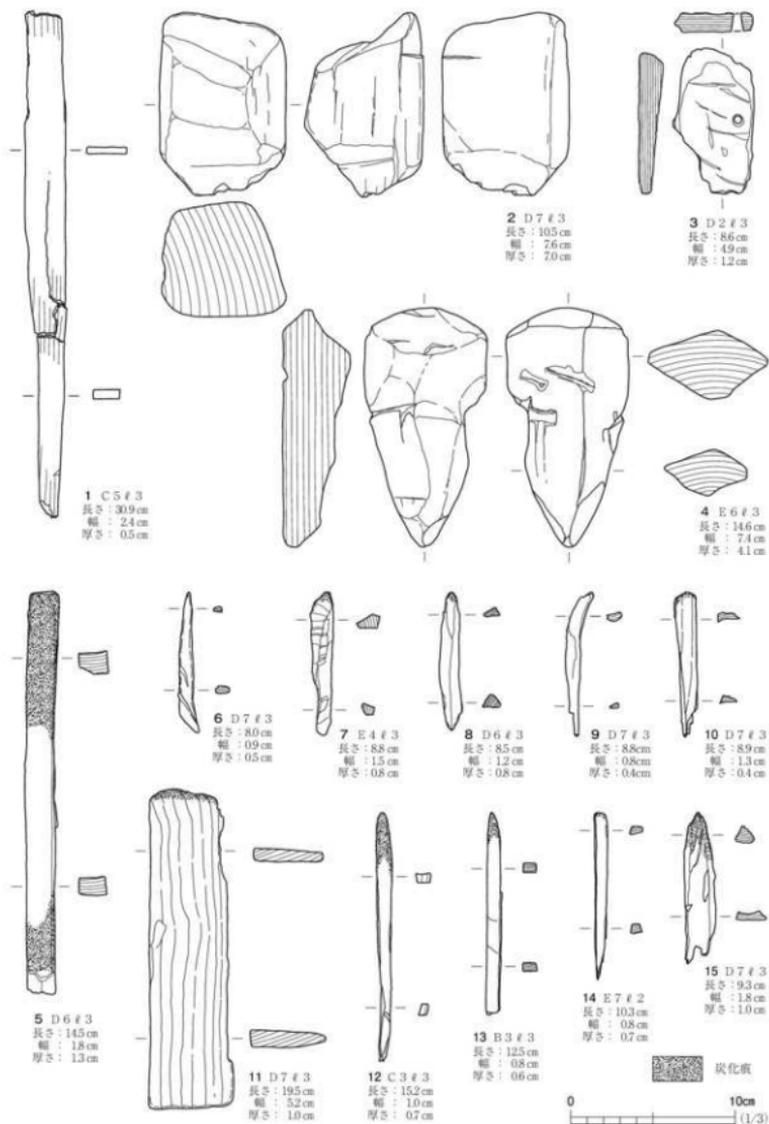


図37 1号流路跡出土遺物 (22) 木製品①

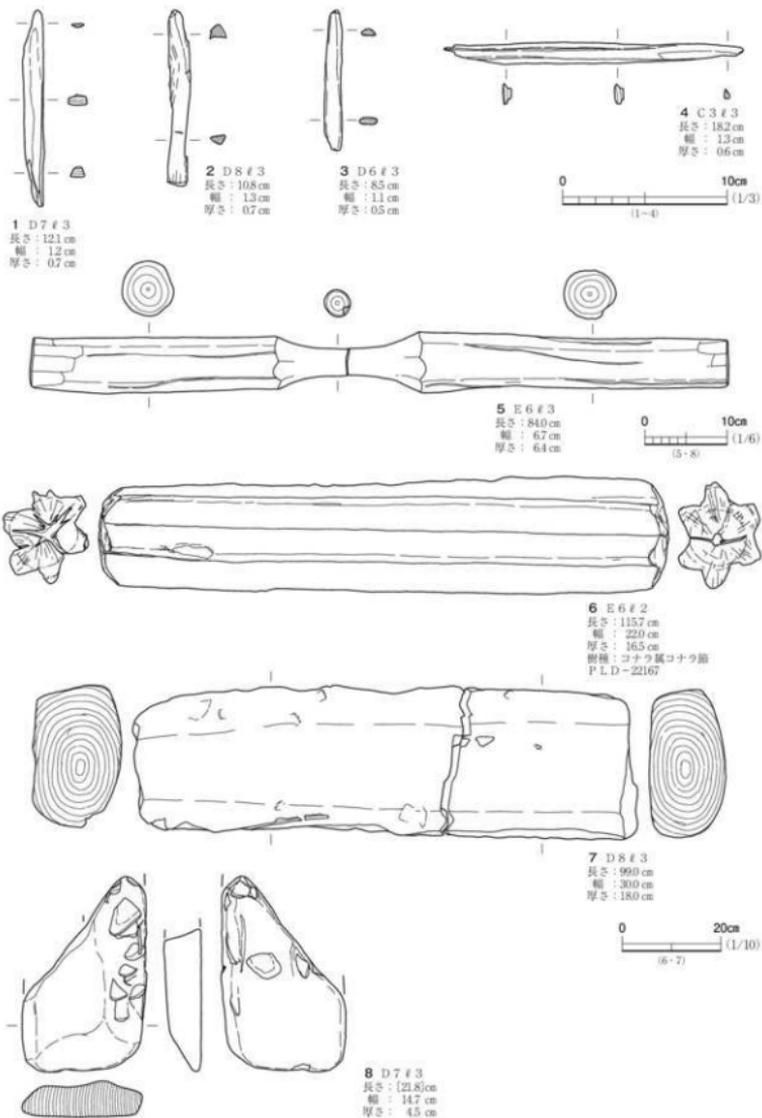


図38 1号流路跡出土遺物 (23) 木製品⑫

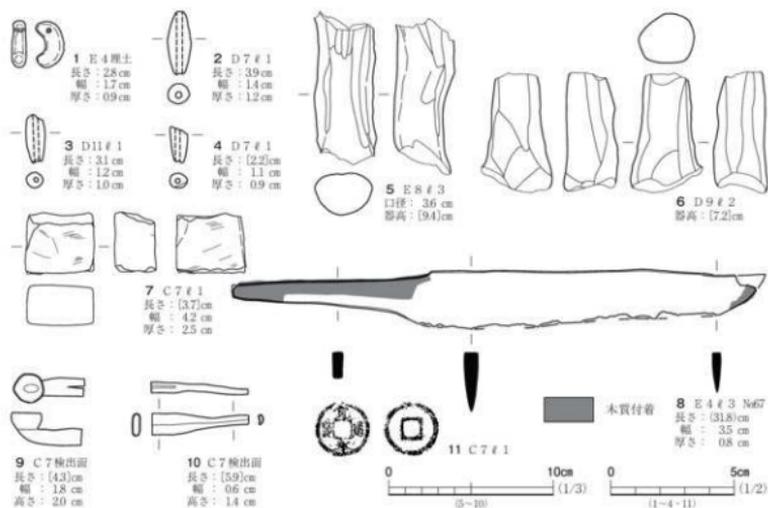


図39 1号流路跡出土遺物(24) 土製品・石製品・金属製品

を呈する芯持ち材で、8は断面が上部が欠損した扁平の材である。

土製勾玉・土錘(図39-1~4)

勾玉(1)はST5・7埋土の中から1点出土したもので、流路跡の形成時期とは異なる時期の流れ込んだ遺物と思われる。土錘(2~4)は、囊状を呈するものが3点出土している。ともに中央に貫通穴をもち、2のみ完形品である。

土製支脚・砥石(図39-5~7)

5・6は素焼きでケズリの痕跡が残された土製品で、その形状から支脚と考えられる。砥石(7)は断面長方形を呈し、各面に研磨痕が残っている。ℓ1出土で近世のものである可能性が高い。

刀子(図39-8)

底面付近から出土したもので、流路跡の機能した年代のものと思われる。全長31.8cm、刃渡り19.8cmの大型のものである。刀身は、峰部がほぼ真直ぐな形状で、刃部は基部から先端に向かって少しずつ狭まり切っ先が付く形状となっている。茎部は断面が四角い形状で基部には一部に木質部が遺存している。

キセル・古銭(図39-9~11)

9が銅製のキセル雁首、10が吸い口である。11が近世の寛永通宝である。

骨

この他に、骨と思われる遺物がD1・D2・D7・E5各グリッドのℓ3から出土しており、D1グリッド以外の遺存状態の良いものについて分析を依頼し、付章でまとめた。D7出土のものに

ついでには火葬されたヒトの上腕骨であると分析されている。

5 杭と杭列

1号杭列（遺構 図40、遺物 図41・42）

平成23年度に調査された試掘調査時のトレンチ付近からは杭が見つかり、本年度流路跡の全体像を把握するために設定したST4・6からも西側で杭列の続きが検出された。そこで、流路跡上部の $\ell 2$ を掘削し、最終礫層面に堆積している $\ell 3$ を除去していく過程で、杭列の全体像を検出していくこととした。方法としては、最終底面まで $\ell 3$ を除去してしまうと欠落してしまう杭もあるので、杭列が動かない部分まで $\ell 3$ を除去し、平面図と断面図を作成した。検出していく中で、一番東端の杭外側についても、杭痕跡がないかを慎重に確認しながら調査をすすめていったが、その外側で杭または杭痕を検出することはできなかった。また、杭列の中で一番西側の部分については、最終礫層面が深くっており、 $\ell 3$ も底面の礫層のレベルに合わせて除去したため一部の杭が浮き上がる状態で検出してしまった。

杭列の平面図を図40に示した。1号杭列としたものの中には、中央部の東西に多くの杭が並ぶもののほかに、すぐ南側にある杭や杭跡も含めている。

中央の杭列は、B4・C4グリッド南端付近で東西方向の杭列として検出されており、調査区内での長さが18.2m、杭間の幅が最大で60cmで、柱痕跡も含めると合計48本の杭からなっている。杭は東から2～8m付近で幅40～60cmに2列状に並ぶ形状を呈し、他の部分は直線状ではない不規則な列となっている。杭の形状は、角柱状あるいは板状のものが27点、丸太状のものが21点となっており、建築部材を流用して作られたと思われるものが半数以上を占めている。大きさとみても幅が8cmをこえる大型のものから、それが3cm以下の小型のものまでと多様性を持ち、統一した規格は認められなかった。大型のものの配置は、東側から2～8m付近の2列状に並ぶ形状の部分では、不規則ながらも対となる部分が認められた。

中央の杭列の断面についても図40に示した。特に東側の杭列が2列状に並ぶ部分では、同時に断面を観察することが難しかったため、東側については、北側から見た方向と南側から見た方向の2方向から断面図を作成した。断面の状況では、杭の大きさに関連して、杭の先端が $\ell 3$ の中で止まっているもの他に、その下部の礫層まで打ち込まれているものが24点と半数程度認められた。 $\ell 3$ の途中で止まっているものについては、この杭列が機能した時期をある程度反映したものであると思われる。これは、 $\ell 3$ の流水層が形成されている時点で杭列が機能していたことを示すと推定される。また、断面の形状が斜めに傾いている杭もあるが、これについては構築物としての杭列が倒壊または廃絶後に流水作用によって傾いたものであると推定される。杭列の中には、先端部から下半にかけて焼き加工によって補強されているもの(杭4・5・11・13・14・23・36)も7本認められた。

中央から離れた杭については、複数の杭や杭跡がみられるもの(杭45～48、杭跡1～3)と単独で存在しているもの(杭49～52・57)がある。4本の杭が変形状に並ぶ杭45～48については、杭自

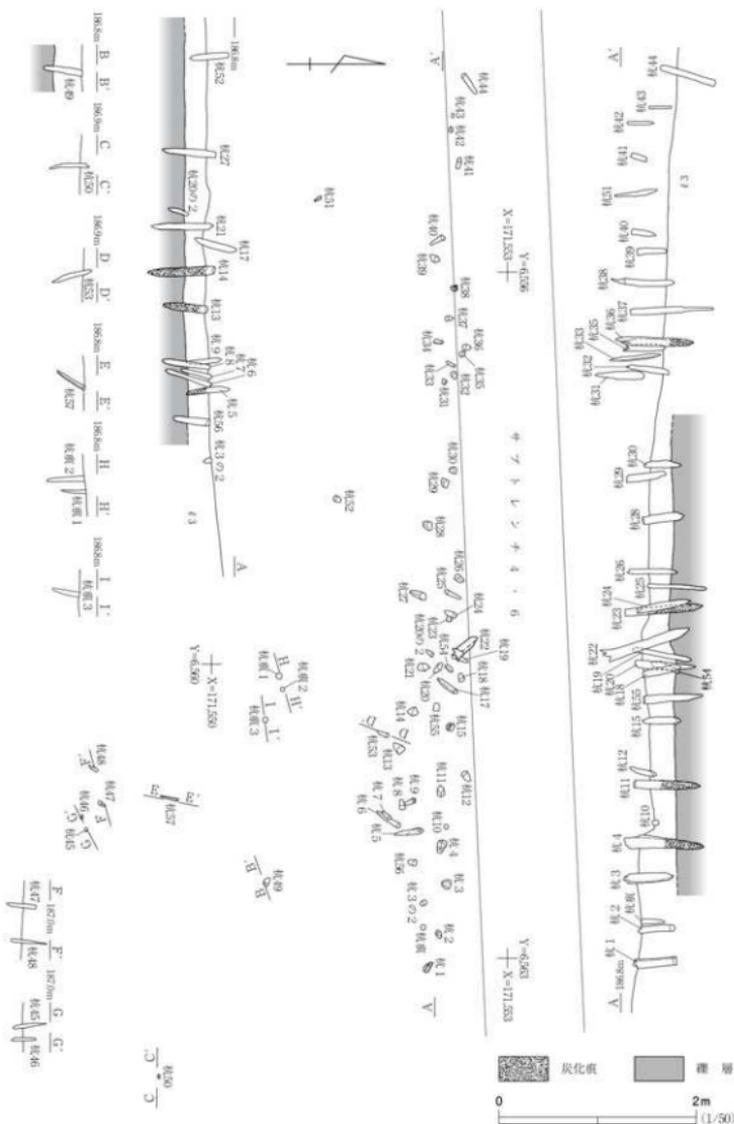


図40 1号杭列

表2 杭列・杭計測値一覧表

No.	形 状	長さ (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	樹 種	No.	形 状	長さ (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	樹 種
1	角柱状	55.8	7.3	6	クリ	32	角柱状	45	6.1	5.2	散孔材
2	角柱状	32.1	7.2	4	クリ	33	角柱状	54	5	3.8	クリ
3	角柱状	52.6	9.2	8	クリ	34	板 状	27.3	4.8	2.5	クリ
3の2	丸太状	7.5	4.9	4.3	ケヤキ	35	角柱状	39.8	6.5	4.2	クリ?
4	丸太+角柱状	83	11.7	9	クリ	36	角柱状	81.7	8.1	7	—
5	板 状	5.5	5.6	2.7	クリ?	37	丸太状	42.8	5.5	4.2	散孔材
6	丸太状	9.1	4.8	4.1	散孔材	38	丸太状	64.2	7.7	6.9	クリ
7	角柱状	49.2	6.7	5.4	クリ	39	丸太状	31.2	4.7	3.8	ホウノキ?(モクレン科)
8	角柱状	46.1	6.7	5.2	クリ	40	丸太状	26.6	6.2	5.7	クルミ?
9	角柱状	35	5.2	4.1	散孔材(モクレン?)	41	角柱状	36.2	5.9	4.9	クリ
11	角柱状	69.7	8.5	6.7	散孔材	42	角柱状	15.2	2.2	1.6	広葉樹
13	角柱状	47.2	8.2	7.2	クリ	43	角柱状	47.2	3.8	3.4	クリ
14	角柱状	56.4	7.4	6.2	クリ	44	丸太状	60	6.5	5.9	散孔材
17	丸太状	46.8	3.5	3.3	モクレン科?	45	板 状	24.1	2.7	1.6	クリ
18	丸太状	39.8	6.3	5.8	ハコヤナギ属	46	板 状	25.4	3.8	2	—
20	角柱状	61.3	8.3	5.2	クリ	47	角柱状	32.8	3	2.7	クリ
20の2	丸太状	22	4.6	3.7	散孔材	48	角柱状	35.7	5.7	2.4	クリ
21	丸太状	64	7.8	6.7	ハコヤナギ属	49	角柱状	41	4.8	3	クリ
22	丸太状	100.5	8.8	8.4	クリ	50	角柱状	42.4	5.1	4	コナラ屬
23	角柱状	79.8	7.3	6.5	クリ	51	丸太+角柱状	47.7	6.2	4.1	クリ?
24	丸太状	56.5	6.2	5.3	カエデ科	52	角柱状	17.2	4.2	3	クリ
25	丸太状	61.1	3.8	3.8	散孔材(クルミ科)	53	丸太状	28	3	2.8	散孔材
26	角柱状	42.3	5.1	3.8	クリ	54	板 状	31	6	2.7	クリ?
27	角柱状	54	7	3.6	クリ	55	角柱状	52.3	8.6	5.7	クリ
28	角柱状	50.3	7.4	6	散孔材	56	角柱状	38.7	7.2	5.1	クリ
30	丸太状	39.6	7.7	6.6	ホウノキ(モクレン科)	57	角柱状	36	2.7	2.7	クリ
31	丸太に近い厚板	49.7	8.6	6.2	クリ						

体も中央の杭列と比べて貧弱であり、中央の杭列とは別の機能を担っていたものと思われる。

主な杭についての略図を図41・42に示し、主要な杭の数値についてを、表2に示した。杭については、大きくは断面が丸い形状を呈する自然木の先端部を削り出して作られた丸太状ものと、断面が四角く、柱材等の部材を再加工して作られた角柱状のものが混在している。周辺の杭も含めた1号杭列全体でみると角柱・板状のものは54点中37点と約62%と半数以上を占めている。角柱状のものでは、手斧等による明確な痕跡が残っているものが多い。これら1号杭列の木杭の特徴としては、部材を再利用しているものが半数をこえ、更に焼き加工しているものもあることである。

まず、1号流路跡の機能した時期についてであるが、直接年代を示す遺物が杭に伴って出土していないので、明確に断定することは難しい。しかし、その検出状況から、1号流路跡の中でも古い段階の流れが機能した中で杭列も機能したと推測され、大きくは平安時代の9世紀後半～10世紀前半ごろに作られ機能したものであると思われる。

また、その機能については、2列となっている箇所が認められることと、加重を支えるための焼き加工を施した杭もあることなどから、流路跡に対し垂直方向に作られた杭間40～60cmと幅の狭い簡易な「棧橋」としての機能をもっていた可能性がある。建築材から流用した大型の杭などが使われているところから、簡易な上部構造が推察されるものの機能的には重要な施設であった可能性が高いと考えられる。また、棧橋の方向についてであるが、流路跡全体での位置関係で見ると西壁に近い状況にあるが、底面の形状が西側に向かって深くなっているところから、西壁→流路の方向

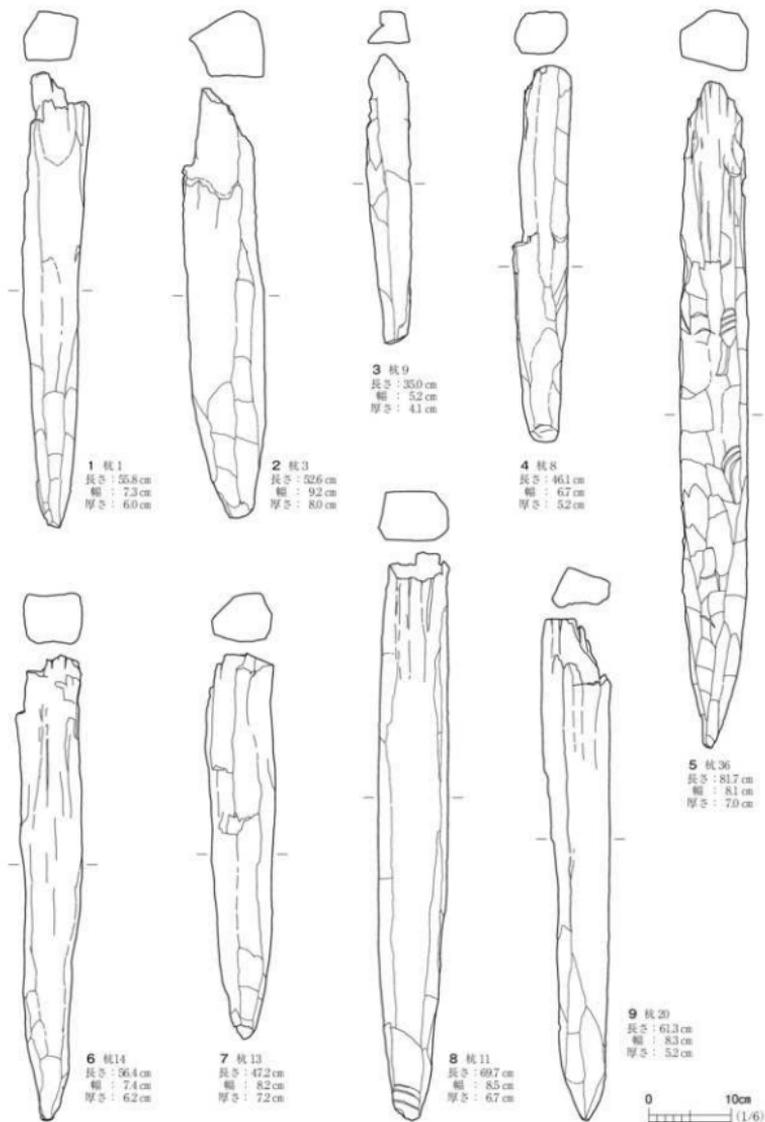


図41 1号流路跡出土遺物(25)木杭①

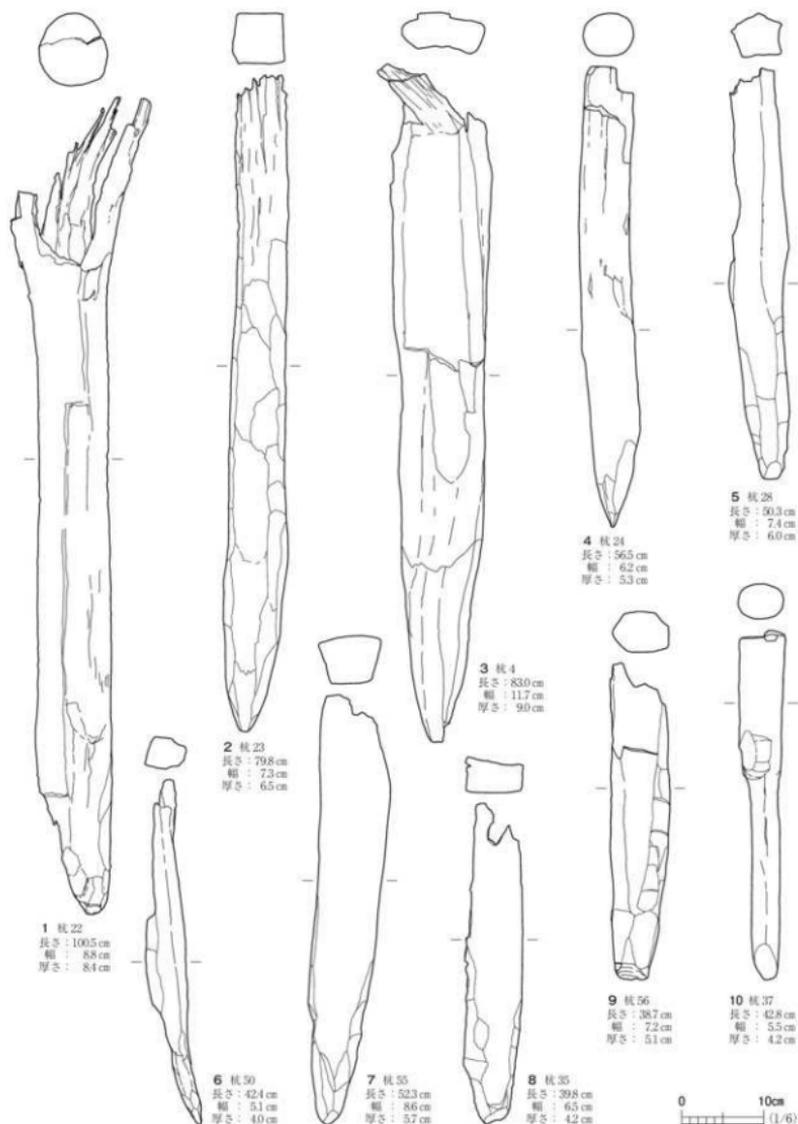


図42 1号流路跡出土遺物(26)木杭②

ではなく、東側→流路の方向であると考えている。中央付近の流路跡の断面等の形状をみると流路跡が常時検出状態の幅で機能していたとは考えにくく、西半分で機能していた時期を想定することが可能で、流路に対して東から西に突き出す形で機能したものと考えたい。

2号杭列（遺構 図43）

2号杭列は、流路跡上部の ℓ 2除去中にE 4・F 4グリッドの境界付近で上部が検出された。杭の基部が残る状態で ℓ 2を除去し、記録を作成した。東側と西側の2本の杭からなる杭列で、杭間は45cmとなっている。

東側の杭はやや外側に開いた状態で検出された。長さが40cm、幅が4cm、厚さが3cmの先端部が加工された角柱状の杭となっている。使われた木はクリである。杭の先端部は ℓ 2中で止まっている。最終礫層上面からの高さは41cmである。

西側の杭は東側の杭と同様外側にやや開いた状態で検出された。長さが33cm、幅が5.5cm、厚さが2.3cmの先端部が加工された角柱状の杭である。使われた木はクリである。杭の先端は東側同様 ℓ 2中で止まっている。最終礫層上面からの高さは47cmである。

2号杭列については、流路跡埋没土である ℓ 2中で先端部が止まっているところから、流路跡が機能した時期より後の年代に打ち込まれたものであると考えられる。使われた杭が自然木の丸太状の杭ではなく、建築部材等角柱材を流用している特徴があるが、その性格については不明である。

3号杭列（遺構 図43）

3号杭列は、流路跡のST 1を掘り込み中にトレンチの壁面より検出された杭列である。流路内の位置では、調査区内で狭まる南側のC 10・D 10グリッドに位置している。調査区内では3本の杭が検出されている。西側の杭は調査区西側境界にあり、杭列が更に西に続く可能性もある。東側の杭(杭1・杭2)は近接しているが、西側杭(杭3)は110cmほど離れた場所に位置している。

杭1は、長さ45cm、基部の幅が5cmの角柱状を呈しており、北東から南西方向にやや傾いた状態で検出された。底部は ℓ 3の流水層中で止まっている。

杭2は、長さ86cm、基部の幅が6cmの三角柱状を呈しており、ほぼ直立した状態で検出された。底部は礫層まで入り込んでいる。材の樹種はクスギ節のものである。

杭3は、長さ89cm、基部の幅が6cmの角柱状を呈しており、ほぼ直立する形で検出された。調査区西側は安全のための法面をつけて掘削しているが、その法面に入り込む形となっている。底部については、礫層まで入り込んでいる。材の樹種はクスギ節のものである。

3号杭列については、やや大型の建築材等から流用されたと思われる角柱状の杭を利用しており、底面が礫層まで入り込むといった1号杭列と共通した特徴を持っている。しかしながら、1号杭列のほとんどの杭には先端を尖らす加工が加えられているのに対して、使われている杭は3本ともそれが加えられていない特徴もある。杭列の時期については、流路跡の新しい段階の流れが機能して

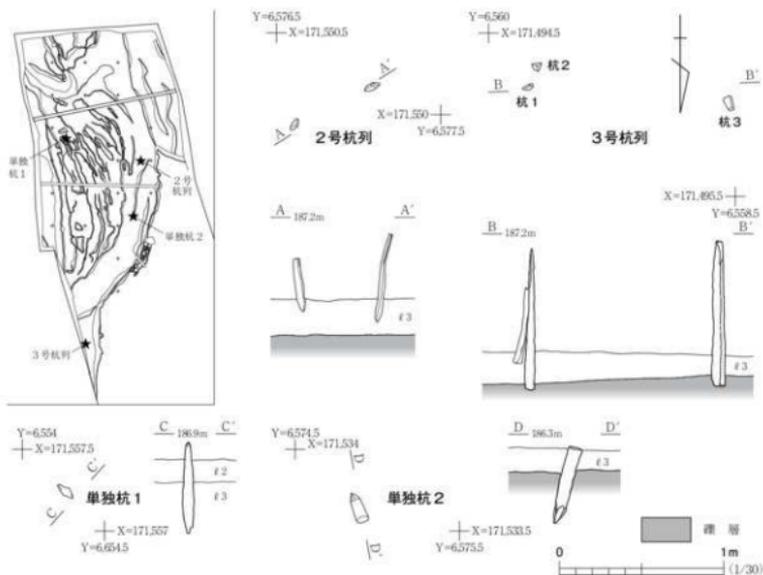


図43 2・3号杭列と単独杭

いた年代と推定される。その性格については、3本のみで不明であるが、上部を支える構造物の一部であった可能性を考えておきたい。

単独杭と底面出土の杭（遺構 図43、遺物 図44）

流路跡からは、1～3号杭列のような複数の杭から構成される杭列以外に、単独で打ち込まれた状態の杭が2本、底面で横になった状態の杭が8本検出されている。

単独杭1は、北側道路を調査途中で掘削していく中でC3グリッド付近で見つかったものである。検出当初、1号杭列のすぐ北側に位置していたところから、1号杭列と対応して複数の杭が東西方向に並ぶことも想定されたが、周囲を含めて丹念に検出した結果、1本単独の杭となった。長さ57cmの杭がほぼ垂直方向に打ち込まれ、先端部はφ3の流水砂層にとどまっている。

単独杭2は、E6グリッドのφ3の流水砂層を掘り込む中で検出された杭である。周辺では堅材やコロボシなどの大型の木製品も検出されている。上部は残っておらず、下部の長さ48cm部分が垂直方向に打ち込まれている。先端部は礫層に34cmほどが入り込んでいた。

単独杭以外の底面出土の杭は合計8本検出されている。大型のものから小型のものまで出土しており、これらについて実測図を図44に示した。

1は、木製品が集中して出土した付近で検出された断面楕円形の杭で、流路跡から出土した杭で

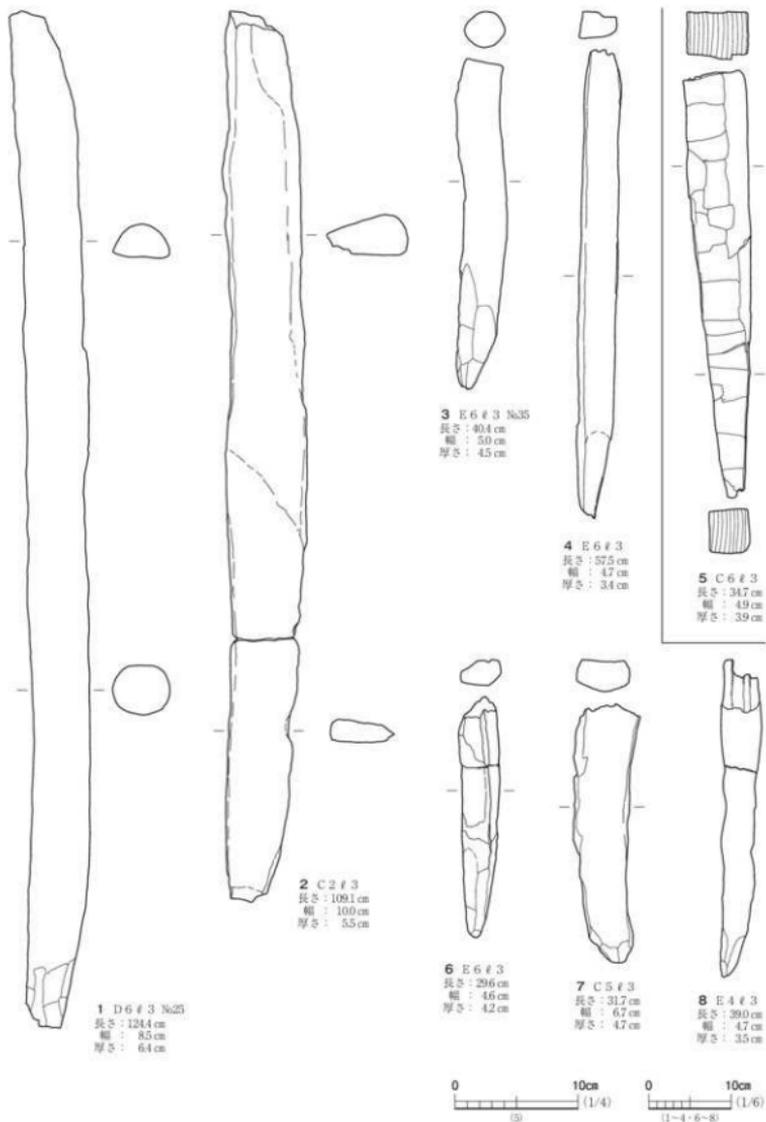


図44 1号流路跡出土遺物 (27) 木杭③

は最も長い杭となっている。樹種はクリである。2は、1区のC2グリッドの礎石が傾斜している部分の③3で出土したもので、断面板状を呈しており、先端に一部加工がみられる。樹種はコナラ節のもので大型の部材を加工して杭にしたものと思われる。3～8については、丸太状の材の先端を加工して杭としたもの(3・8)と角柱状を呈しており、建築部材を加工して杭としたもの(4～7)がある。樹種は6～7がコナラ節、3がホウノキ？、4が広葉樹である。

これらの底面出土の杭については、本来は単独杭や杭列のように流路跡に打ち込まれて機能していたものが、流水作用によって流されたものか、あるいは上流より廃棄され流れこんだものである可能性が考えられる。これらの可能性の中では、周辺には、2・3号杭列や単独の杭などが認められるところから、前者である可能性が高いと思われる。

6 東側施設について（遺構 図45）

調査区内での流路跡の東壁の中央付近で壁面から張り出し状に検出された遺構である。1号流路跡全体を検出していく中では、東の堆積土の境界では明瞭なプランを検出することができなかった。ただ、1号流路跡の検出段階で設定したST3の土層断面の一番東側では、東の壁面から底面に向けて土層が緩やかに連続して堆積していることが観察され、不自然な形の壁面であることが認識できた。更に流路跡の壁面を掘り込む過程で、東側施設付近についても丹念に検出作業を実施したところ、流路跡壁面の外側に流路跡堆積土と連続する黒色の土層が広がることが確認できた。

そこで、この部分については、1号流路跡と明確な新旧関係が認められず、埋没する過程ですでに存在し、同時期に機能していた可能性も考えられるため、改めて東側施設の名称を付けて調査を行った。

東側施設の規模は、流路跡の東側の壁面に沿って、長さ9.6m、幅約2mの範囲となっている。流路跡底面からの高さは西端部で40～70cm程度である。施設内は東から西に向かってやや傾斜しており、概ね平坦であるが、流路跡壁面との境界に近い部分では一部で階段状となっている部分がある。平坦部にはその中に土坑状のピットが5か所ほどある。北側は攪乱によって破壊されており、その端部は不明瞭である。

ST3で確認できる東側施設内の堆積土は、上部が炭化物を含む黒褐色粘質土、下部が地山灰褐色粘土ブロックを含む黒褐色粘質土となっており、いずれも流路跡から連続する土層となっている。

施設内の土坑状のピットを北からP1～5とした。それぞれの施設底面からの深さを平面図に図示した。P1は東西方向に長さ130cmの長軸となる不整な楕円形をしており、中央よりやや北側に最も深い部分があり、平坦部からの深さは70cmとなっている。P2・3は楕円形を呈しており、中でもP3は、平坦部からの深さが90cmと最も深い施設となっている。その深さから集水施設的なものと推定される。南側にあるP4・5は不整な楕円形を呈しており、平坦部からの深さも20cm前後と浅いものである。

遺物は出土しなかったが、この遺構の時期については、流路跡に連続する土層が堆積していると

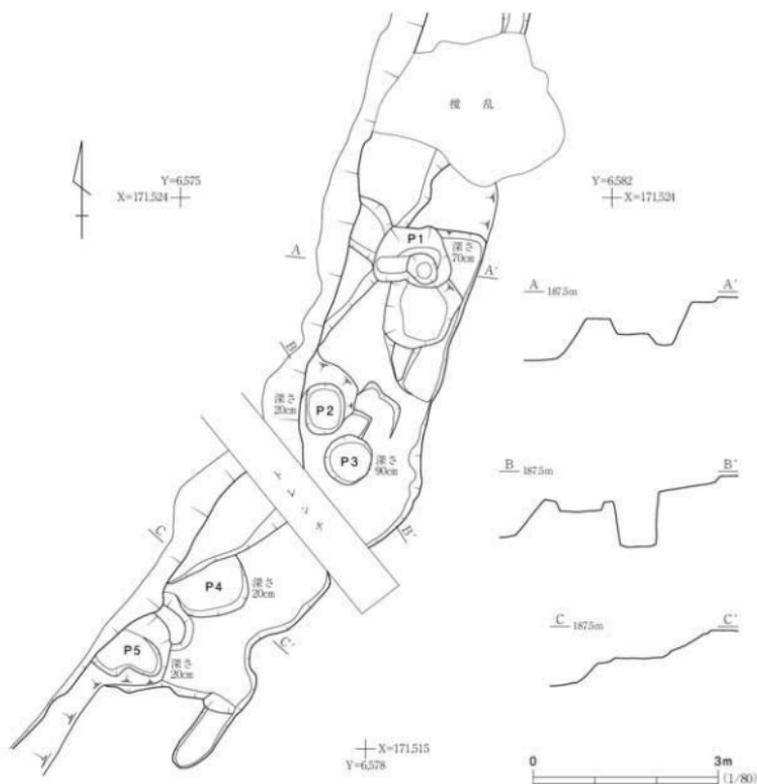


図45 1号流路跡東側施設

ことから、流路跡が機能した時期と同様の時期であると推定される。また、その性格については、施設内に深く集水施設的な深いピットであるP3が付随するところから、1号流路跡、それも一番東側の新しい流れの段階で機能した水を扱う施設であった可能性がある。

7 礫層以下の調査

流路跡の最終礫層上面まで掘り進んだ状態で、その下部の層について、遺物の包含状況や流路跡形成期底面の状況を確認する必要がある。そこで、南から3本の深掘りトレンチを設定し、下部の土層状況を確認した。

1 Tは、調査区内の流路跡のほぼ中央に設定した。西側は流路跡西端が確認される状態で、そこには崩落した地山のブロックが確認された。中央部分の断面では、礫層に混じって階段状の平面を



図46 1号流路跡深掘りグリッド・トレンチ位置図

区の10m間隔のグリッドに沿った深掘りグリッドを設定して部分調査で対応することにした。深掘りグリッドは3×3mの規模とし、合計14か所を特に礫層が深いと考えられる階段状の高まりの部分を中心に設定した。深さは、流路跡形成期の底面を目安とした。このうち9本のグリッドから遺物が出土し、各深掘りグリッドから出土した遺物を表3にまとめた。出土場所では、南側に設定したものに遺物が若干含まれている傾向があった。

礫層以下から出土した遺物について、一部を図48に示した。

1は土師器杯で、1号杭列調査の中で杭の底部を確認する中で礫層から出土したもので、遺物番号を付けて取り上げたものである。底部から体部下端にかけて回転ヘラケズリが施され、内面ヘラミガキ、黒色処理されている。体部に墨書が認められるが、文字は判読できなかった。

2は須恵器杯で、底部に回転ヘラ切り痕が残っている。底径指数が75と底部がやや大きめに作られており口縁部が外反する器形である。体部には横に「菱」と思われる墨書がある。須恵器杯に

呈する部分で、砂層が貫入する状態が観察された。遺物は出土しなかった。

2 Tは、1 Tの北側に設定した。1 Tと同様、礫層に砂層が貫入する状況も観察されたが、更に黒色粘質土も含まれている部分もあった。遺物は土師器と須恵器の破片が出土している。

3 Tは、調査区北壁に沿って、礫層が高まる部分に設置した。断面は図10に示しており、下部に礫層が続いた形となっている。礫層からは、土師器の破片と須恵器の杯(図48-2)が出土している。

1・2 Tの流路跡西端部分から続く礫層から続く流路跡形成期の底面と思われる層の境界部分について、太い線で示した。礫層上面からの厚さは、中央の階段状となっている部分が深く約1.5m、西側の溝状の落ち込みとなっている部分が浅く20cmとなっている。

断面の状況を見ると重い礫層の間に流水によって運ばれた少量の砂層や粘質土の層が認められており、流路跡機能時に、礫層に砂層が混じりながら徐々に埋まったものと思われる。

これら深掘りトレンチからは、遺物の出土はごく少量であったため、礫層以下については、調査

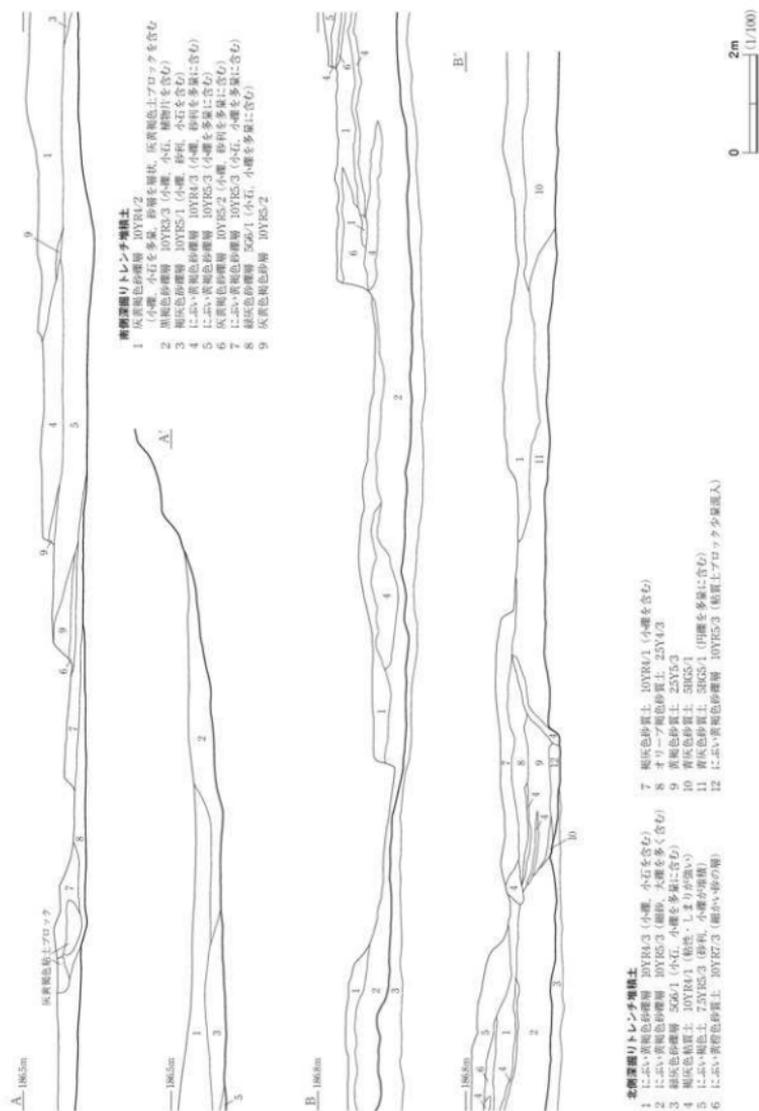


図47 1号流路跡深掘りトレンチ土層断面図

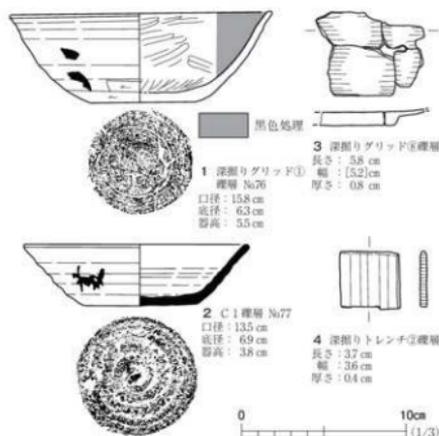


図48 1号流路跡出土遺物 (28) 礫層以下の遺物

書かれる墨書については、古い段階のものが横に小さく書かれる傾向にあり、2についても同様であるものと思われる。

3は、木製品の椀または盤状を呈する皿で底部の一部のみが遺存していた。

4は、ケビキ線をもつ板材で曲物の側板等に利用されたものと思われる。(藤谷)

第3節 2号流路跡 (遺構 図49 写真5・25)

2号流路跡は、調査区の中でもI区の北東側に位置する流路跡である。表土を除去した段階でこの付近で地山灰褐色粘土層が検出されなかった。1号流路跡検出時に設定したST4・6とST5・7で、明らかに1号流路跡より新しい時期のものと思われる土層が検出された。しかし、遺物の出土量が多い1号流路跡の調査を先行し、また排土や北側農道の撤去時期から、2号流路跡に着手したのは調査終了に近い10月後半からとなった。

調査区内では、北東隅で検出され、その規模は長さ約40m、幅約13mとなっている。2号流路跡についても礫層上面まで掘削したところ、東から西に向けて階段状の段差が2か所で確認されている。東側のものは長さ22mで高さは最大で25cmとなっている。西側のものは長さ25mで高さは最大で20cmとなっている。検出面の灰褐色粘質土から流路跡底面までの高さは、南端部で120cmとなっていた。

2号流路跡内に堆積する土層については、ST4・6、ST5・7、調査区北壁断面で確認することができた。土層については、調査区北壁付近で1号流路跡の上部堆積土に近似する黒褐色粘質土が堆積しているが、他は粘質土と砂質土が交互に堆積する流水層となっている。

表3 深掘りグリッド・トレンチ出土遺物数

名称	土師器	須恵器	木製品
2T	6	3	0
3T	4	4	0
1G	10	1	0
2G	8	2	0
3G	1	1	0
4G	3	8	0
6G	3	1	0
8G	4	1	5
9G	1	4	0
13G	0	1	0
14G	0	1	0

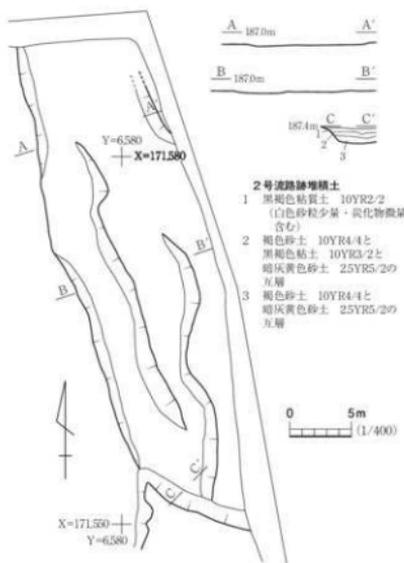


図49 2号流路跡

遺物は土師器の細片が3点のみ出土している。

2号流路跡については、出土遺物も少なく時期を特定することができなかった。ほぼ全面に流水層があり、1号流路跡の埋没土層を切っているところから、1号流路跡埋没後に河川の氾濫によって形成された流路跡である可能性が高い。(藤谷)

第4節 溝跡

検出された溝跡は13条である。このうち1・3・10～12号溝跡は一連の施設と認識でき、近世以降の遺物が多く出土する点で共通する。古代と考えられる溝跡は5・6・9号溝跡の3条である。2号溝跡は古代に属する可能性があるが遺物が無く時期を明確には絞り込めない。残る溝跡は時期不明である。

1 平安時代の溝跡

平安時代に属する溝跡は5・6・9号溝跡の3条である。

5号溝跡 SD5 (遺構 図50 写真30～32, 遺物 図51-1～12 写真56)

Ⅲ区の西半分を南北に流れる溝跡で、D11・12, E11・12, F11～14, G13・14グリッドに位置する。検出面はLⅢである。1号流路跡、2号土坑と重複関係にあり、両者に切られている。Ⅲ区において調査序盤に検出していたが、1号流路跡の調査を優先してⅢ区は後に回すことになった。9月後半に南側農道がなくなり、再度検出したところ1号流路跡との重複関係が確認できた。そこ

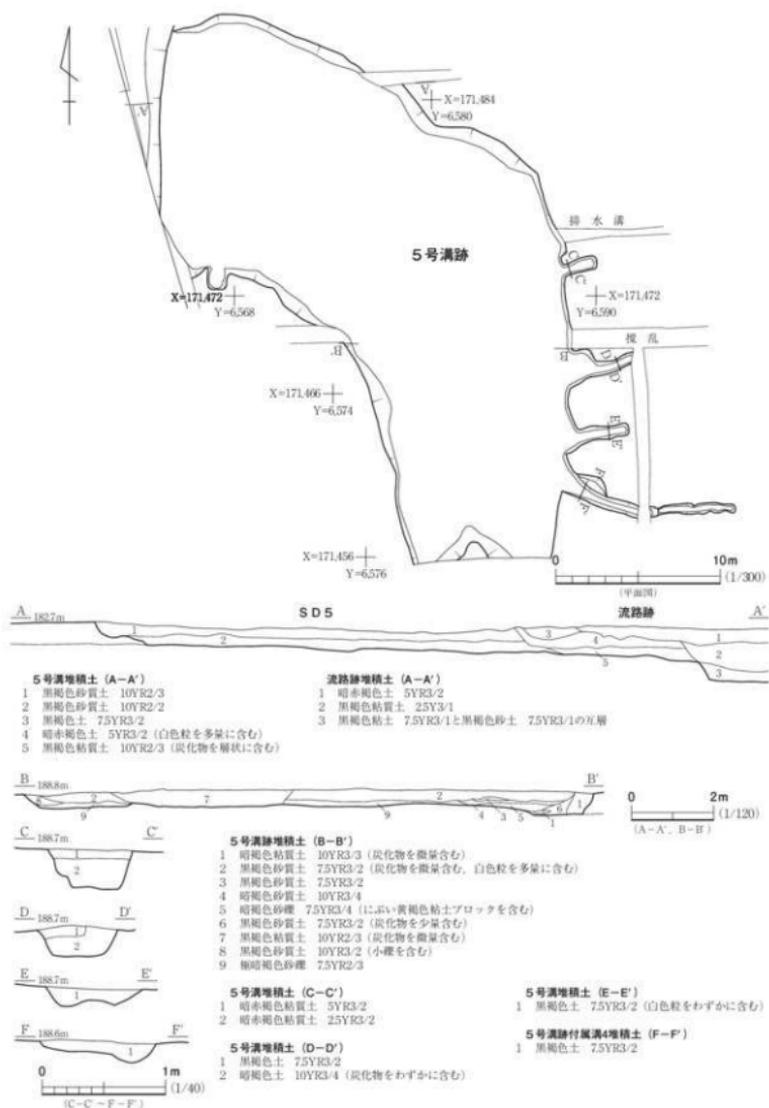


図50 5号溝跡

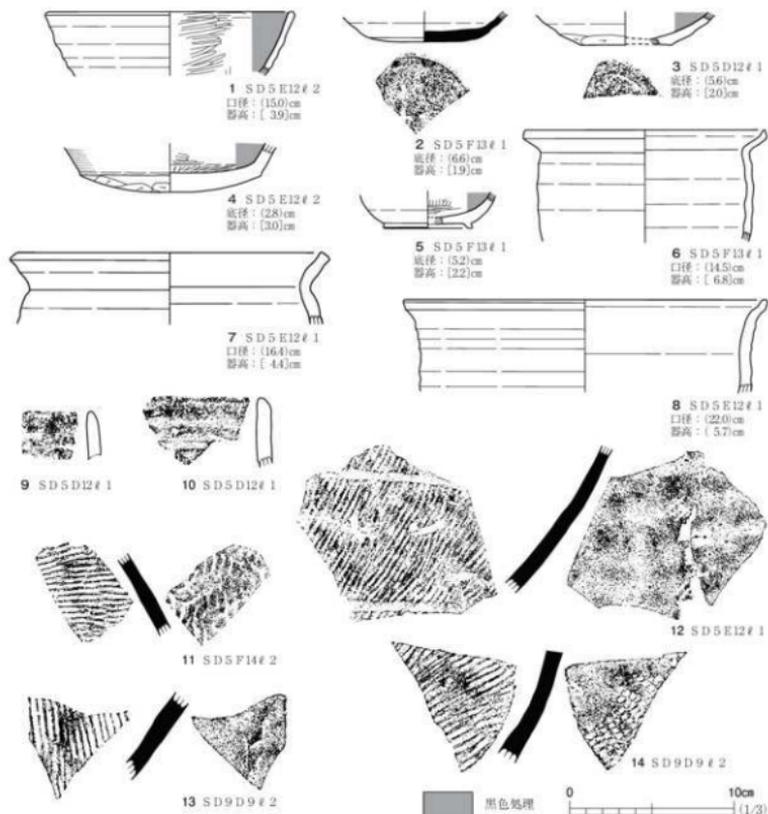


図51 5・9号溝跡出土遺物

で南側農道の北側に掘っていた排水溝をサブトレレンチとして利用し、堆積状況を確認することにした。堆積状況から1号流路跡が5号溝跡の堆積土を切っており、1号流路跡の堆積土が明確に立ち上がることを確認した。

B-B'断面では重複関係にある遺構のような堆積が見られる。別の遺構が切りあっている可能性を考え、平面的な精査を行ったが明確に遺構と呼べる範囲は検出できず、同一遺構内での部分的な堆積土の違いと判断した。1号流路跡のような明確な流水層は見られないが、底面付近で礫層が見られることから考えると流水があったことが想定される。その場合、底面のレベルを比べると、南→北という流れの方向になる。

1号流路跡を除くと今回の調査で検出された遺構の中では最も規模が大きい。最も狭い場所

8.6m. 広い場所で15mの幅を持つ。F 13・G 13グリッドでは東側に4本の支流のような溝が確認できる。南側の溝が長い。いずれも幅が狭く、検出面からの深さも浅い。後述する13号溝跡もⅢ区では溝の上場と下場のレベルがほぼ変わらないことから、Ⅲ区ではほぼ場整備の際に上部の面が削られている可能性が考えられる。

検出段階では土器の破片が多く見られたが、底面に近づくにしたがい遺物が出土しなくなった。土師器・須恵器が出土しているが、砕片が多く図示できる遺物が限られる。図51には土師器杯3点、高台杯1点、甕3点、筒形土器片2点、須恵器杯1点、須恵器甕片2点を示した。図51-1・3・4は土師器の杯である。1・3・4は黒色処理がされている。1の外側はロクロ成形の凹凸を明瞭に残し、内側はロクロナゲ後、横方向のミガキが施されている。2・3の底部は回転ヘラケズリによって切り離されている。4は5号溝跡出土の遺物の中でも古い特徴を持つ。底部は丸底に近く、手持ちヘラ削りが施されている。ほかの遺物と明らかに年代が離れており、1点のみの出土であることから、遺構の上限を示す資料として考えることは難しく流れ込みと考えたい。

5は土師器高台杯である。残存部位では内面・外面ともにロクロ成形の凹凸が平坦に整えられている。



図52 6・9号溝跡

6～8は土師器甕を示した。いずれも口縁部付近が残存している資料で、ロクロ成形で作られている。いずれも外面はロクロ成形時の凹凸を残すが、7・8の内面が比較的平坦に調整されているのに対し、6は内面にも凹凸が残る。6・7は頸部の屈曲が強く「く」の字を呈しているが、8は屈曲が弱い。

9・10は筒形土器の破片である。どちらも輪積みによって作られたもので、砂粒を多く含む。

11・12は須恵器甕の破片である。11は外面にタタキ目、内面に当て具痕が見られるが、12の内面はナゲ調整がされている。12は横方向の沈線が2条施されている。

6・9号溝跡 SD6・9 (遺構 図52 写真33・34, 遺物 図51-13・14 写真56)

6号溝跡はD 10・E 10グリッドで検出した。検出面はLⅢである。1号流路跡から南東方向に延びる溝跡で、検出時には重複関係は確認で

きなかった。全長は4mと今回調査された溝の中では短い。堆積土は自然堆積で4層に区分でき、いずれも砂を基調としている。西側のほうが底面のレベルが低く、流路跡の方向に流れが向いていたと想定され、1号流路跡に関連する溝跡と考えられる。

出土遺物は土師器片が出土しているが、図示できる大きさのものはなかった。機能していた時期は1号流路跡が機能していた時期と同時期と考えたい。

9号溝跡はD9・E10グリッドで検出した。検出面はLⅢである。6号溝跡と同様に1号流路跡に接し、重複関係がないことから1号流路跡に付属する溝と言える。堆積土はℓ1が砂と礫の互層、ℓ2が礫層である。全長148mで、幅・深さが一定ではなく、場所によって変化を繰り返す。人為的に掘削された溝ではなく、自然流路の可能性が考えられる。

遺物は須恵器甕片を2点示した。図51-13・14は胴部の破片で、外面にはタタキ目、14の内面には当て具痕が見られる。色調が同じであることから、本来は同一固体であると考えられる。西木流C遺跡出土のほかの須恵器甕の破片に比べ表面が黒い点が特徴で、この色調の須恵器は9号溝跡のみから出土している。1号流路跡の堆積土と重複関係が確認できないことから、1号流路跡と同時期の遺構と考えたい。

2 近世以降・その他の溝跡

近世に属すると考えられる溝跡は3条確認できる。そのうち、1号溝跡と4号溝跡はそれぞれ8号溝跡、7号溝跡と重複関係にある。7・8号溝跡は出土遺物が少ない、または皆無なため年代が判定できない。重複関係にある溝跡を一括して記述する。2号溝跡は平安時代に属する可能性があるが、出土遺物が皆無に近く時期が特定できないためここで扱う。

1・8号溝跡 SD1・8 (遺構 図53・54 写真26・27, 遺物 図55・56 写真56～58)

C5・6、D6～8、E8～10、F10・11、G11・12、H12・13グリッドで検出し、検出面はⅡ区ではLⅠおよび1号流路跡ℓ1、Ⅲ区ではLⅡ・Ⅲであった

Ⅱ区で調査序盤に検出した溝であり、Ⅲ区まで続くことがわかっていたが、1号流路跡を掘り込んで作られているため、重複関係にある部分を優先して調査した。Ⅲ区の部分に関しては1号流路跡の調査から人手を割けるようになってから行った。

調査区を南北に走る溝跡であり、検出された全長はおよそ110mに及ぶが、北側はさらに調査区外に続くと思われる。南東端で8号溝跡と重複関係にあり、8号溝跡よりも新しい。調査区中央付近で3号溝跡と合流するが、重複関係は無く、出土遺物にも時期差は見られないため同時期に機能していたと考えられる。北側は1号流路跡の堆積土を掘り込んで構築されている。そのため平安時代の遺物が多く出土した。堆積土はℓ1が人為堆積、ℓ2・3は自然堆積で、流水に伴う堆積と考えられる。所々に深く掘り込まれ、木杭が打ち込まれた堰と思われる箇所が確認でき、これらの要素からは用水路としての機能が想定される。出土遺物から考えると近世に掘削されたものだろう。

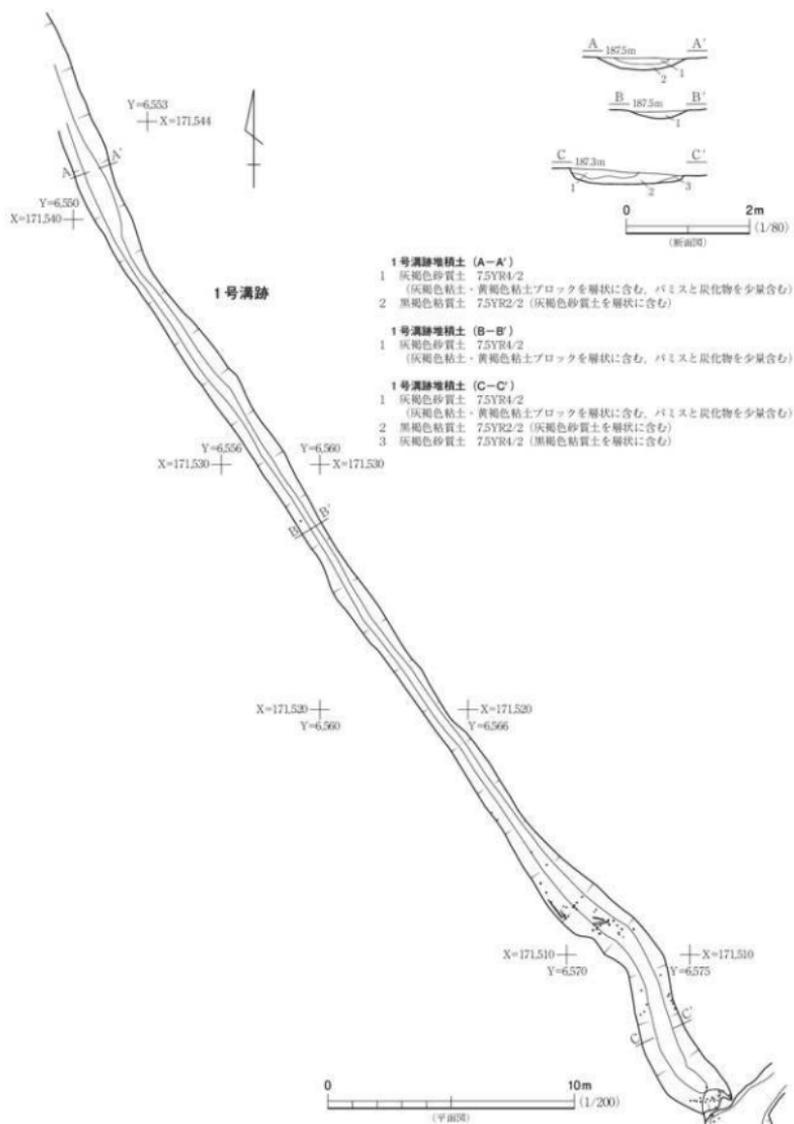


図53 1号溝跡(北半)

西木流C遺跡では1号溝跡からの出土遺物は1号流路跡の次に出土量が多い。また、有機質の遺物の残りも良かった。

図55-1~7は陶磁器を示した。1は陶器の碗である。釉薬が施されるが、染付けはされていない。

2・3・6は磁器の碗である。2は外面に花の文様を描き、内面は2条の線を巡らせる。3は草木の文様を外面に描き、内面は口縁部から体部の中央付近までに染付けを施している。

4は陶器の瓶である。胴部の下半にロクロ目が明瞭に確認できる。また、頸部の少し上には装飾的な要素を持つ。

5は磁器の皿である。内面には笹の葉や花びらなどの文様が描かれる。文様が複雑で規則的であることから、型紙を用いたものだろう。7は陶器の播鉢である。

8~10は須恵器甕の破片を図示した。8は頸部付近が残った破片で外面にはタタキ目と沈線が見られる。

図55-11~13、図56-1~4は木製品である。

11・13は椀である。ともに内面は朱漆が塗られ、13は外面に黒漆が塗られている。

12は箸で、先端を削って尖らせている。

図56-1は板状の木製品である。曲物の底板の可能性も考えられるが、円形にはならず正確な用途は不明である。

2は曲物の底板である。板の厚さは1.2cmで1号流路跡出土も曲物底板よりも厚みがある。

3と4は服飾関係の木製品で、3は下駄である。長楕円形で、土踏まずの部分を削り込むことで歯を作り出している。前壺と後壺の3か所に穴が確認できる。爪先側に反りがあり、踵側よりも高く作られている。4は横櫓である。

5~10は石製品を示した。5・6は砥石である。5が使用により小さくなっているのに対し、6はあまり使用されず、当初の形に近いと考えられる。1号溝跡は平安時代の遺物と近世以降の遺物がどちらも確認でき、砥石自体の形態が時期によってあまり変わらないことから正確な時期は断言できないが、6は近世以降の可能性が高い。

7は石製の支脚と思われる。時期は不明だが、1号流路跡から土製の支脚と考えられるものが出土していることから考えると平安時代のものである可能性も考えられる。

8~10は石盤の破片と考えられる。石盤は近代において文具として用いられた。表面には石筆の使用によるものと考えられる無数の痕跡が確認できる。

11~14は金属製品を示した。11~13はキセルである。12・13は雁首、11は近接して出土したため雁首と吸い口を同一固体と判断した。11と12には羅字の部分の木質が遺存している。また、11では雁首に文様が刻まれている。

14は1円玉で、昭和24年(1949年)に鑄造された黄銅製である。1円黄銅貨は昭和28年(1953年)で廃止されており、現在では流通せず使用もできない。1号溝跡が少なくともほぼ場整備前の昭和

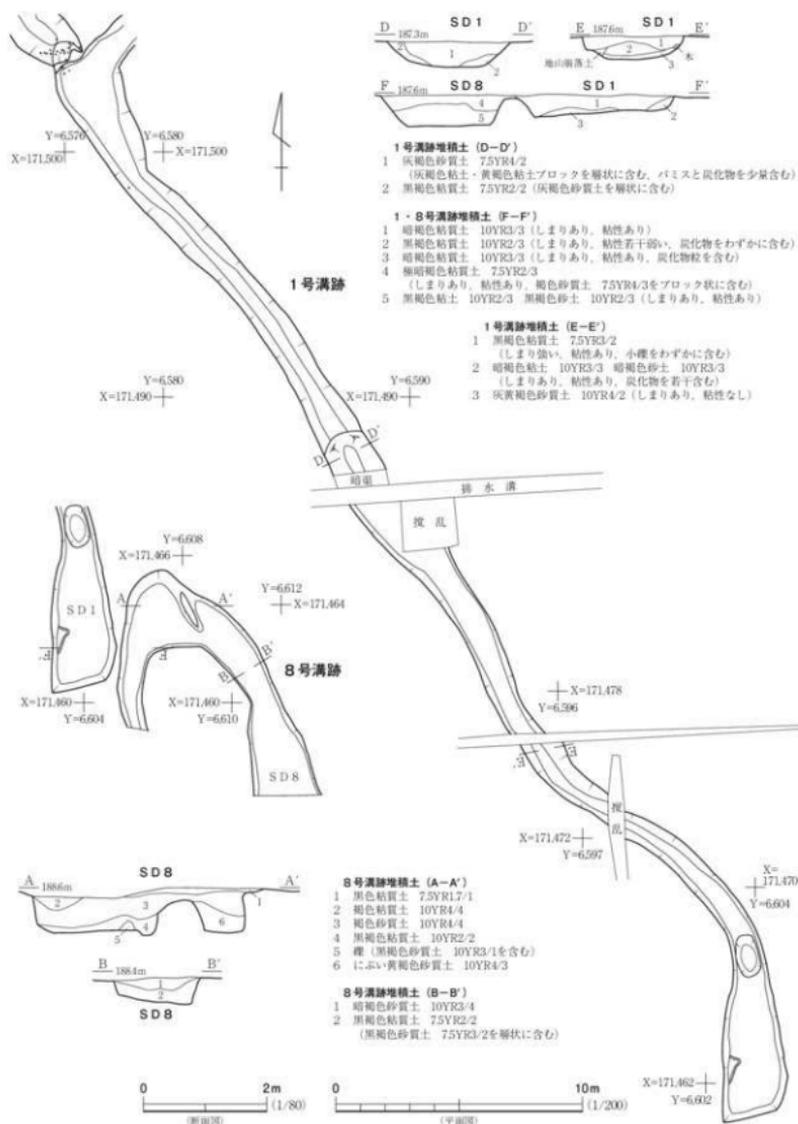


図54 1・8号溝跡

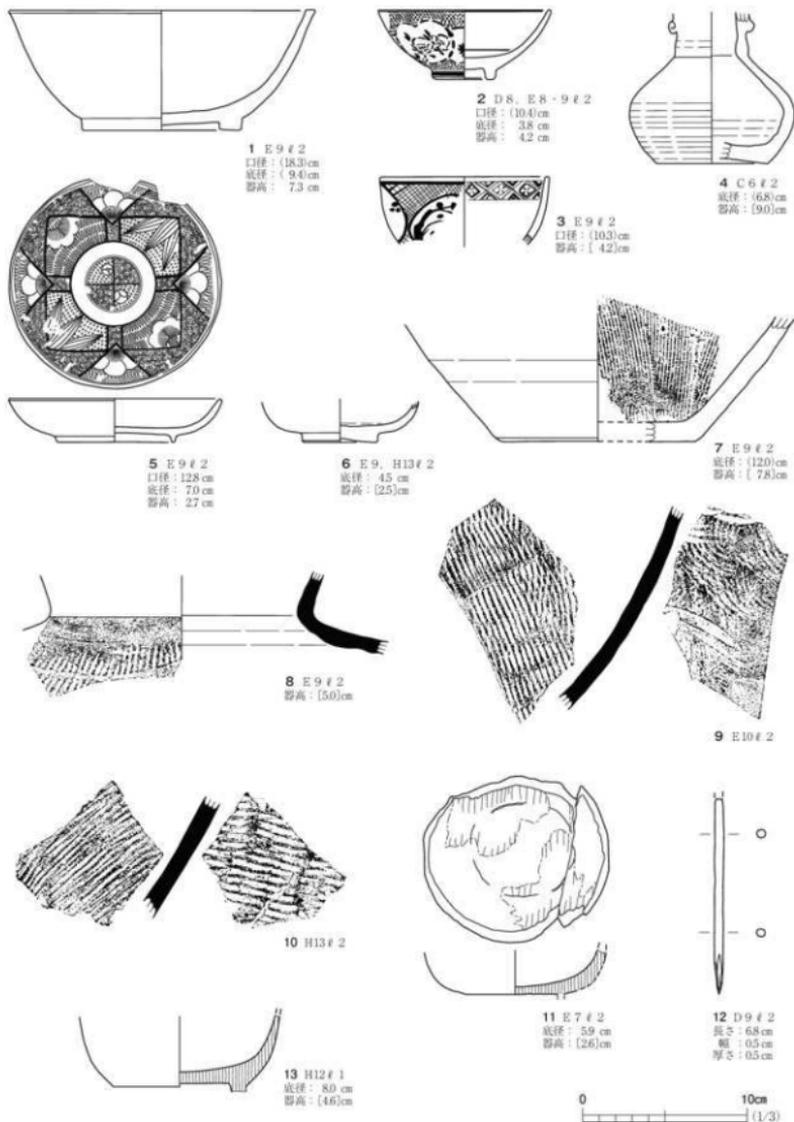


図55 1号溝跡出土遺物(1)

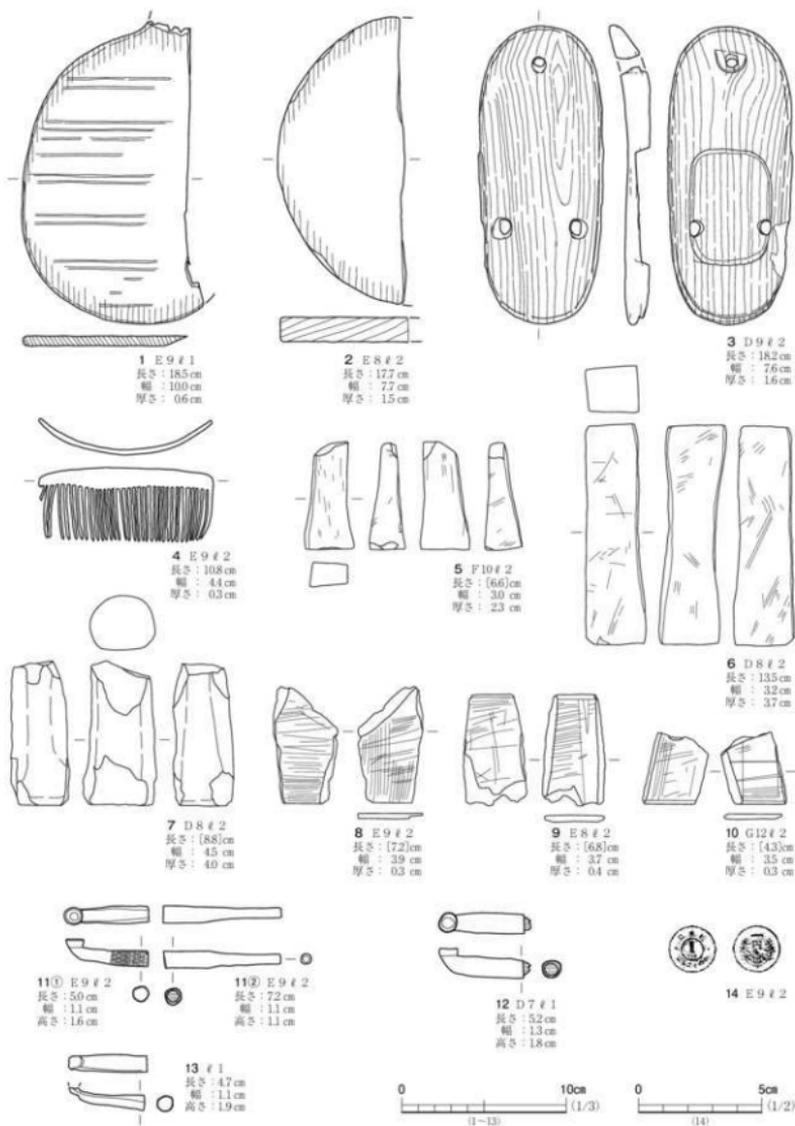


図56 1号溝跡出土遺物(2)



図57 2・3号溝跡

24年までは用水路として機能していた可能性を示す遺物である。

8号溝跡は調査区南東端のH13・14、I13・14グリッドで検出した。検出面はLⅡである。検出された範囲では大きく弧を描いている。黒褐色や褐色の粘質土、砂質土、礫が堆積しており、流水に伴う堆積である。調査範囲に限られるため遺構の性格は明確にできないが、調査区外の南側に続いているため2次調査以降で性格が判明する可能性がある。1号溝跡の底面がLⅢで検出できたのに対し、8号溝跡はLⅣが底面となっている。出土遺物は全く出土せず、時期を絞り込むことはできないが、1号溝跡が掘削される以前に機能していた溝である。

2号溝跡 SD2 (遺構 図57 写真28)

F6・7グリッドで検出した。遺構の検出面はLⅢである。検出自体は調査序盤に行っておりその存在がわかっていたが、1号流路跡の調査のための重機の往来や、壁際にベルトコンベアを設置したなどがあり、調査を実施したのは11月に入ってからである。全長8.2m、幅は0.4m前後と幅が狭く、検出面からの深さも0.1m前後で推移する非常に浅い溝跡である。F7グリッドで1号流路跡東側付属施設に接続する。堆積土は自然堆積で、非常に固くしまっていた。

遺物は図示できない大きさの土器器碎片が1点のみ出土している。時期を限定することは難しいが、南側に位置する東側付属施設と一体の溝であったと考えられ、そこに水を流し込む機能を持つ平安時代の遺構である可能性が考えられる。

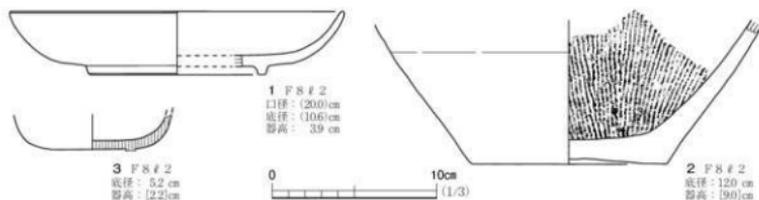


図58 3号溝跡出土遺物

3号溝跡 SD3 (遺構 図57 写真28, 遺物 図58 写真56)

E9, F5～9グリッドで検出した。検出面はLⅢである。3号溝跡の南半分は早い段階で検出して掘り上げたが、北半分は重機が頻繁に往来したため検出を遅らせた。E9グリッドで1号溝跡と合流し、F5グリッドでは11号溝跡と接続する。堆積土は1号溝跡と共通した特徴を持つ。長さは40mをこえる。F9グリッドで杭が確認でき、溝の幅も広がることから堰などの施設であったと考えられる。

出土遺物は3点を掲載した。図58-1は陶器の皿である。体部外面にはロクロ成形の痕跡を確認でき、底部はケズリによって調整されている。2は陶器の播鉢である。1号溝跡出土の播鉢と色

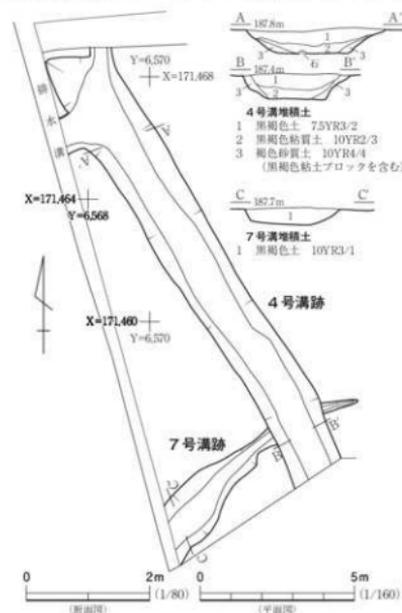


図59 4・7号溝跡

調が似ているが、別固体である。同一の窯で焼かれた製品である可能性が高い。3は木製品の椀である。外面は黒漆、内面は朱漆が塗られている。1号溝跡に比べ遺物の出土量は少なかった。機能していた時期は1号溝跡と同時期と考えられ、近世以降は場整備が行われるまで使用されていたと考えられる。

4・7号溝跡 SD4・7 (遺構 図59 写真29・34, 遺物 図60 写真56)

Ⅲ区西側に確認した溝跡で、D13, E13・14グリッドで検出した。検出面はLⅢである。E14グリッドで7号溝跡と重複関係にあり、4号溝跡が切っている。

4号溝跡は長さ21mほどを検出した。E13グリッドで流れの方向が変わり、溝跡は西側と南側で調査区外に続く。溝の幅は1.8m～2m前後で一定の幅を保っている。

堆積土は1号溝跡や3号溝跡に似ており、

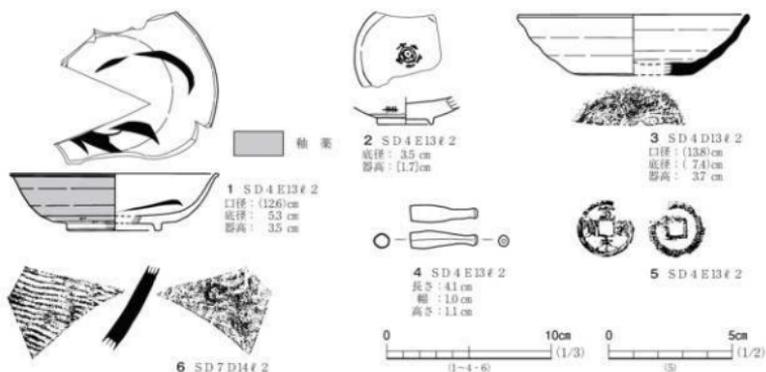


図60 4・7号溝跡出土遺物

①は人為堆積と考えられるが、それよりも下は水が流れていたことによる堆積であると想定される。

出土遺物は土師器、陶磁器、金属製品を示した。

1は陶器の皿である。内外面ともに軸葉が塗られているが、高台部分と内面の文様の部分のみ軸葉が施されていない。

2は磁器の碗の底部である。内面の底部には濃い藍色の顔料で花と思われる文様が描かれている。

3は須恵器の杯である。外面はロクロ成形の凹凸が明瞭に残る。内面はナデによって比較的平坦に整えられているが、わずかに凹凸が残る。

4・5は金属製品を示した。4はキセルの吸い口である。内部に木質は残っていなかった。5は古銭である。一部が欠けているが、「寛永通宝」の文字は比較的明瞭に確認できる。

4号溝跡は出土遺物から見ると近世以降に機能したと考えられる。上面からはゴム製品やビニールなどが出土しており、ほ場整備の際に埋め戻された可能性が高い。

7号溝跡は前述したように4号溝跡に切られている。調査区端で検出した遺構であり、西側に延びることが想定される。堆積土は自然堆積したもので、固くしまっていた。

出土遺物は須恵器甕の破片を1点掲載した。図60-6の外面にはタタキ目、内面には当て具痕がナデ消されている。年代の下限は4号溝跡が掘削される時期だが、上限は根拠に欠けるため不明である。

10～12号溝跡 SD10～12 (遺構 図61 写真34・35, 遺物 図61 写真57)

F5グリッドで検出した。検出面はLⅢである。C4～F4グリッドには調査終盤の10月後半まで農道が残っており、農道部分の掘り下げや、ベルトコンベアをI区に移動するなど、重機の出入り口になっており遺構の検出が遅れた。また、本来10～12号溝跡は西側に延びていた可能性が考

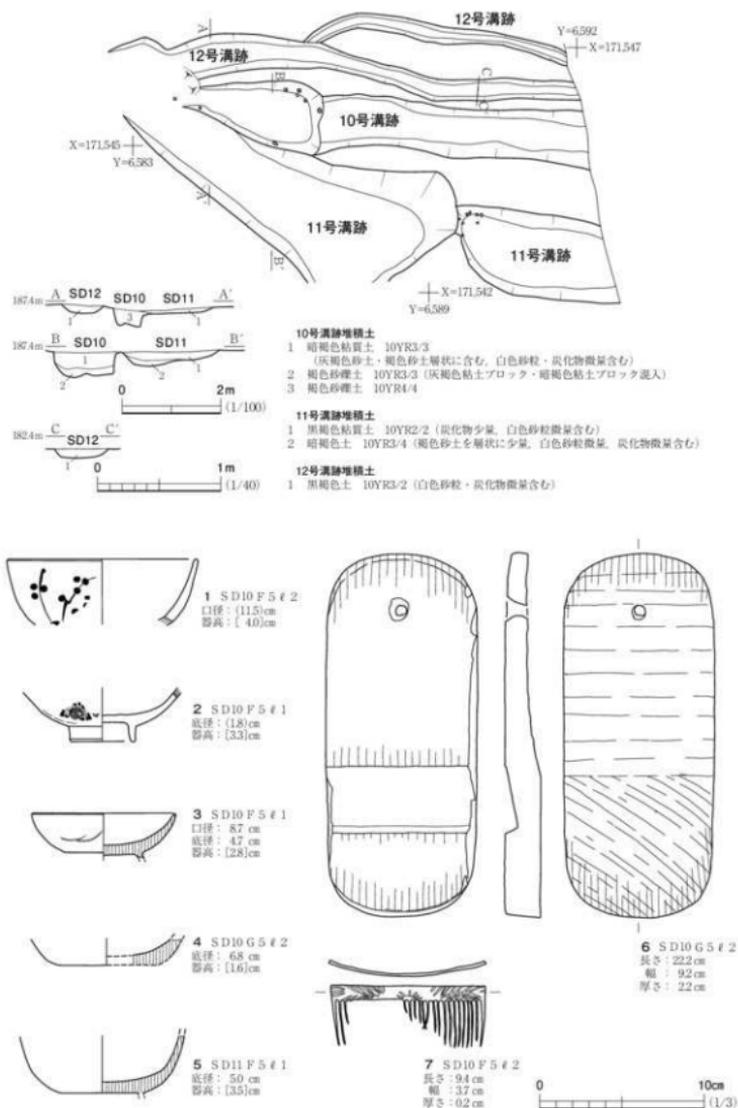


図61 10~12号溝跡, 10・11号溝跡出土遺物

えられるが、調査の序盤で流路跡の存在が明らかになり、土量や出土遺物量が多い流路跡の調査を優先したため西側部分は検出しなかった。

並行する3条の溝で東西方向に流れる。12号溝跡は重複関係が無く、10号溝跡は11号溝跡によって切られている。F5グリッドの南端付近で11号溝跡と3号溝跡が接続する。12号溝跡は2つの溝跡をまとめているが、堆積土に違いが見られないことから一括して12号溝跡とした。堆積土は10号溝跡が暗褐色粘質土と褐色砂礫、11号溝跡が黒褐色粘質土と暗褐色土、12号溝跡が黒褐色土で、いずれも白色粒や炭化物を含んでいる。堆積は人為堆積によるものである。10号溝跡では杭が打ち込まれており、その部分は周囲に比べ深さがあるため堰の可能性はある。

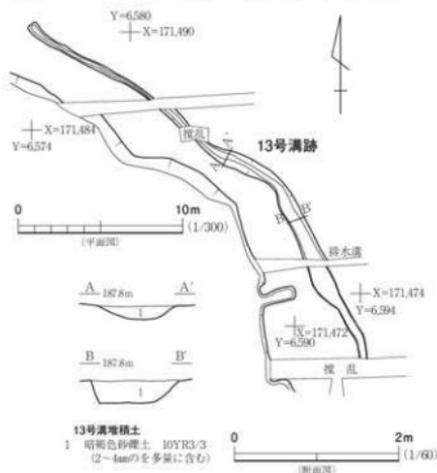


図62 13号溝跡

定していた可能性が考えられる。7は竖櫛で草木の文様が刻まれている。

11号溝跡からは図61-5の挽物椀が1点出土している。内外面ともに漆が塗られている。

12号溝跡からは遺物は出土しなかった。

10～12号溝跡は古代の遺物が混じるが、1号溝跡などと同じように流れ込みあるいは耕作の際に出土したものを廃棄したと考えられ、溝跡の主要な機能時期は近世以降と考えられる。

13号溝跡 SD13 (遺構 図62 写真35)

E10・11, F11・12, G12グリッドで検出した。検出面はLⅢである。F11グリッドでは挽乱に切られている。また、調査区に水がたまりやすかったためⅡ区とⅢ区の境界にあった農道の南側と北側に掘った排水溝によって切られている。遺構の半分ほどが南側農道の下にあったため検出・調査は終盤に行った。

出土遺物は陶磁器、木製品を図示した。

図61-1は磁器の碗である。軸葉が施され、外面には草木の文様が描かれる。2は陶器の碗である。花を主体とした文様が描かれるが、規格性が強く、版型を使用したものである。3・4は木製品の碗である。3の外面は黒漆、内面は朱漆が塗られている。外面は金色で蒔絵が描かれていて、鳥が描かれている。4は内外面ともに赤色の漆、6は下駄である。明確な歯はなく、台裏の土踏まずの部分が加工されている。前壺はあるが、後壺は台表にも側面にも確認することができない。踵部分を観察すると、微細な穴が数か所確認でき、それを用いて鼻緒を固

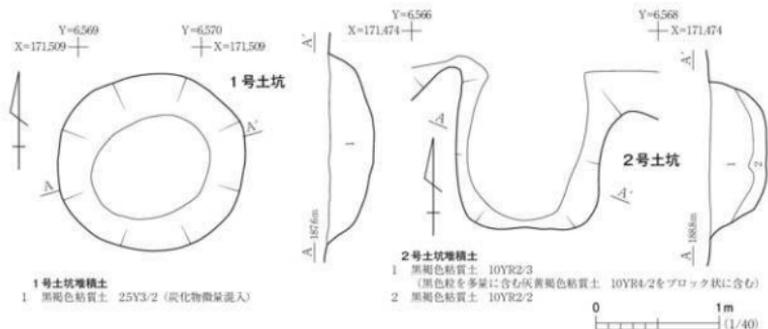


図63 1・2号土坑

堆積土は自然堆積で、砂礫が堆積していた。所々で上場よりも下場の幅が広い場所があり、流水により削られた可能性が考えられる。長さは確認できた範囲で約30mである。G12グリッドでは上場と下場のレベルがほぼ変わらず、検出面からの深さは2cm前後しかない。ほ場整備の際に削られた可能性が高い。出土遺物は土器片が出土しているが、細片のため図示できなかった。(鶴 見)

第5節 土 坑

今回の調査では土坑の検出は少なく2基のみが検出された。検出した位置は調査区の中央付近と調査区の南西で、平面形は1基が円形、もう1基は楕円形に近い。

1号土坑 (遺構 図63 写真35)

調査区中央付近D9・E9グリッドで検出した。重複関係にある遺構はなく、1号流路跡、1・9号溝跡に近接した土坑である。用途は不明であるが、いずれかに関連する可能性が考えられる。規模は長さ1.5m、幅1.4m、検出面からの深さは38cmであった。堆積土は黒褐色で自然堆積である。出土遺物は染付けがされている磁器の破片が1点出土しており、近世以降のものである。1点のみの出土であるため時期を限定することは難しいが、近世以降の場合、1号溝跡に関連する施設だろう。

2号土坑 SK2 (遺構 図63 写真35)

D12グリッドで5号溝跡の調査に検出された。5号溝跡と重複しており、2号土坑が新しい。堆積土は5号溝跡の堆積土に類似している。大きさは長さ1.7m、幅1.1m、深さは検出面から47cmほどである。出土遺物は土師器が出土しているが、全て細片で接合もしなかった。用途や年代を明確にはできないが、5号溝跡よりも新しいものであり、5号溝跡にある程度土が堆積した後

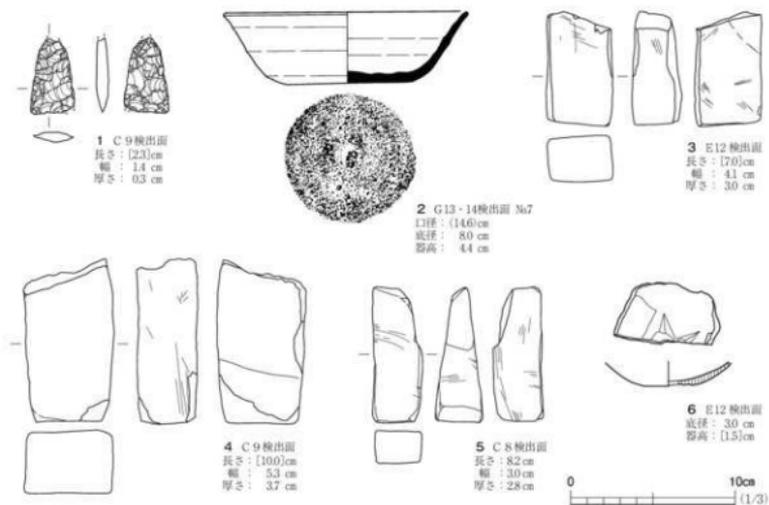


図64 遺構外出土遺物

に掘られた土坑であると考えられる。

(鶴 見)

第6節 遺構外出土遺物 (遺物 図64 写真58)

今回の調査では遺構に伴う遺物がほとんどであり、遺構外から出土した遺物は限られる。検出の際に表土層から出土した遺物を中心に図示する。

図64-1は石鎌である。C 9グリッドで出土した。先端部が欠けており、逆刺はほとんどない。時期は不明であるが、弥生時代以前のものであろう。該当する時期の遺構が今回の調査では確認されておらず、流れ込みと判断できる遺物である。

2は須恵器杯である。G 13グリッドで出土した。ロクロ成形で、ナデによって凹凸は解消されている。胎土には白色粒が多く含まれる。1号流路跡出土の須恵器杯よりも底径が大きく、今回出土した須恵器杯の中では古い要素を持っている。

3～5は砥石を示した。どの時期のものであるのかは不明である。3は赤褐色、4・5は白色に近い色調の石材を用いている。3・4は長方形に近い形を残しているが、5は使用回数が多いと思われる、磨滅で変形している。3はE 12グリッド、4はC 9グリッド、5はC 8グリッドから出土した。

6は木製品で椀と推定される。外面は黒漆、内面は朱漆が塗られている。内部の底面には金粉によるものと思われる文様があり、星状と推定する。E 12グリッドで遺構の検出時に出土した。1号流路跡で出土した椀に類似しており、近世以降のものと考えられる。

(鶴 見)

第3章 ま と め

第1節 1号流路跡出土の土器について

今回の調査で出土した土器のほとんどは、1号流路跡から出土したものであり、外見の調整技法等からみて、時期的に区分される可能性が高い。1号流路跡は、大きくは底面の礫層と古い段階に機能した時期、東側を流れる新しい時期に機能した時期、流路跡が機能を停止し、そこに土層が流れ込んできた時期の3つの時期に区分される。それぞれの時期で特徴的な土器について、再録し若干の検討を加えてみたい。

1 礫層と流路跡中央部の古い段階に機能した流路の底面近くの流水層から出土した土器

対象となる土器を図65-1~8に示した。土師器杯(1~3・6・7)では、底部から体部下端にかけて回転ヘラケズリが施され、内面黒色処理・ヘラミガキされているもののみが出土している。手持ちヘラケズリが施されたものや底面に糸切り痕が残るものは出土していない。器形は器高指数が43と器高が深いものから、底部から口縁部にかけて内湾気味に開くもの、内湾気味に開いて口縁部が外反するもの等のバリエーションが認められる。

須恵器では、器高指数が28と器高が低く、底径指数が46、51と底部がやや大きめの杯(4・8)が出土している。他に須恵器では蓋(5)が出土している。

内外面が黒色処理されていない赤焼土器は全く出土していない。

これらの遺物は、流路跡の機能開始時期を考える上で重要な遺物で、土師器の器形や調整技法から、9世紀中頃を中心とする年代のものと考えている。

2 新しい時期の流路跡(東側及び北側)底面及びその上面の流水層から出土した土器

流路跡は、礫層の底面上に砂質土と粘質土の互層からなる流水層を残して、最後には、徐々に埋まっていったものと考えられる。東側及び北側については、礫層上面に流水層があり、その上面に埋没土である黒褐色粘質土が堆積している。流路跡の断面の状況から流路跡でも東側から北側にかけては、古い段階の流路跡を切るような形で形成され、新しい時期の流路跡となっている。この東側~北側にかけての底面及び、底面近くの流水層から出土した遺物は、流路跡が最終的に機能した年代を示す遺物と考えられる。

この付近から出土した代表的な土器を図65-9~22に示した。

土師器の杯では、前段階の内面黒色処理・ヘラミガキ、底部~体部下端回転ヘラケズリといった定型的なものから、様々なバリエーションが認められる特徴がある。体部の内外面にヘラミガキが入るものの数(10・15・18)が多い。黒色処理については、内面のみのも、内外面に施されているもの、ヘラミガキのみで黒色処理がされていないものもある。底部調整には手持ちヘラケズリのものが多く、無調整のものも混じっている。この時期には、杯で残りの良いもの(11)も出土している。

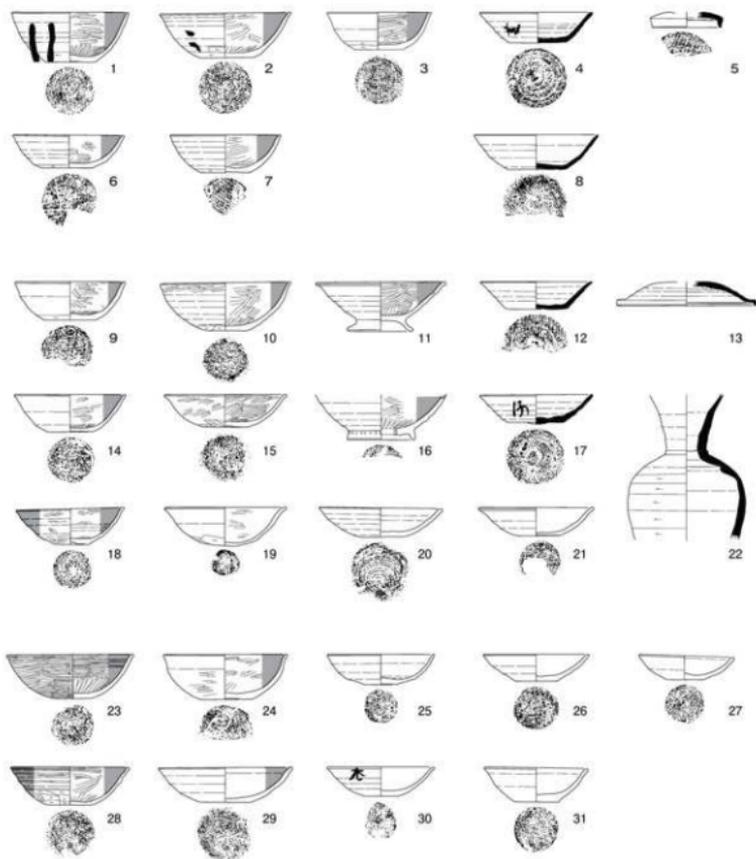


図65 1号流路跡出土土器

内面の調整は、黒色処理・ヘラミガキの杯と同様なものである。高台部は、外反するものと直立気味のものがある。

前段階と異なり、明確な赤焼土器も出土している。器形は、土師器杯に対して器高が低く、底径が小さい傾向がある

須恵器の杯では、器高指数が25.6と器高の低い杯(12・17)が出土している。他の須恵器としては、蓋(13)、口縁部が広がる長頸瓶(22)などが出土している。

流路跡の性格からして、古い時期の遺物が混じる可能性が常にあり、この時期の土器についても

一括遺物として時代性を完全に保証する資料ではないが、土師器杯類にバリエーションがあること、赤焼土器の出土量が、土師器杯と比較して少ないところから概ね9世紀終末～10世紀前半位の時期と考えている。

3 堆積土の②から出土した土器

流路跡の機能が停止した後の埋没土である②黒褐色粘質土から出土した遺物で、代表的な器種を図65-23-31に示した。

土師器杯では、新しい時期の流路跡底面から出土しているものと同じく内外面ヘラミガキされたもの(23・24・28)や外面に調整を持たず、内面に黒色処理されただけのもの(29)が出土している。また、体部下端に手持ちヘラケズリが施されているもの(28)も出土している。器形については、体部下端が膨らむもの(24)から、体部から口縁に外傾する傾向にあるもの(23・28)などのバリエーションが認められる。

②から出土した土器の中では、赤焼土器の出土比率自体が、前の時期と比較すると高くなる傾向が顕著となってくる。前の段階では、土師器の杯に近い形態のものが多く傾向にあったが、この層から出土した赤焼土器には、26・27のような器高の浅く小型の所謂「かわらけ」状の形態を呈するものも混じるようになってくる。

埋没土であるため、その時期については、一番年代幅があると思われるが、赤焼土器が完全な主体とならずに前段階の土師器杯が混じっている傾向があるところから、概ね10世紀以降のものと思われる。

また、埋没がほぼ完了した下限の時期については、この層から出土した農具「コロバシ」の放射性炭素年代測定の結果が11世紀前半～12世紀中頃の年代を示していることと、堆積土から中世と思われる遺物が出土していないところから、ほぼこの時期に収まると考えている。

4 出土土器群の変遷について

以上、流路跡内での出土位置や層位を手掛かりとして、出土土器について概観してきたが、土器の器種や種類の間係からみると、

<流路跡1期(9世紀中頃を中心とする年代)>

定型的なロクロ土師器の杯と須恵器からなり、赤焼土器がほぼ混じらないと思われる時期



<流路跡2期(9世紀終末～10世紀前半)>

土師器杯類にバリエーションが認められ、須恵器も出土し、赤焼土器が混じる時期



<流路跡が機能を停止し、埋没した時期(10世紀以降)>

土師器杯類にバリエーションが認められ、赤焼土器が主体となる時期に区別することができた。

(藤谷)

第2節 出土木製品について

西木流C遺跡では、1号流路跡からは土器の他に多くの木製品が出土した。その内容は農耕具・食膳具・祭祀具などのほか、杭や建築部材と推定されるものも見られるなど多岐にわたっている。中にはこれまで会津地方では出土例が見られなかった木製品、類例が少ない木製品をいくつか確認することができた。木製品の中には遺跡の性格を考える上でも重要なものもあるため、類例の少ない木製品を中心に出土木製品についてまとめておきたい。

図38-6はコロバシである。コロバシは東北地方では岩手県奥州市落合Ⅱ遺跡、宮城県仙台市中在家南遺跡について3例目である。全国的に見ても、石川県中能登町水白モンシヨ遺跡、富山県小矢部市五社遺跡、長野県更埴市社宮司遺跡、群馬県伊勢崎市大道西遺跡など、西木流C遺跡を含め7遺跡7例しか確認できない。コロバシ以外にもコロガシなどとも呼ばれる。発掘調査で確認された事例の多くが平安時代から中世の遺跡で出土しており、現状ではそれ以前の時期に遺跡から出土した事例は確認できない。用途は代掻きで使用されたと考えられている。

コロバシは特徴によって2つに区分することができる。A類は両端に軸状の突起を持つもの、B類は軸状の突起を持たないが、両端に孔があげられているものである。西木流C遺跡出土例は両端に孔があげられているB類に該当する。A類は落合Ⅱ遺跡、中在家南遺跡、水白モンシヨ遺跡、五社遺跡、B類は大道西遺跡、西木流C遺跡の例が該当する。社宮司遺跡出土のものは欠損が大きいため不明である。A類では軸状の突起に縄などを固定して使用し、B類では木製あるいは金属製などの軸を穴に挿し込み使用していたと考えられる。コロバシの使用方法は津軽藩士比良野貞彦が天明年間(1781～1788)に記した『奥民図彙』に見られ、そこでは「マルヒキ」と呼ばれ、軸に紐を結び付け人力で引いている。

西木流C遺跡においてコロバシが出土した流路跡の③から底面にかけては多くの土器も出土しているが、その年代は9世紀後半～10世紀前半にかけてのものである。コロバシは土器が多く出土した面よりも層位的には上で出土しており、遺跡の主要機能時期の遺物としては認識できない。コロバシの放射性炭素年代測定の結果は11世紀前半～12世紀前半と出ており、最終形成年輪が残っていないことからその年代よりは新しくなる可能性がある。9世紀後半～10世紀前半以降に、流路跡にある程度土が堆積した時期に廃棄あるいは流れてきたものと考えられる。

図35-1は脚と考えられる木製品である。脚と見られる木製品は矢玉遺跡から2点出土しており、1点が台脚、もう1点は机の脚と報告されている。それらは脚自体に木材を差し込む穴が確認できる点で図35-1とは異なる。図35-1はその上部に天板が組み合わさることが想定でき、机や台などの脚部である可能性が高い。

図34-9は紡織具の可能性が考えられる。類例は大阪府豊中遺跡、徳島県観音寺遺跡などで出土例が見受けられる。これらの製品は東村純子氏によって紡織具の一種である整経篋であると指摘

されている(東村2011)。神奈川県小田原市下曾我遺跡からも類似した特徴を持つ木製品が出土している。報告中では用途不明とされているが、類例として大阪府豊中出土の木製品が挙げられている(谷口2002)。また、この製品は『考古資料大観』では儀礼用具として掲載されている。下曾我遺跡からは出土品中には紡織具の「たたり」と推定される部材が出土しているが、たたりとするには柱の部分が見られず確定的ではない。神奈川県逗子市池子遺跡群№1-A東地点の旧河道跡からも類似した木製品が出土している。この旧河道跡からは紡織具が出土しており、同じ溝から紡織具が出土しているということを考えると、この木製品も紡織具の整経笥である可能性も考えられる。図34-9はこれらの類例に近い特徴を持つ製品である。他に紡織具と考えられる木製品は出土していないが類例から整経笥であると考えておきたい。

図35-6は箱として報告した木製品であるが、折敷である可能性も考えられる。折敷は近隣の遺跡では矢玉遺跡から出土している。折敷以外で類似する特徴を持つものとしては、根岸遺跡出土の絵馬とされている木製品、新潟県糸魚川市山岸遺跡出土のまな板とされる木製品がある。根岸遺跡のものには絵は描かれていないが、絵が描かれたものに類似する特徴を持つことから絵馬と推定されたもので、根岸遺跡のものは線状の痕跡が多く残されている点からまな板と認識されたものと考えられる。図35-6には絵が描かれておらず、線状の痕跡も確認できない。

流路跡からは齋申と考えられる木製品が13点出土している。明確に祭祀遺物といえるのは齋申のみである。図34-10も齋申の一種である可能性が考えられる。福島県の遺跡で齋申が多く出土している遺跡としてはいわき市荒田目条里遺跡が挙げられる。西木流C遺跡と同じように古墳時代から古代にかけての河川跡が調査された遺跡であり、多くの木製品が出土している。その中には齋申と見られる木製品も存在し、西木流C遺跡出土のものと同様の特徴を持つものも確認できる。この遺跡は木製品が多く出土した点以外にも、郡衙と推定される遺跡の近隣に所在するという点で西木流C遺跡と同じような特徴を持った遺跡といえる。西木流C遺跡では会津若松市の調査で甍を持つ掘立柱建物跡が確認されており、郡衙との関連が想定されるが、齋申が出土したことからすると、西木流C遺跡周辺で祭祀が行われていた可能性も考えられる。遺跡の性格を考える上で重要な遺物である。

木製品の年代については製品自体から年代を考慮することができる資料が少ない。コロボシ以外の木製品は流路跡の③から出土している。この層から出土した土器の年代は9世紀後半～10世紀前半におさまると考えられることから、その年代が流路跡の主要な機能時期と推定でき、木製品も多くが同様の年代幅におさまるものと考えられる。

また、付編1の放射性炭素年代測定でコロボシ(図38-6)、皿2点(図29-1・2)、田下駄(図35-10)の4点について放射性炭素年代測定を実施した結果、それぞれ、11世紀前半～12世紀中頃、8世紀後半～10世紀中頃、7世紀後半～8世紀後半、7世紀後半～9世紀後半の測定結果が出ている。これらの測定結果については、土器から推定した1号流路跡が機能した年代(9世紀中頃～10世紀前半)と矛盾するものではないと思われる。(鶴見)

第3節 まとめ

西木流C遺跡の位置する会津盆地東部地区は、平安時代前期には、会津郡衙推定地の郡山遺跡をはじめ、木簡が見つかった矢玉遺跡や地方豪族の邸宅が見つかった屋敷遺跡、墨書土器を用いた祭祀の跡が見つかった上吉田遺跡など大規模な遺跡が集中する地区となっている。これらの遺跡から見つかった遺構・遺物は、この地区がこの時期の会津盆地の政治の中心的な機能を担った地区であることを示すものと推定される。

西木流C遺跡から見つかった1号流路跡についても、大きくはこのような歴史的な文脈に沿った遺構であると考えられる。

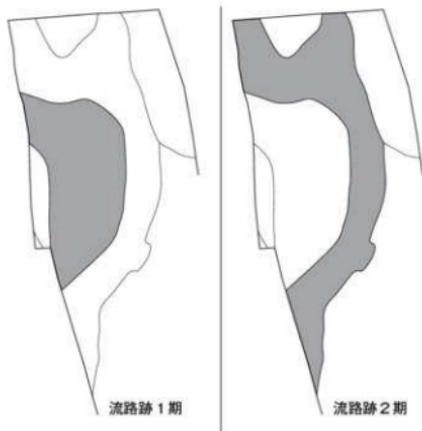


図66 1号流路跡変遷図

して運搬されたと考えられ、このような政治の中心地で1号流路跡が水運に利用された可能性が高いことを示す資料であると考えられる。

また、堆積土中からの出土した農具「コロバシ」は、東北地方では宮城県中在家南遺跡と岩手県落合Ⅱ遺跡の2例しか出土例がなく、全国的にも類例が少ない。平安時代の農耕を考える上で大変貴重な資料である。

他に木製品では、椀や皿類が大量に出土しているのも本遺跡の特徴である。一部に全体の器形がわかるもの(図27-1)や漆塗りのもの(図29-3・9)も含まれている。平安時代前期は、土師器や須恵器の杯などの土製の器に代わって、木製の食膳具が普及していく時期で、流路跡から大量に出土したこれらの椀類はこれを示すものと言える。

また、他の生活用具としてもバラエティーに富んだ木製品が出土している。食膳具である曲物の

1号流路跡は図66に示すように9世紀中頃～10世紀にかけて2時期の変遷を認めることができた。1期については、2期の流路跡に3方向で重複しているため、中央部しか残っていないが、2期については、南から蛇行しながら北に向かう姿が確認できた。

流路跡からは、大量の木製品や自然木とともに建材と思われる部材が出土している。

また、簡易な栈橋と推定される杭も見つかり、船を利用した水運に関係する遺構である可能性が高い。この時期、建材等の大型の部材は水運を利用し

他に削り出しの下駄2種類や紡織具、脚類あるいは、火付木など貴重なものが見つかる。

祭祀具では、齋串13点がある程度のまとまりをもった形で出土している。出土状況から、川辺の祭祀で利用され、同じ場所に流れ着いたものと推定され、これは流路跡が祭祀の場としても利用されたことを示すと思われる。

また、流路跡からは成人のものと思われる人骨も見つかっている。人骨は成人の上腕骨で火葬された痕跡が確認された。成人骨が流路跡に流れ込んだ経緯については、出土状況等から特定することはできないが、火葬の痕跡自体は、土葬がまだ一般的な葬法であった時期の火葬の痕跡を残す資料であると思われる。

他には、流路跡の機能した時期に直接関連する遺物ではないが、古墳時代の朝鮮半島由来の陶質土器(図22-16)が出土している。出土例が少なく、古墳時代の会津地方を考える上で大変貴重なものである。

近世以降のものでは、戦後の区画整理前の近世から続く溝跡が検出された。遺物は近代のものに混じって近世から近代にかけての陶磁器類も出土している。溝跡には堰状の施設をもつものもあり、近世以降水田として継続して利用されていたものと思われる。(藤谷)

＜参考文献＞

- 渡部光一・渡部聖史・星将一・芳賀英一・中村五郎 1978『会津若松市小石ヶ浜遺跡の石器』『福島考古』第19号 pp.15～20
 会津若松市教育委員会社会教育課編 1978『墓料：福島県会津若松市一箕町墓料調査概要』
 若手県教育委員会 1980『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告—VI—』
 白鳥貞一 1980『多賀城出土土器の変遷』『研究紀要』宮城県多賀城跡調査研究所
 会津若松市教育委員会 1981『福島県会津若松市墓料遺跡：1980年度 遺構編』
 福島県教育委員会 1983『塩坪遺跡発掘調査概報』
 石川原埋蔵文化財センター編 1989『水白モンシヨ遺跡』
 会津若松市教育委員会 1990『会津レクリエーション公園計画に伴う笹山原遺跡群発掘調査報告1・2』
 福島県教育委員会、(財)福島県文化センター、日本道路公団 1990『東北横断自動車道関連遺跡調査報告12 屋敷遺跡』
 福島県教育委員会、(財)福島県文化センター、日本道路公団 1991『東北横断自動車道関連遺跡調査報告12 船ヶ森西遺跡、上吉田遺跡』
 会津若松市教育委員会 1994『川原町口遺跡』
 会津若松市教育委員会 1994『会津大戸塚(遺物編)』
 福島県教育委員会 1994『東北横断自動車道遺跡調査報告25 六部次遺跡・塩岩除路遺跡』
 柳田俊雄 1995『会津笹山原遺跡の旧石器群の研究—石刃技法を主体とする石器群を中心に—』『郡山女子大学研究紀要』第31集第2号 pp.1～227
 仙台市教育委員会 1996『中在家南遺跡』
 会津若松市教育委員会 1997『会津レクリエーション公園整備に伴う発掘調査概報Ⅰ(平成8年度) 笹山原No.11遺跡』
 会津若松市教育委員会 1998『上雨屋遺跡発掘調査概報』
 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所編 1998『五辻遺跡発掘調査報告』
 会津若松市教育委員会 1999『矢玉遺跡』
 かながわ考古学財団 1999『池子遺跡群Ⅱ』
 山中雄志 1999『ロクロ土師器を中心とする会津地方の土器様相(前編)』『福島考古第40号』福島県考古学会
 会津若松市 1999『会津若松市埋蔵文化財分布調査報告書』
 福島県立博物館 1999『常世原田遺跡：吉田格氏昭和23年調査資料』
 山中雄志 2000『ロクロ土師器を中心とする会津地方の土器様相(後編)』『福島考古第41号』福島県考古学会
 いわき市教育委員会 2000『根岸遺跡』
 いわき市教育委員会 2001『荒田目柔里遺跡』
 会津若松市教育委員会 2001『本能原遺跡 上三寄地区集落ほ場整備事業発掘調査報告書』

第3章 ま と め

徳島県埋蔵文化財センター編 2002『観音寺遺跡』

下曾我遺跡発掘調査団編 2002『下曾我遺跡 永塚下り畑遺跡第IV地点』鎌倉遺跡調査会

福島県教育委員会、(財)福島県文化振興事業団2003『会津坂真北道路遺跡発掘調査報告2 荒原敷遺跡』

山田昌久編 2003『考古資料大観 木・繊維製品』小学館

長野県文化財センター編 2006『杜宮司遺跡』

東村純子 2011『考古学から見た古代日本の紡織』六一書房

群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2011『大道西遺跡』

財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団編 2012『山岸遺跡』

写 真 图 版



1 調査区全景（上空南から）



2 調査区全景（上空から）



3 調査前遺跡全景（東から）



4 Ⅲ区全景（上空から）



5 1・2号流路跡全景（上空北から）



6 1号流路跡 (1)

1 流路跡検出状況 (南から)
2 1号流路跡全景 (南から)



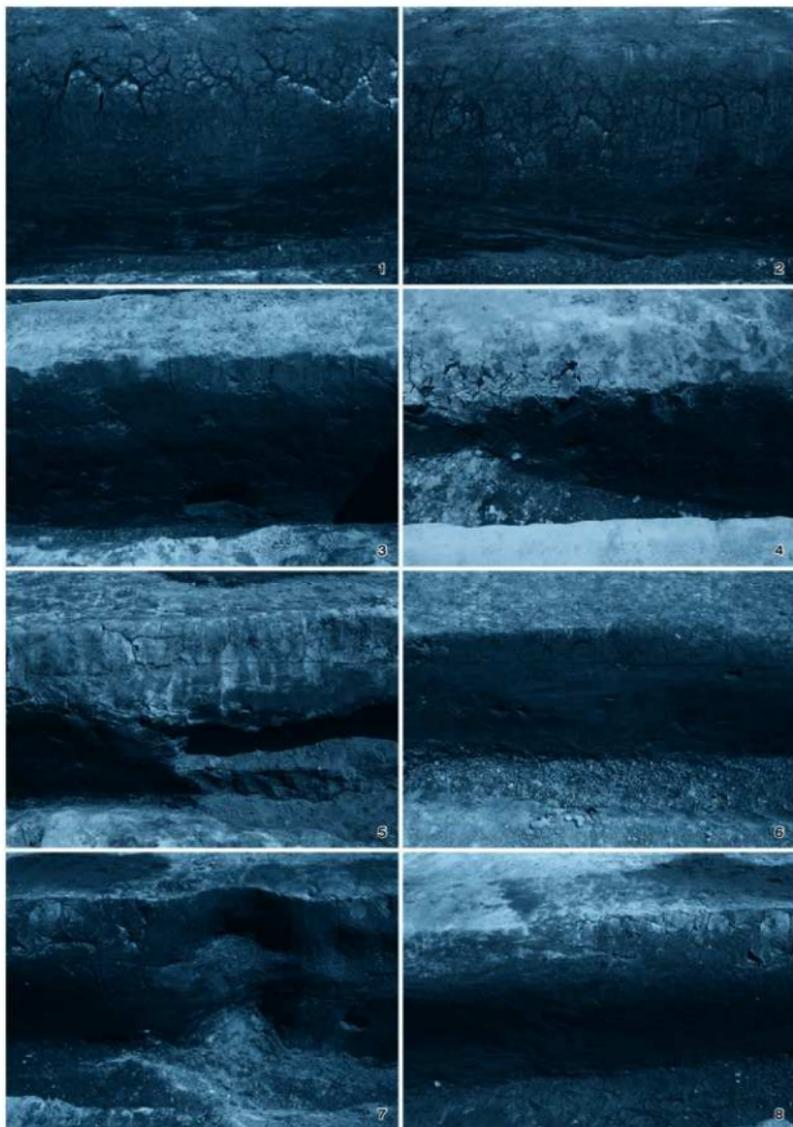
7 1号流路跡 (2)

- | | |
|-------------|--------------|
| 2 南側 (南から) | 1 南端部 (北東から) |
| 4 北側 (南東から) | 3 中央付近 (東から) |
| | 5 北側 (南から) |



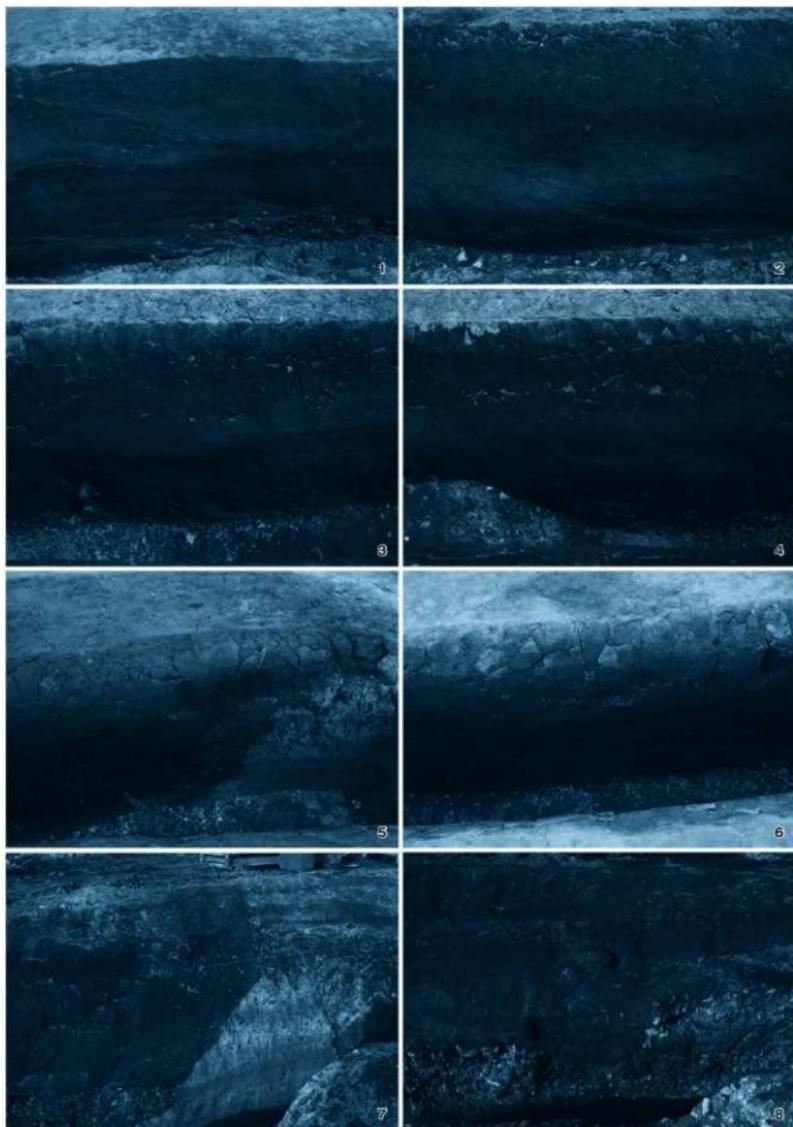
8 1号流路跡 (3)

- | | |
|------------------|--------------------|
| 1 北端 (南から) | 2 中央付近 (北から) |
| 3 中央付近西側① (北から) | 4 1・2号流路跡合流部 (北から) |
| 5 サブトレンチ1① (北から) | 6 サブトレンチ1② (北から) |
| 7 サブトレンチ2 (南から) | 8 サブトレンチ3① (西から) |



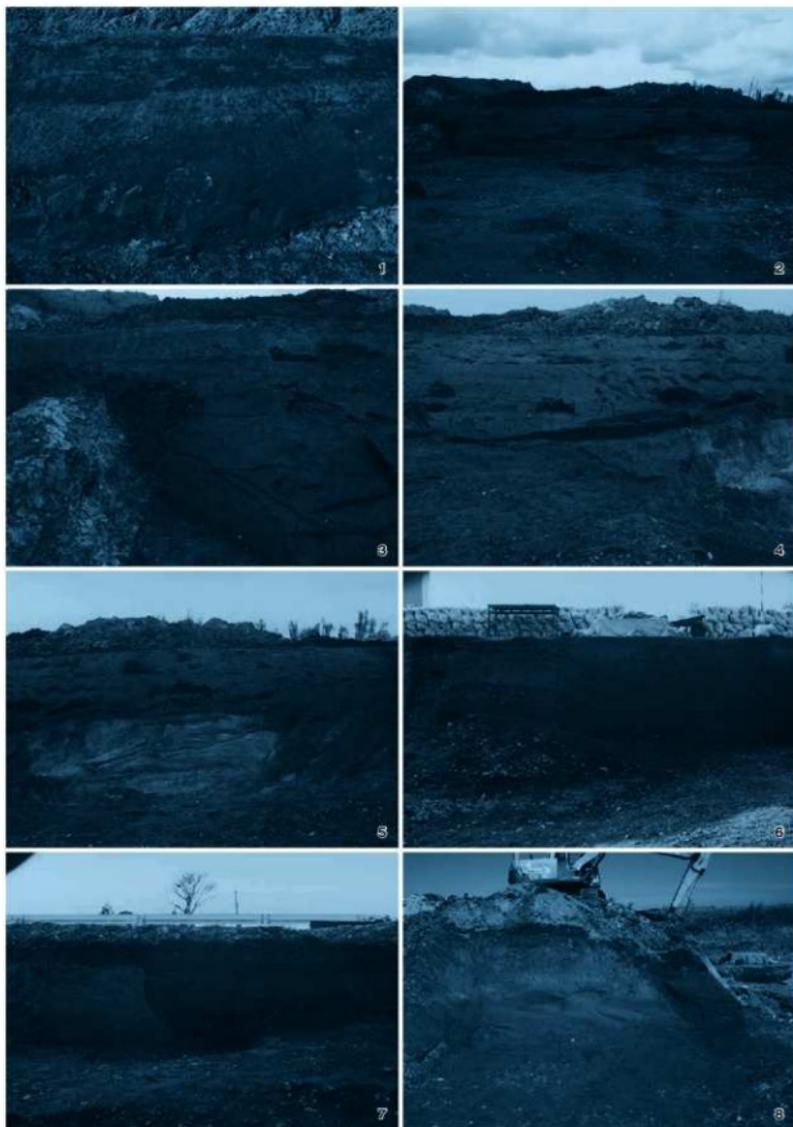
9 1号流路跡 (4)

- | | |
|--------------------|--------------------|
| 1 サブトレンチ3② (西から) | 2 サブトレンチ3③ (西から) |
| 3 サブトレンチ4・6① (南から) | 4 サブトレンチ4・6② (南から) |
| 5 サブトレンチ4・6③ (南から) | 6 サブトレンチ4・6④ (南から) |
| 7 サブトレンチ5・7① (南から) | 8 サブトレンチ5・7② (南から) |



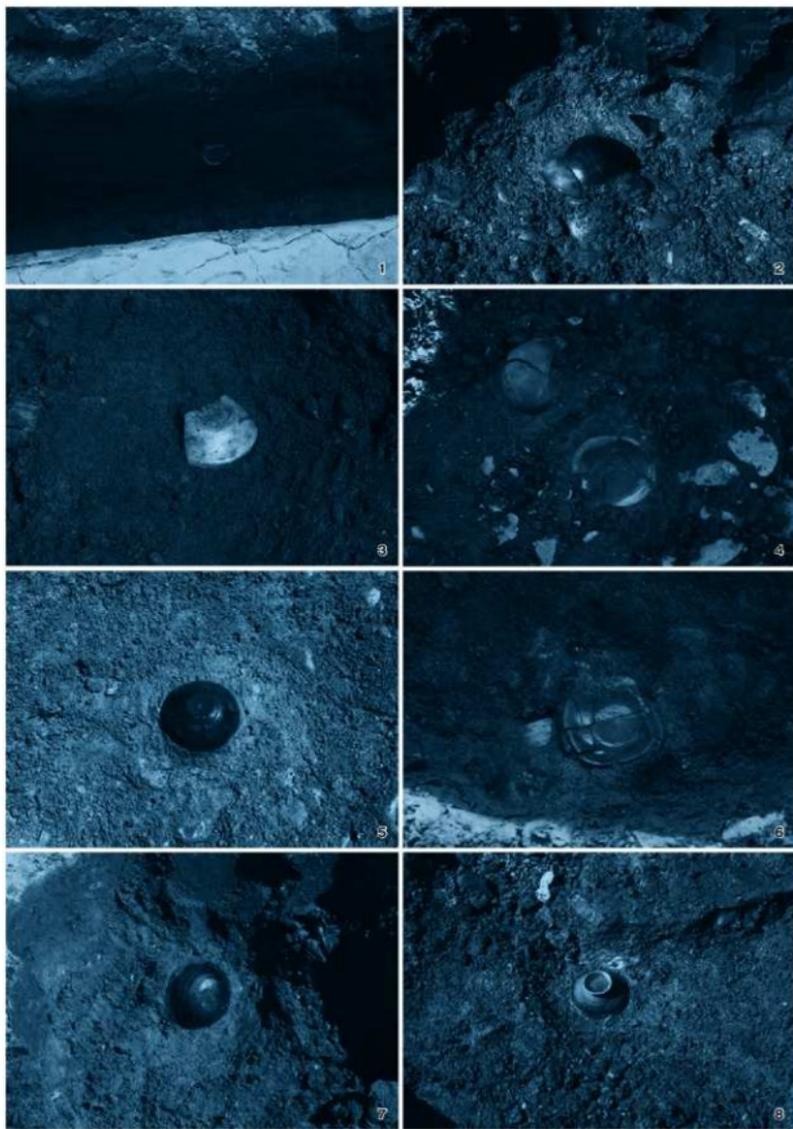
10 1号流路跡(5)

- | | |
|-------------------|-------------------|
| 1 サブトレンチ5・7③(南から) | 2 サブトレンチ5・7④(南から) |
| 3 サブトレンチ8①(南から) | 4 サブトレンチ8②(南から) |
| 5 サブトレンチ9①(南から) | 6 サブトレンチ9②(南から) |
| 7 1区北壁①(南から) | 8 1区北壁②(南から) |



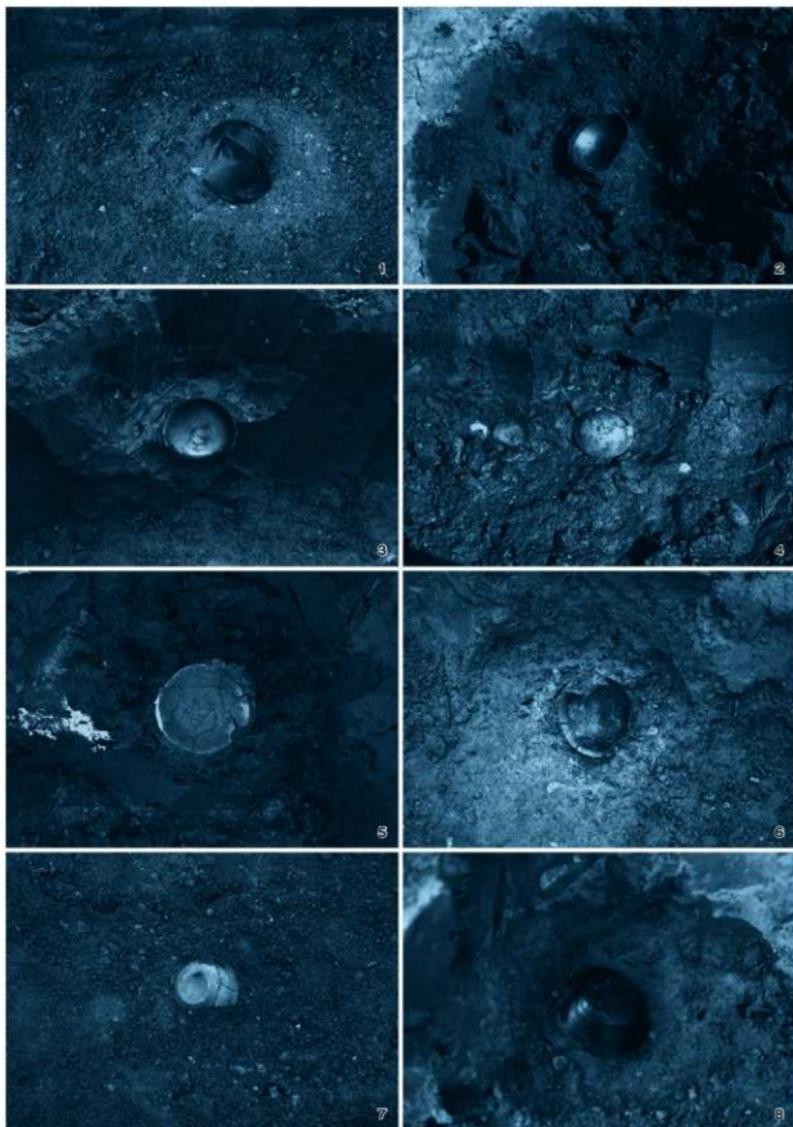
11 1号流路跡(6)

- | | |
|--------------|--------------|
| 1 Ⅰ区北壁①(南から) | 2 Ⅰ区北壁②(南から) |
| 3 Ⅰ区北壁③(南から) | 4 Ⅰ区北壁④(南から) |
| 5 Ⅰ区北壁⑤(南から) | 6 Ⅰ区西壁(東から) |
| 7 Ⅱ区西壁(東から) | 8 西壁(南から) |



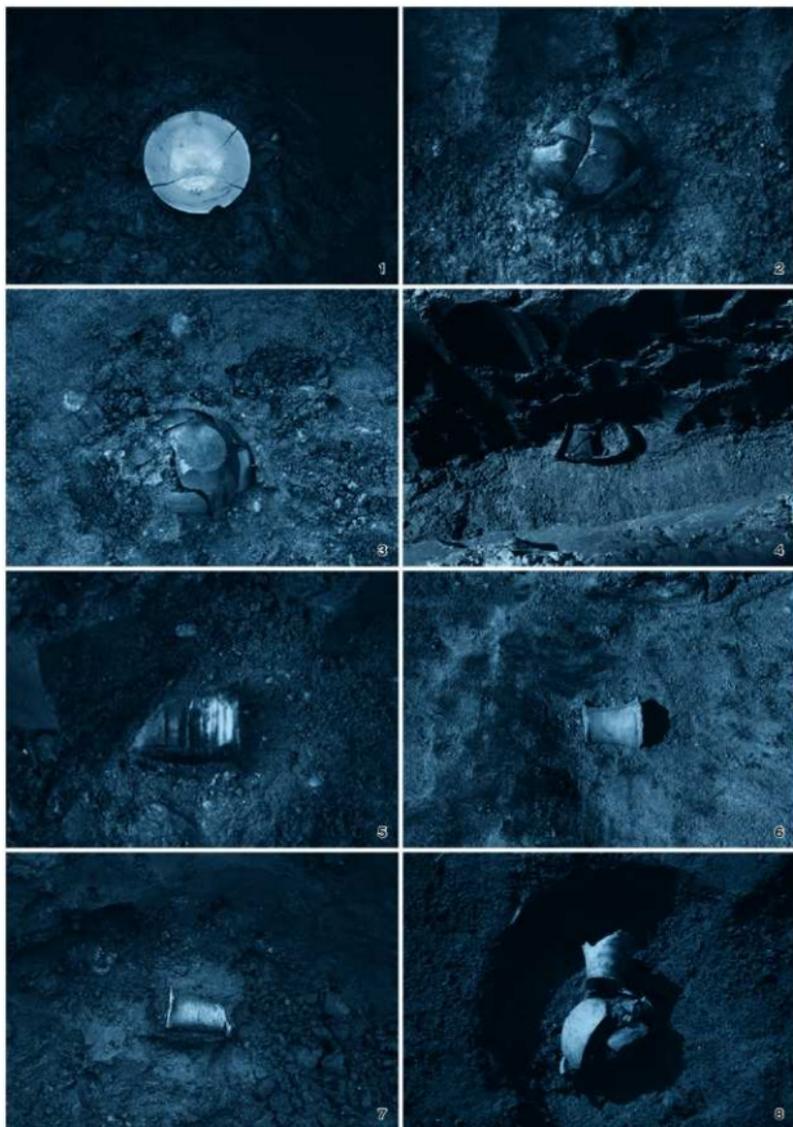
12 1号流路跡遺物出土状況(1)

- | | |
|------------------|---------------------|
| 1 No.4出土状況(南ホ5) | 2 No.18出土状況(南ホ5) |
| 3 No.19出土状況(南ホ5) | 4 No.20、21出土状況(南ホ5) |
| 5 No.23出土状況(西ホ5) | 6 No.26出土状況(東ホ5) |
| 7 No.28出土状況(西ホ5) | 8 No.29出土状況(東ホ5) |



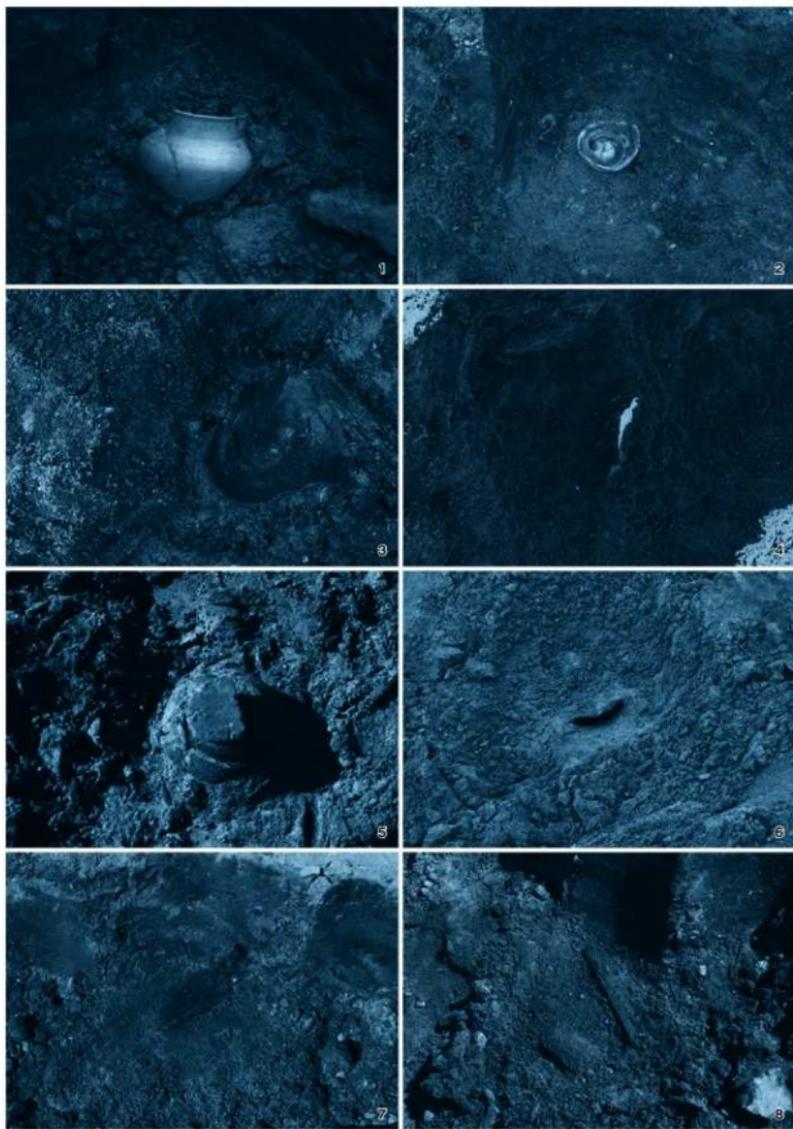
13 1号流路跡遺物出土状況(2)

- | | |
|----------------|----------------|
| 1 №30出土状況(南から) | 2 №33出土状況(東から) |
| 3 №36出土状況(西から) | 4 №38出土状況(南から) |
| 5 №39出土状況(西から) | 6 №42出土状況(東から) |
| 7 №43出土状況(南から) | 8 №57出土状況(東から) |



14 1号流路跡遺物出土状況(3)

- | | |
|------------------|------------------|
| 1 No.63出土状況(北から) | 2 No.64出土状況(東から) |
| 3 No.68出土状況(東から) | 4 No.51出土状況(南から) |
| 5 No.59出土状況(東から) | 6 No.11出土状況(南から) |
| 7 No.41出土状況(西から) | 8 No.58出土状況(北から) |



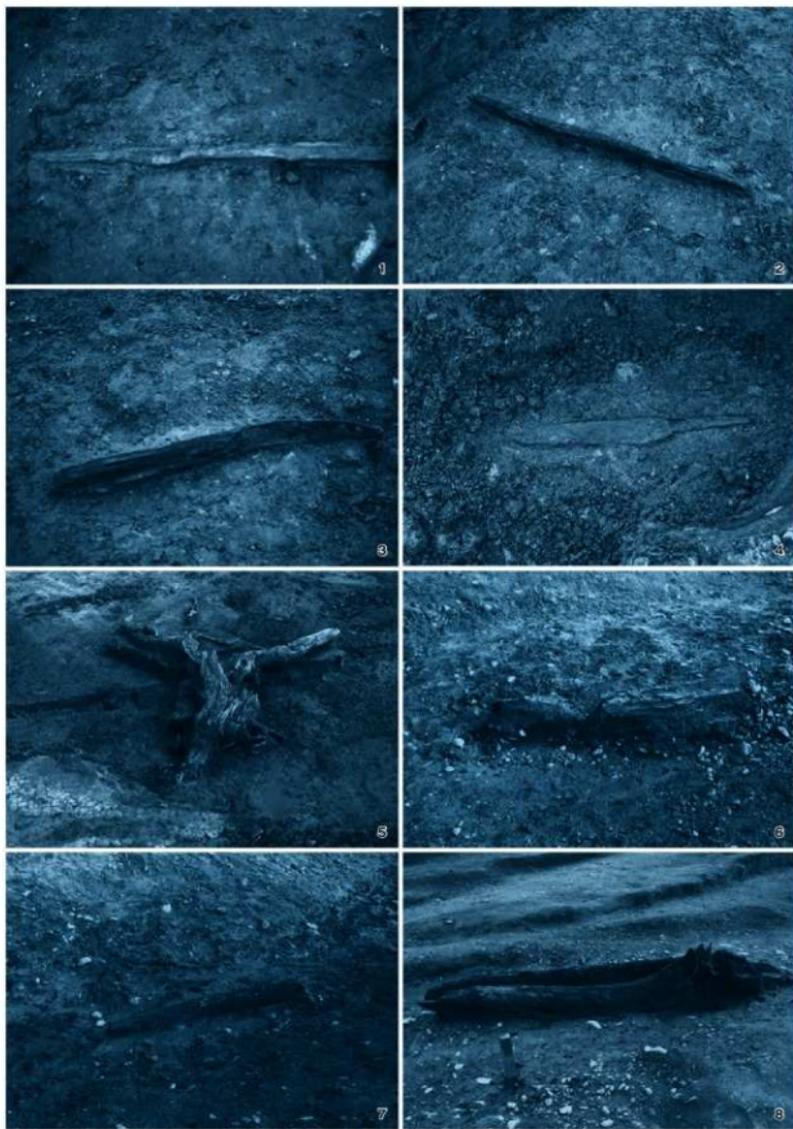
15 1号流路跡遺物出土状況(4)

- | | |
|-------------------|------------------|
| 1 No.66出土状況(北東から) | 2 No.37出土状況(南から) |
| 3 No.73出土状況(南から) | 4 No.51出土状況(北から) |
| 5 No.56出土状況(東から) | 6 No.49出土状況(東から) |
| 7 No.16出土状況(南から) | 8 No.17(南から) |



16 1号流路跡遺物出土状況 (5)

- | | |
|--------------------|--------------------|
| 1 No.45出土状況 (東から) | 2 No.76出土状況 (北東から) |
| 3 コロバシ出土状況① (北から) | 4 コロバシ出土状況② (南東から) |
| 5 コロバシ出土状況③ (北東から) | 6 壱持池出土状況 (南から) |
| 7 No.53出土状況 (東から) | 8 No.25出土状況 (南から) |



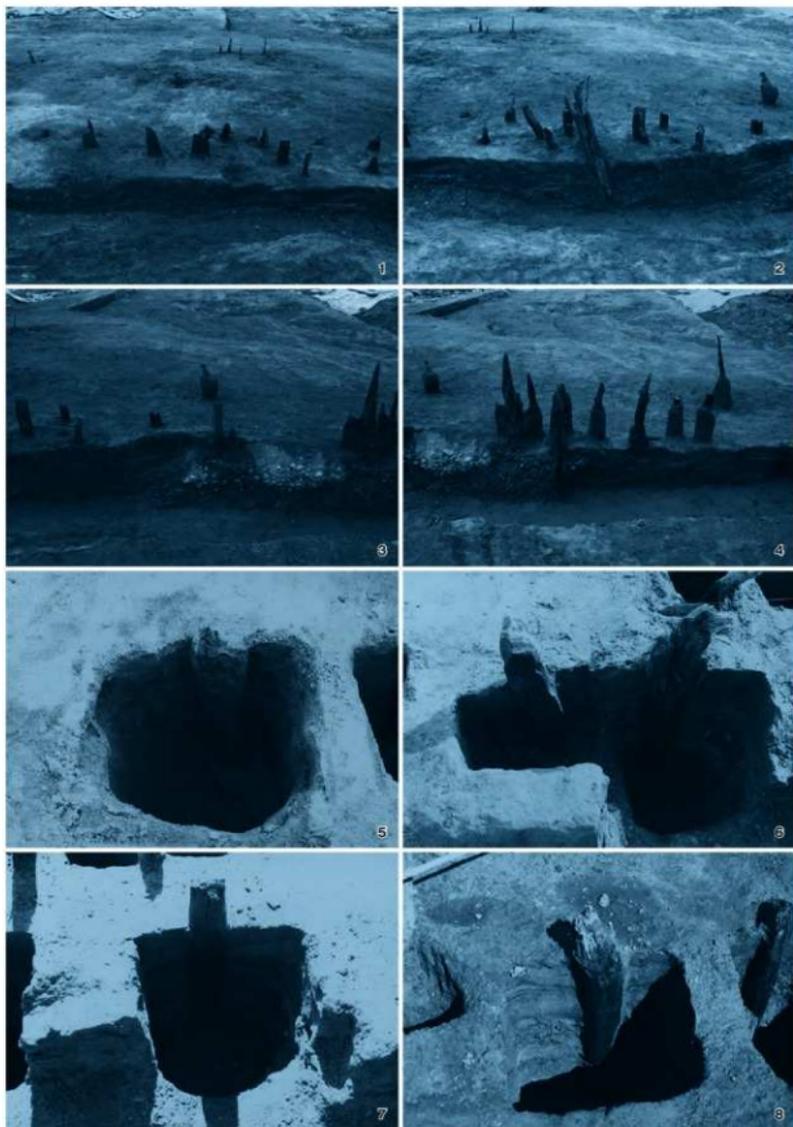
17 1号流路跡遺物出土状況(6)

- | | |
|---------------------|---------------------|
| 1 C 4グリッド掘出土状況(北から) | 2 E 4グリッド掘出土状況(西から) |
| 3 掘出土状況(北から) | 4 №67出土状況(西から) |
| 5 I区流木出土状況(南から) | 6 本材出土状況①(北から) |
| 7 本材出土状況②(北から) | 8 III区流木出土状況(西から) |



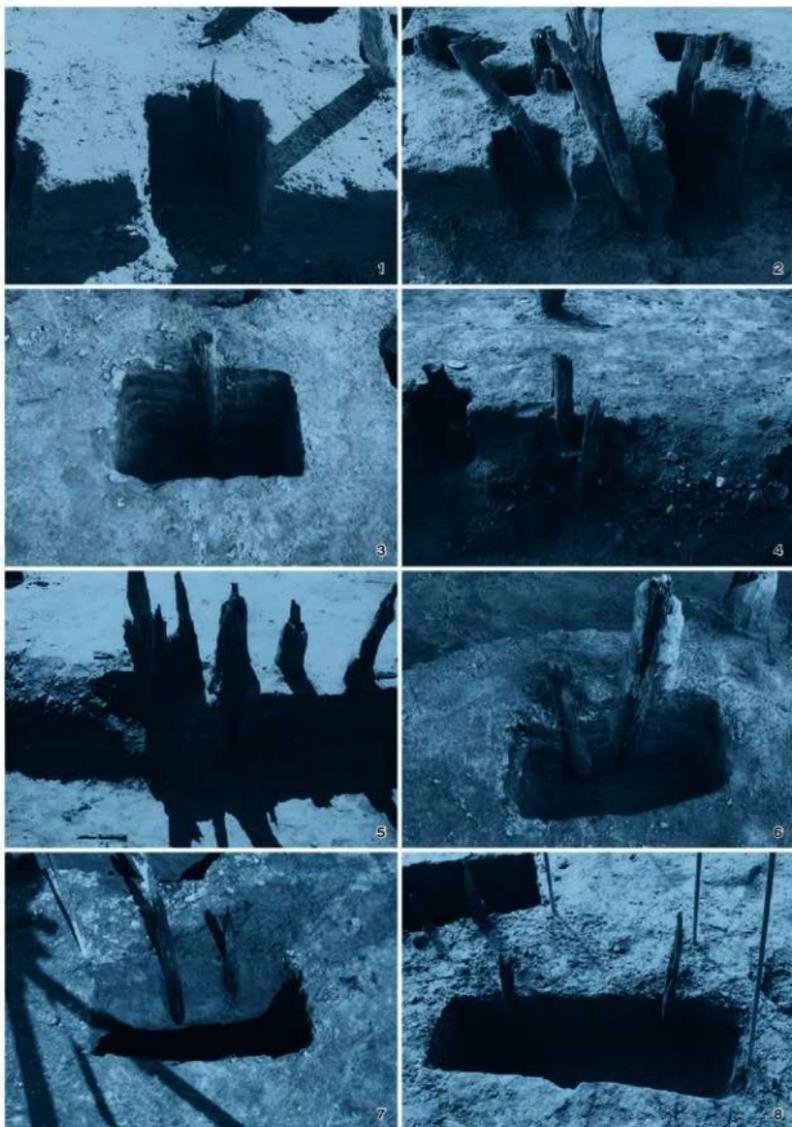
18 1号杭列 (1)

- | | |
|-------------|--------------|
| | 1 全景① (北から) |
| 2 全景② (西から) | 3 全景③ (西から) |
| 4 全景④ (南から) | 5 全景⑤ (南東から) |



19 1号杭列(2)

- | | |
|------------|-------------|
| 1 掘部①(北から) | 2 掘部②(北から) |
| 3 掘部③(北から) | 4 掘部④(北から) |
| 5 杭1(北から) | 6 杭3-4(北から) |
| 7 杭11(北から) | 8 杭14(南から) |



20 1号杭列 (3)

- | | |
|----------------|----------------|
| 1 杭15・16 (北から) | 2 杭18・22 (北から) |
| 3 杭27 (南から) | 4 杭29・30 (北から) |
| 5 杭39 (北から) | 6 杭39・40 (南から) |
| 7 杭45・46 (南から) | 8 杭47・48 (北から) |



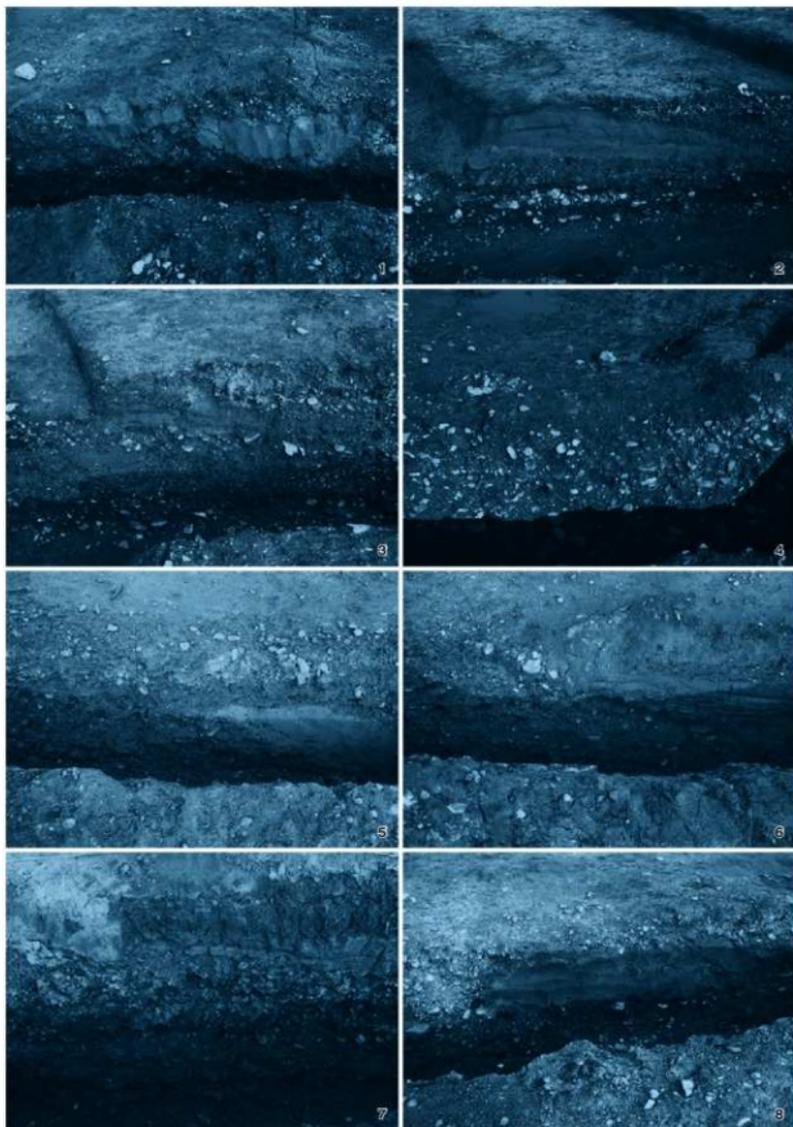
21 2·3号杭列，单独杭

1 2号杭列出土状况(南から) 2 2号杭列土層断面(南から)
 3 3号杭列出土状况(南東から) 4 3号杭列土層断面(北から)
 5 单独杭1(南から) 6 单独杭2(西から)



22 1号流路跡束備施設

- | | |
|-------------|-------------|
| 2 全景② (西から) | 1 全景① (北から) |
| 4 細部① (北から) | 3 全景③ (西から) |
| | 5 細部② (北から) |



23 1号流路跡深掘りトレンチ

- | | |
|---------------|---------------|
| 1 土層断面① (南から) | 2 土層断面② (南から) |
| 3 土層断面③ (南から) | 4 土層断面④ (南から) |
| 5 土層断面⑤ (南から) | 6 土層断面⑥ (南から) |
| 7 土層断面⑦ (南から) | 8 土層断面⑧ (南から) |



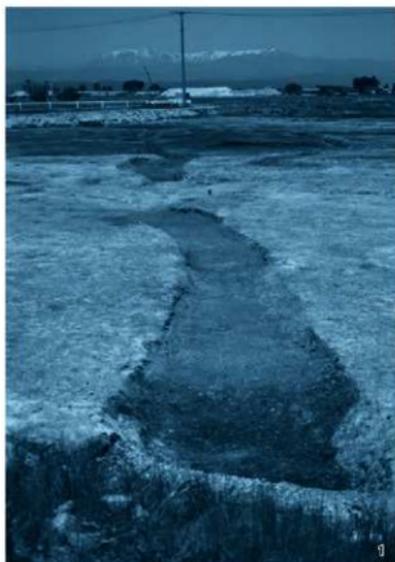
24 1号流路跡深掘りグリッド

1 深掘りグリッド1全景 (南から) 2 深掘りグリッド4全景 (北から)
3 深掘りグリッド6全景 (南から) 4 深掘りグリッド10全景 (北から)



25 2号流路跡

1 全景 (北から) 2 土層断面 (北から)



26 1・8号溝跡(1)

1 1号溝跡北側全景(南から)

2 1号溝跡土層断面①(南から)

3 1号溝跡土層断面②(北から)

4 1号溝跡南側・8号溝跡全景(南から)



27 1・8号溝跡(2)

1 1号溝跡土層断面①(南から) 2 1号溝跡土層断面④(南から)
3 8号溝跡土層断面①(南から) 4 8号溝跡土層断面②(北から)



28 2・3号溝跡

1 2号溝跡北側全景(北から) 2 2号溝跡南側全景(南西から)
3 3号溝跡全景(南から) 4 3号溝跡土層断面(南西から)



29 4号溝跡



2 土層断面① (南から)

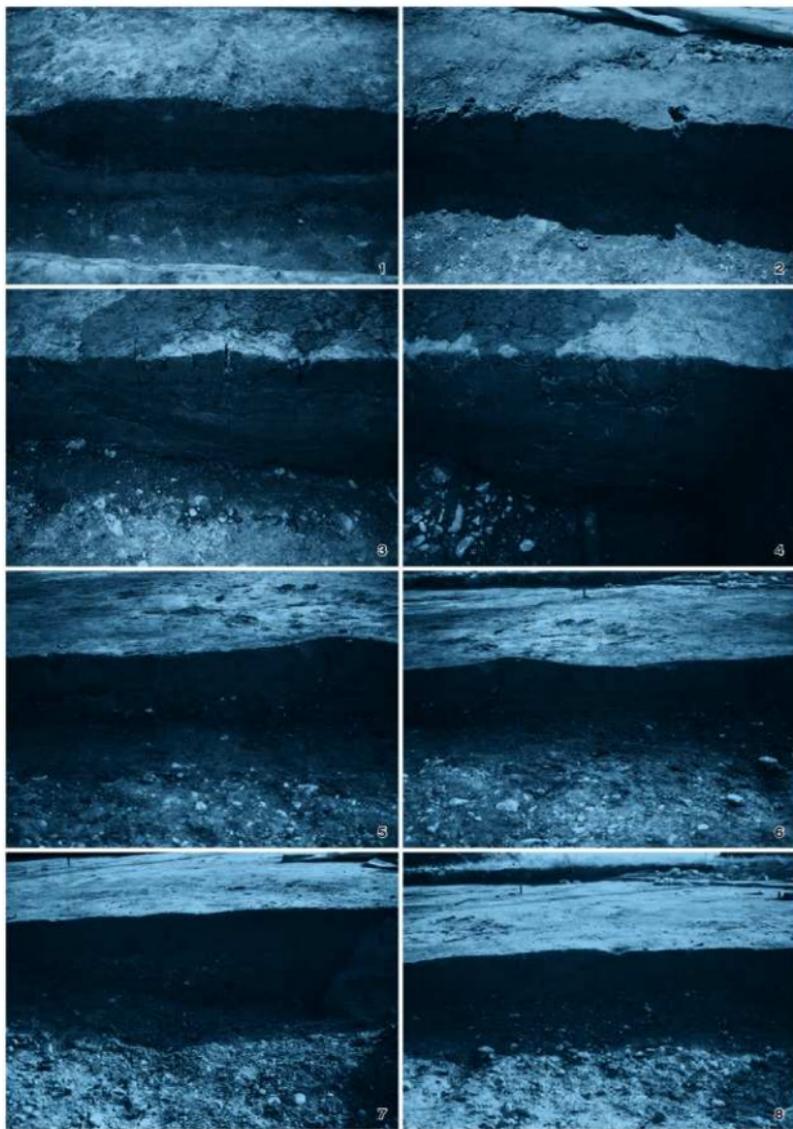


3 土層断面② (南から)



30 5号溝跡 (1)

1 全景 (南から)



31 5号沟迹(2)

- 1 北側土層断面①(北から) 2 北側土層断面②(北から)
 3 北側土層断面③(北から) 4 北側土層断面④(北から)
 5 南側土層断面①(北から) 6 南側土層断面②(北から)
 7 南側土層断面③(北から) 8 南側土層断面④(北から)



32 5号溝跡 (3)

1 付属溝① (西から) 2 付属溝② (西から)
3 付属溝③ (西から) 4 付属溝④ (西から)



33 6号溝跡

1 全景 (東から) 2 土層断面① (西から)
3 土層断面② (西から)



34 7・9・10～12号溝跡

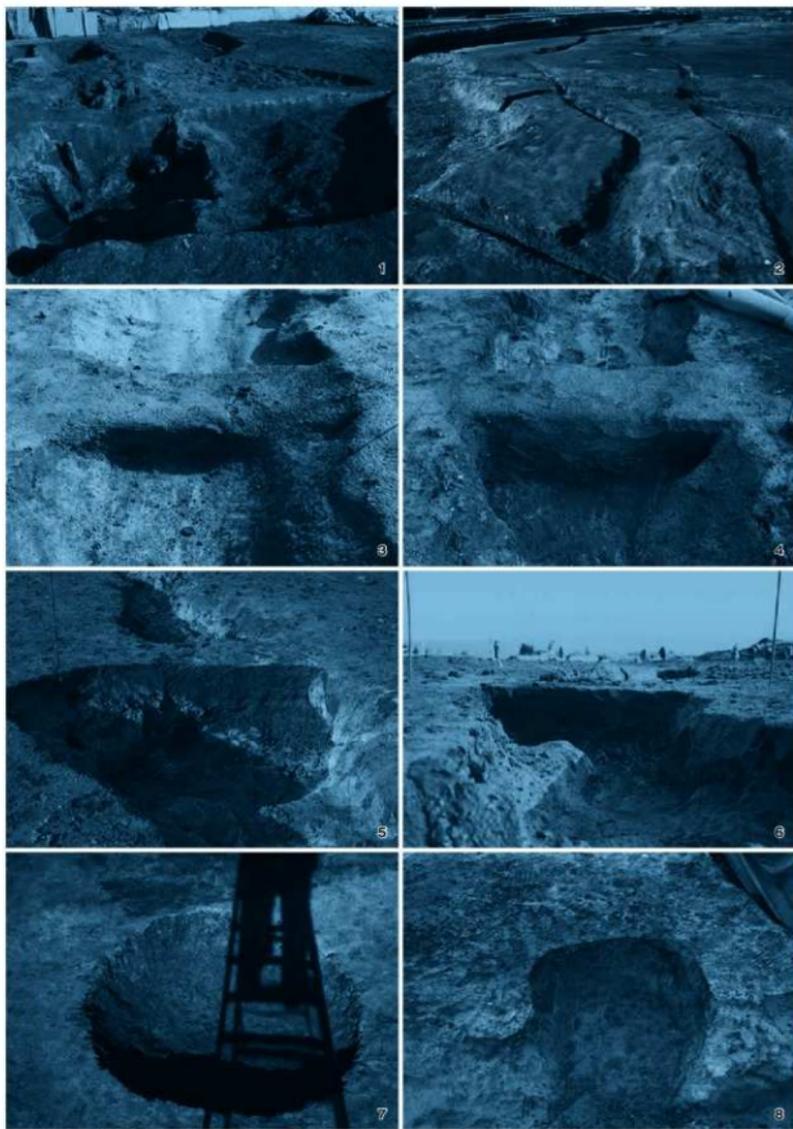
1 7号溝跡全景(南から)

2 9号溝跡全景(北から)

3 10～12号溝跡全景①(西から)

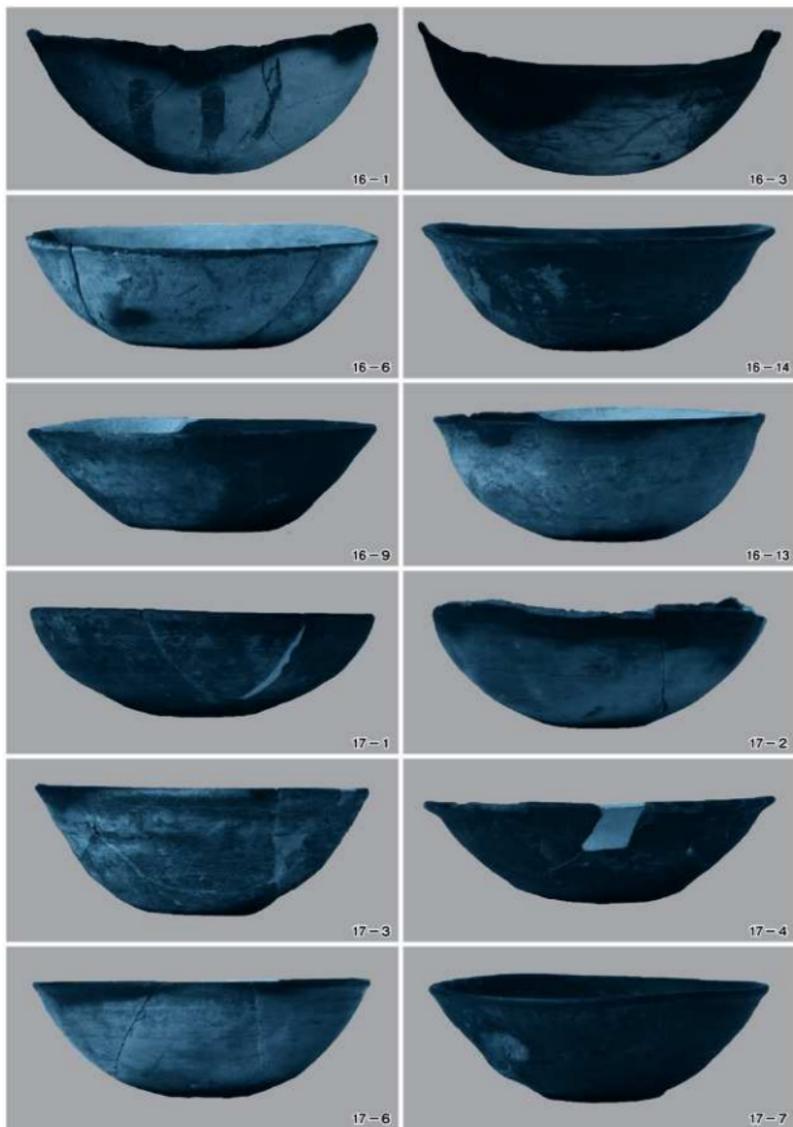
4 10～12号溝跡全景②(北から)

5 10号溝跡土層断面①(西から)

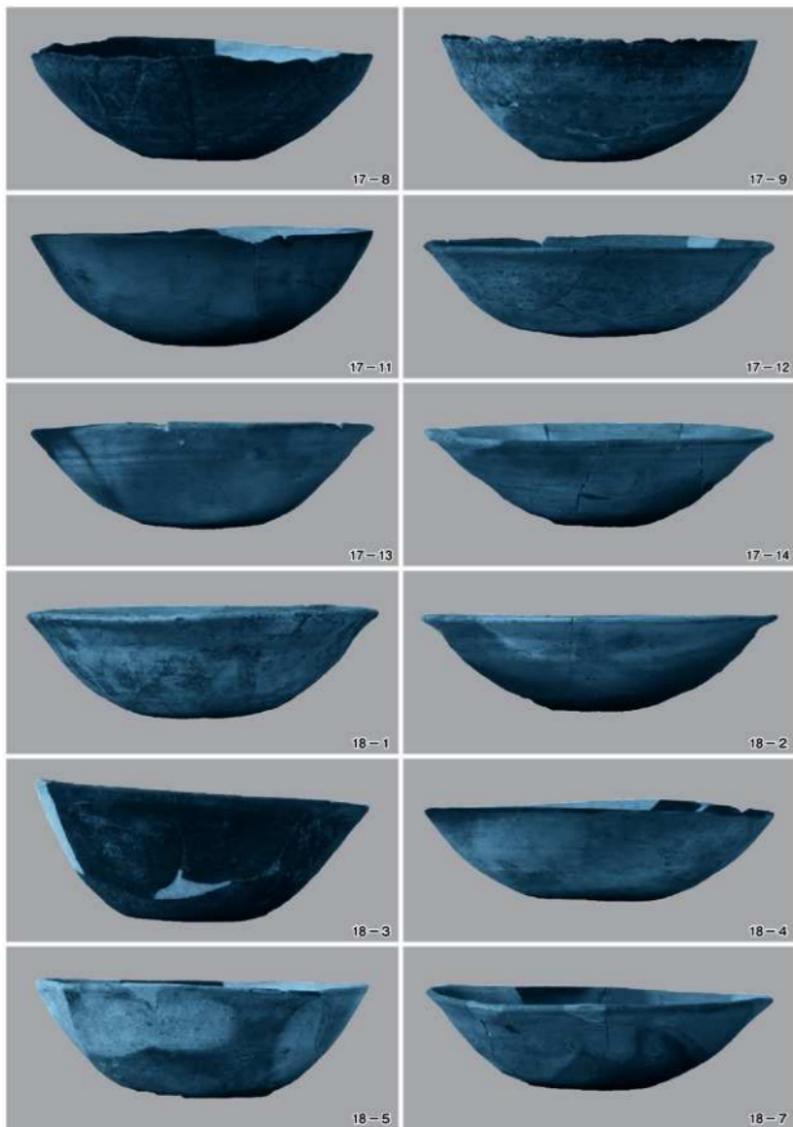


35 10・13号溝跡、1・2号土坑

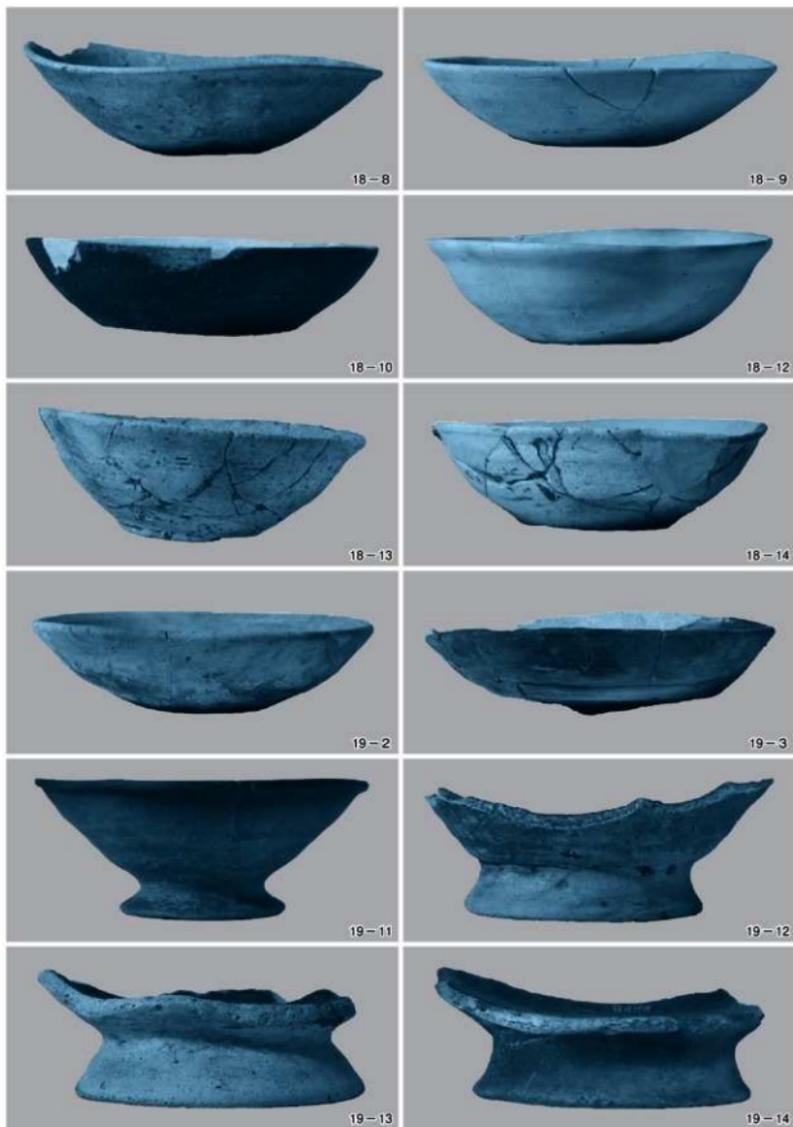
- | | |
|--------------------|--------------------|
| 1 10号溝跡土層断面① (西から) | 2 13号溝跡全景 (南から) |
| 3 13号溝跡土層断面① (北から) | 4 13号溝跡土層断面② (北から) |
| 5 13号溝跡土層断面③ (南から) | 6 13号溝跡土層断面④ (北から) |
| 7 1号土坑 (南から) | 8 2号土坑 (北から) |



36 1号流路跡出土土師器杯



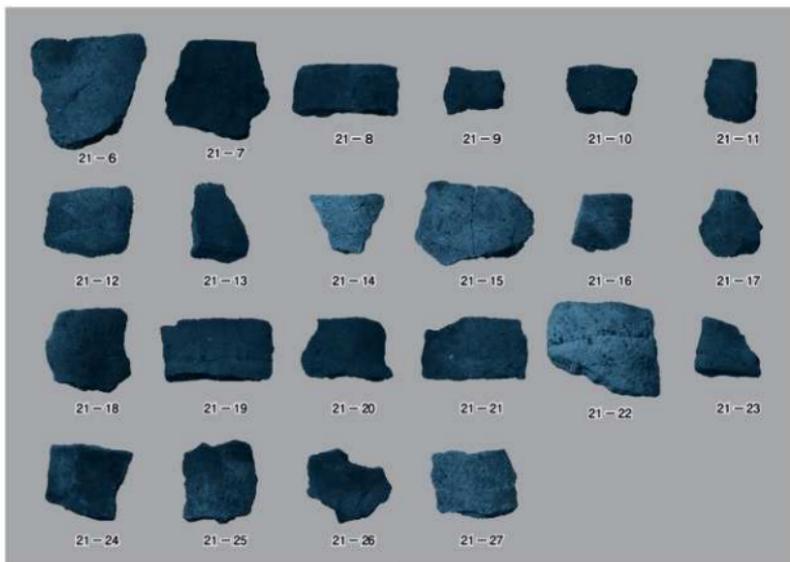
37 1号流路跡出土土師器杯・赤焼土器杯



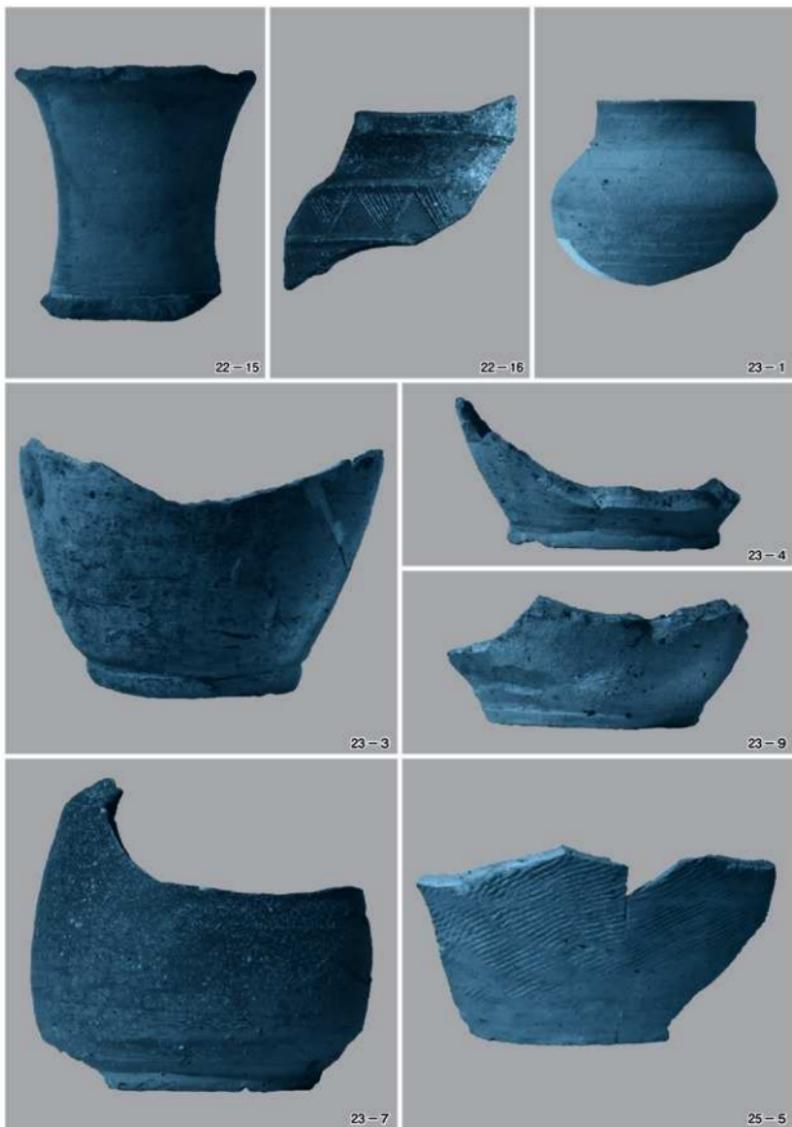
38 1号流路跡出土赤焼土器杯・土師器高台杯



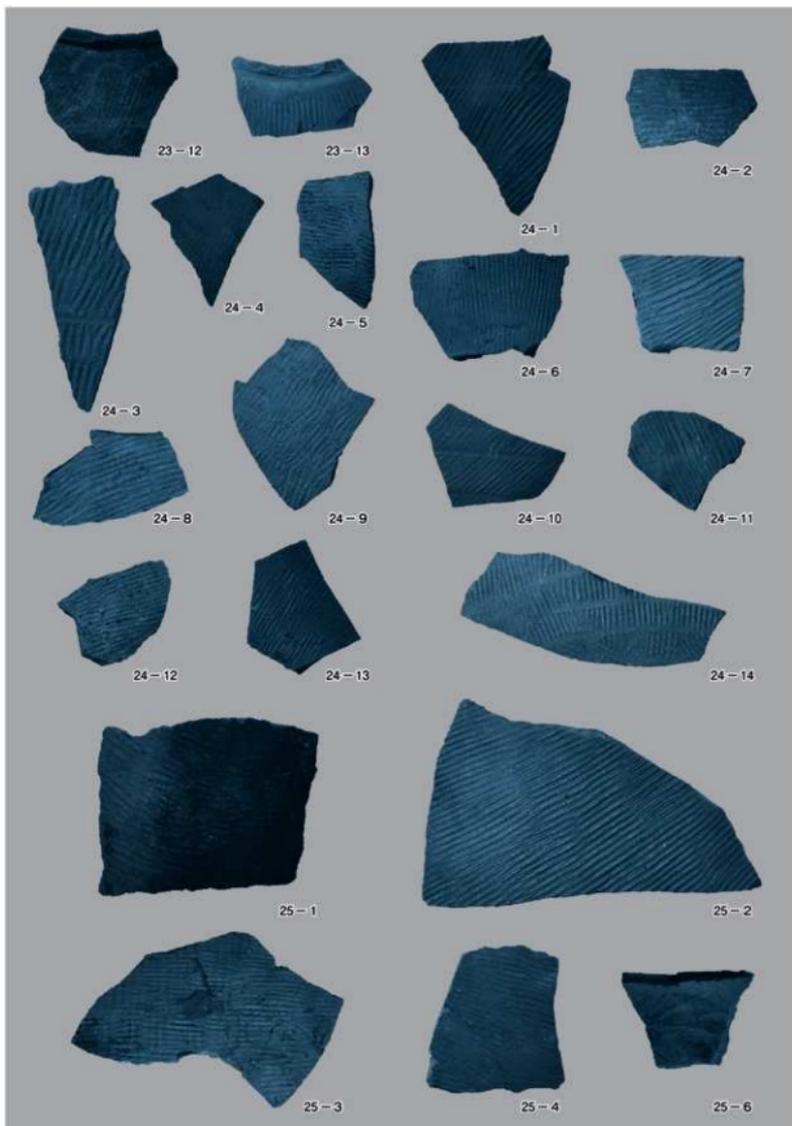
39 1号流路跡出土土師器杯・甕、須恵器杯



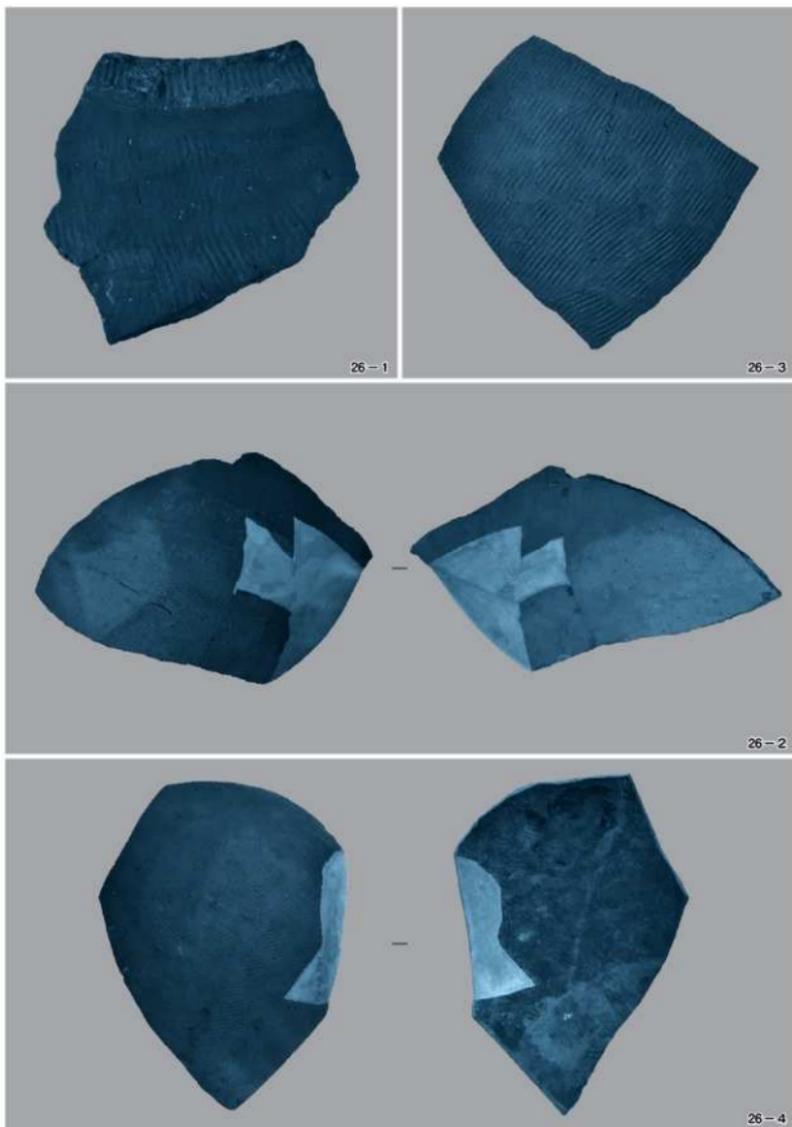
40 1号流路跡出土筒形土器，須恵器杯・長頸瓶



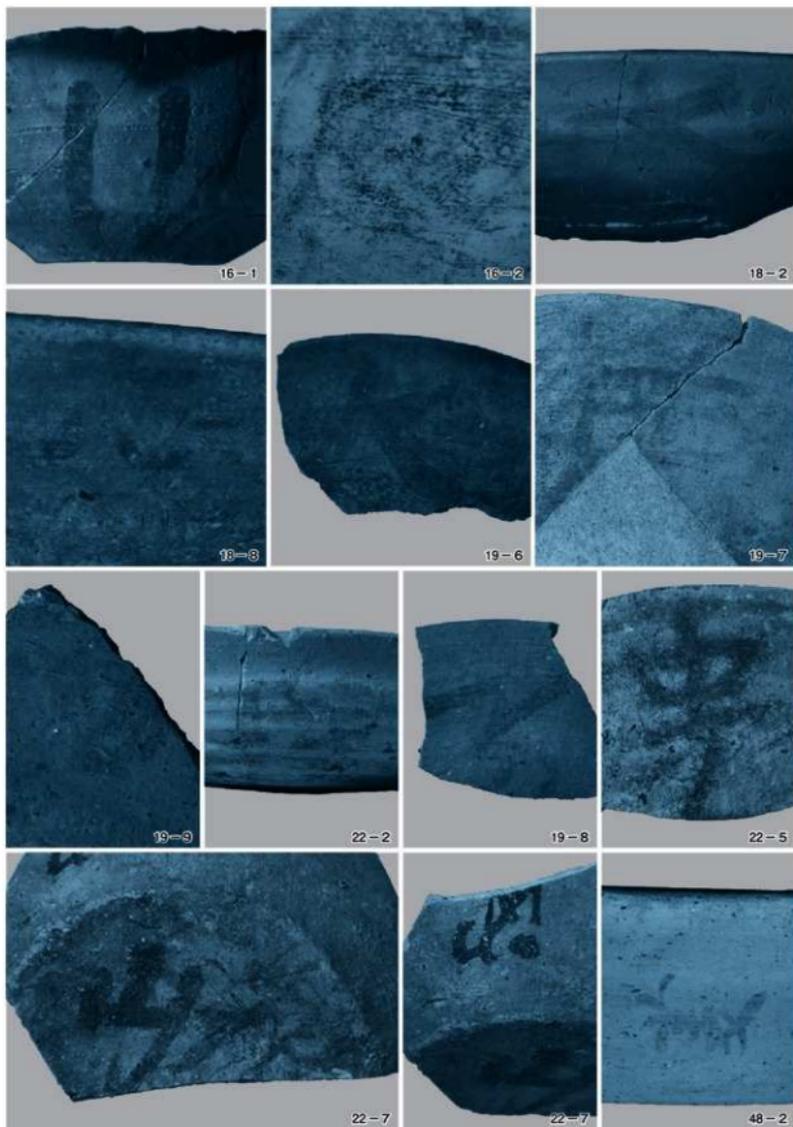
41 1号流路跡出土須恵器長頸瓶・壺・甕, 陶質土器器台



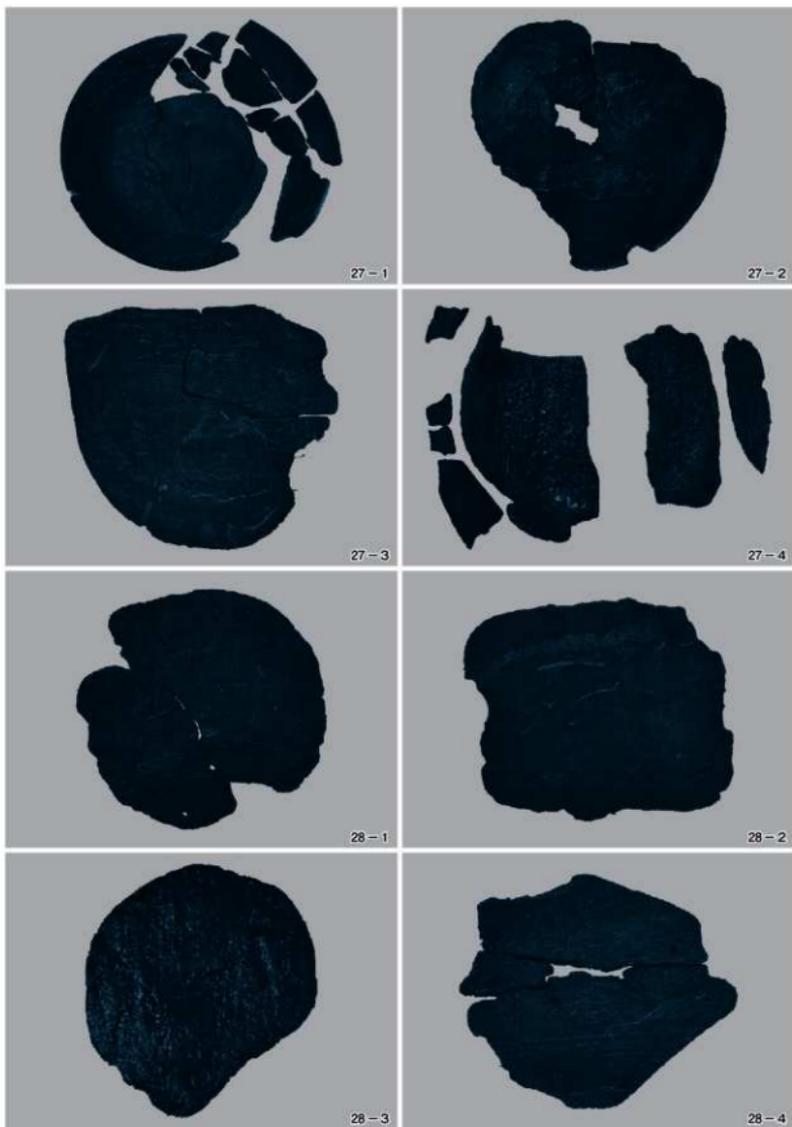
42 1号流路跡出土須惠器甕(1)



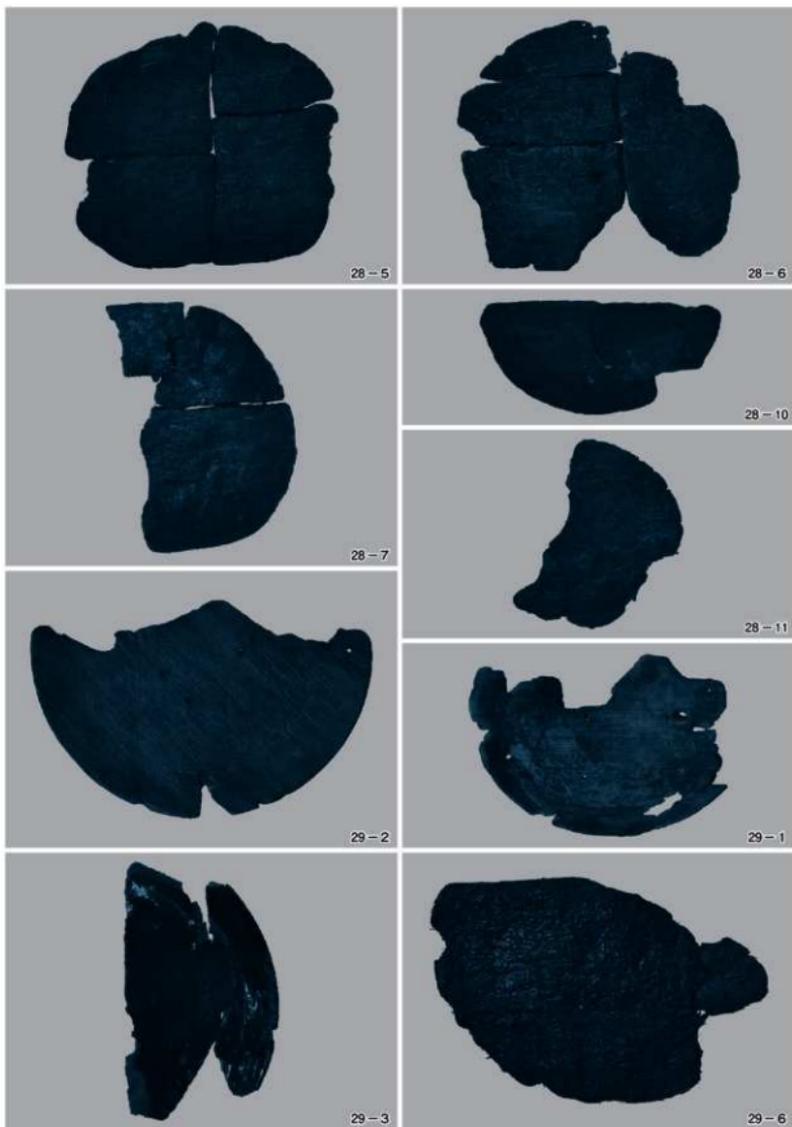
43 1号流路跡出土須恵器甕(2)



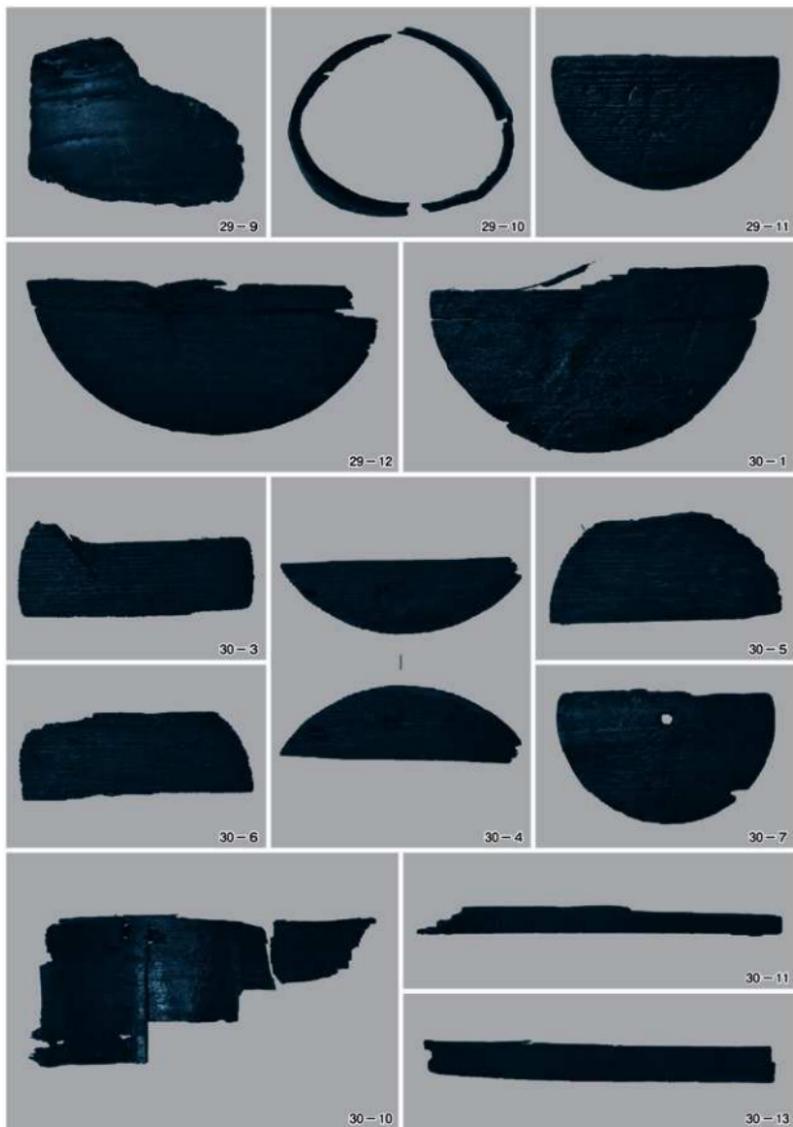
44 1号流路跡出土墨書土器



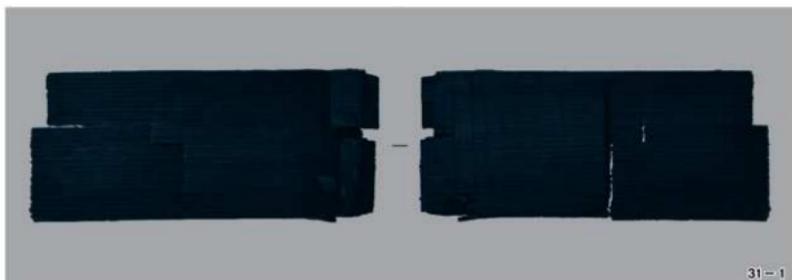
45 1号流路跡出土木製品(1) 椀・皿



46 1号流路跡出土木製品(2) 碗・皿



47 1号流路跡出土木製品(3) 碗・曲物・筒状容器



31-1



31-2

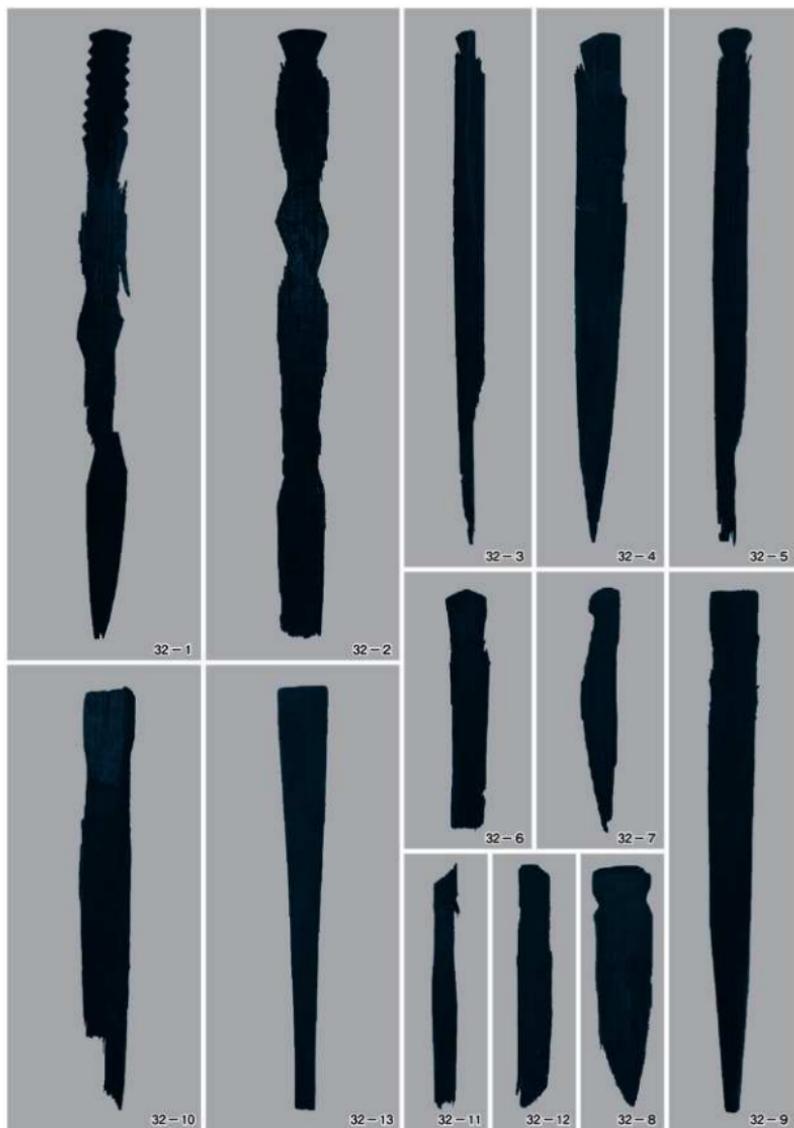


31-3

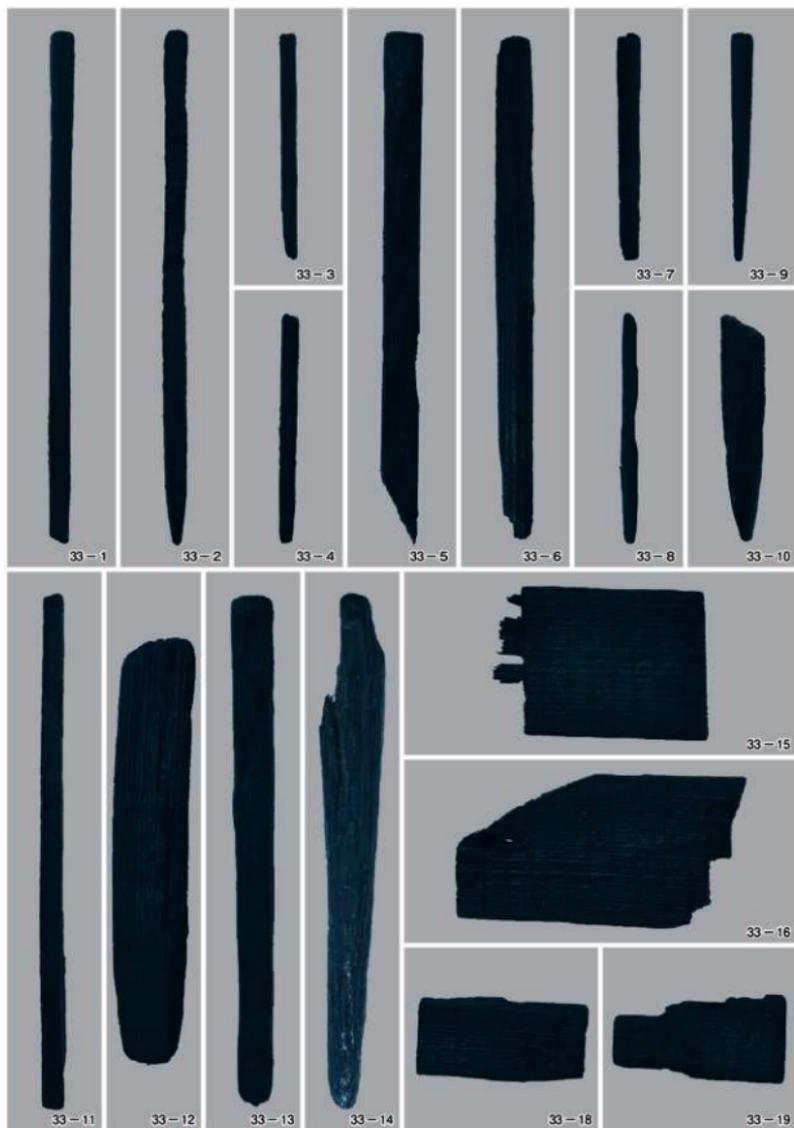


31-4

48 1号流路跡出土木製品(4)曲物・下駄



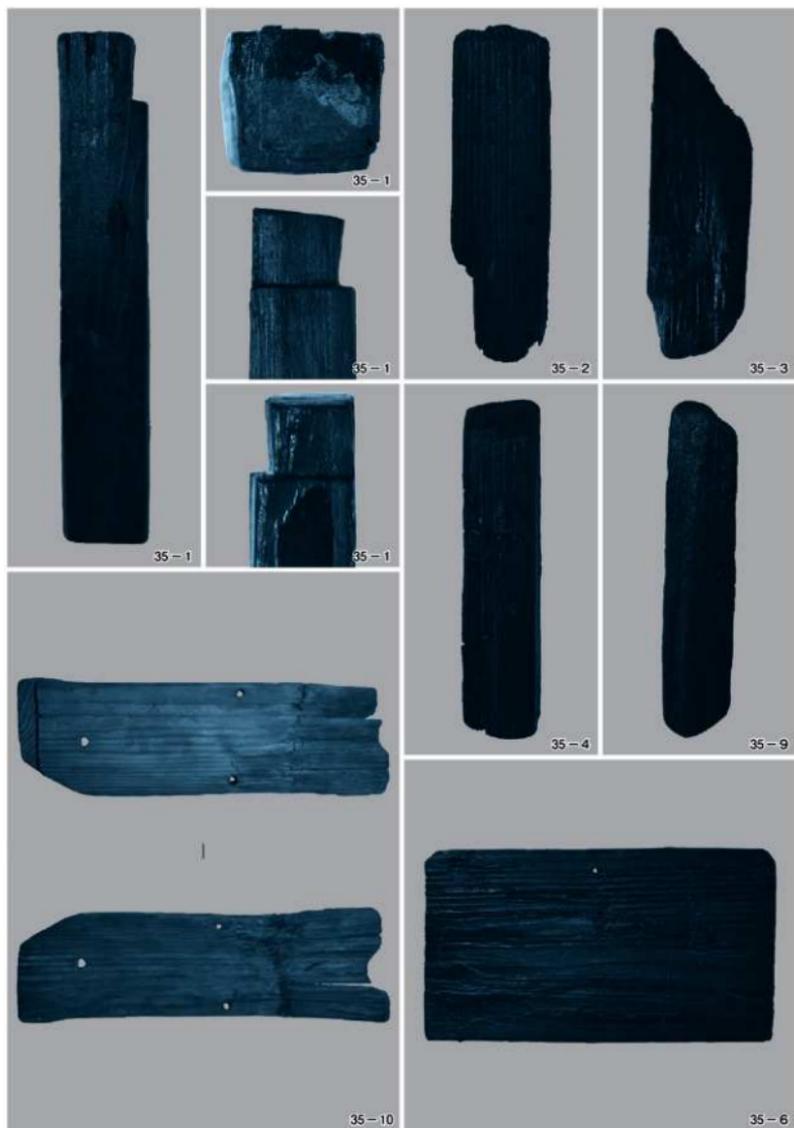
49 1号流路跡出土木製品 (5) 齋串



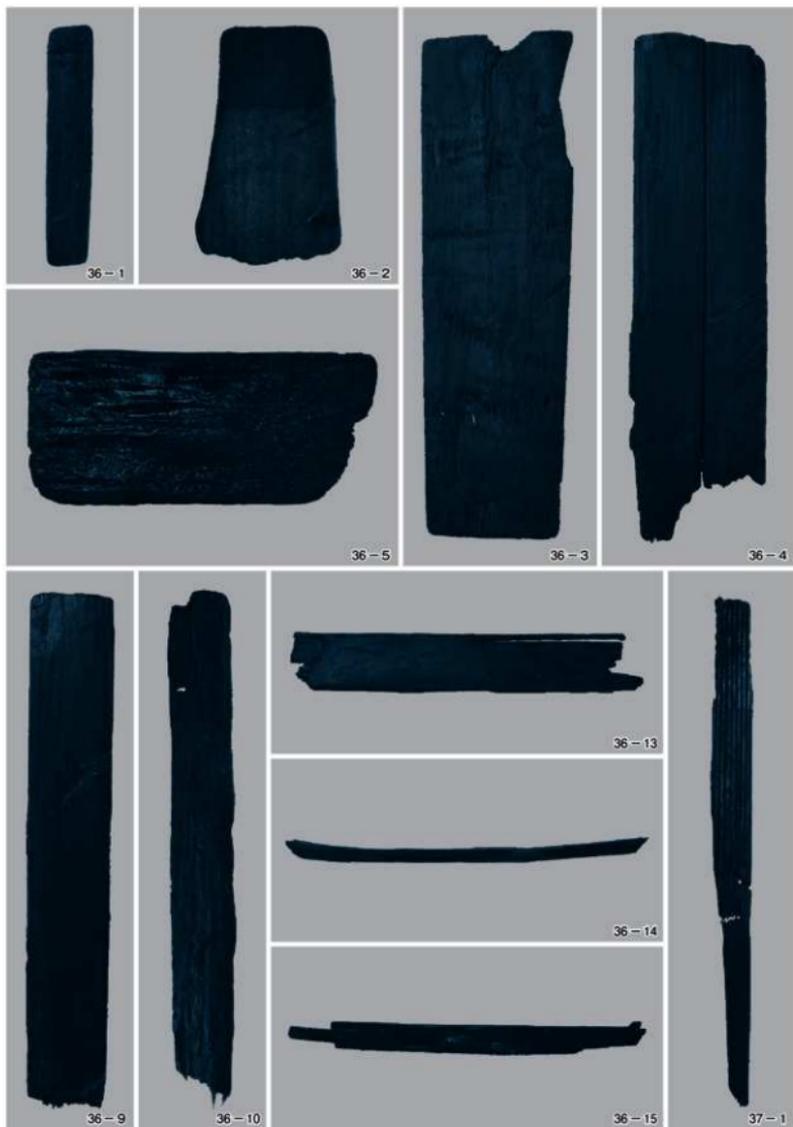
50 1号流路跡出土木製品（6）串状木製品・ヘラ状木製品・曲物側板



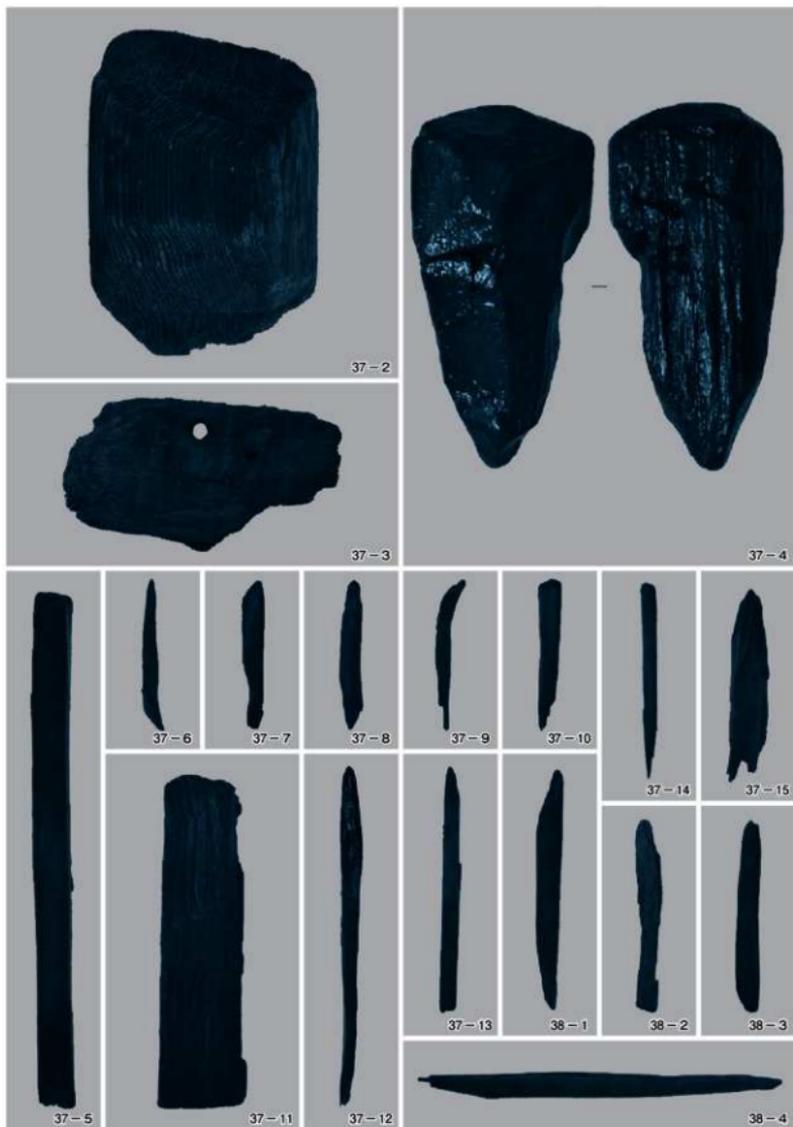
51 1号流路跡出土木製品(7) 曲物側板・舟形状木製品・紡織具・脚類



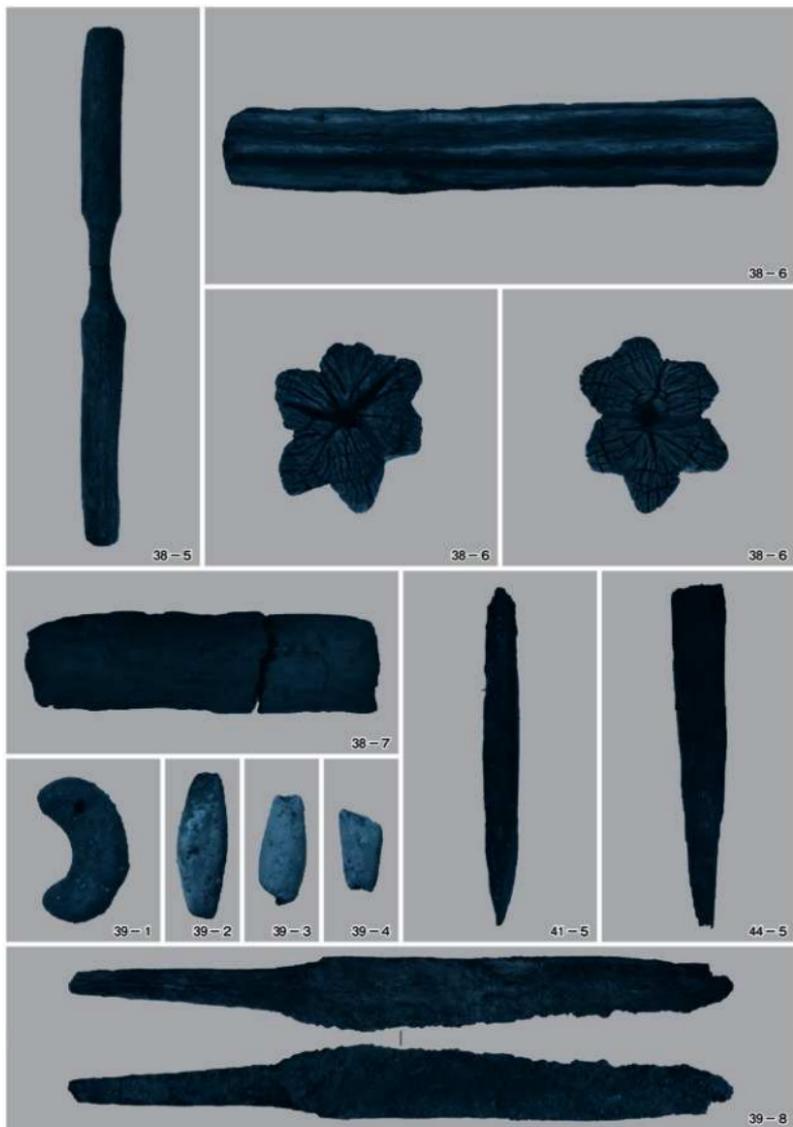
52 1号流路跡出土木製品(8) 脚類・ヘラ状木製品・田下駄・箱部材



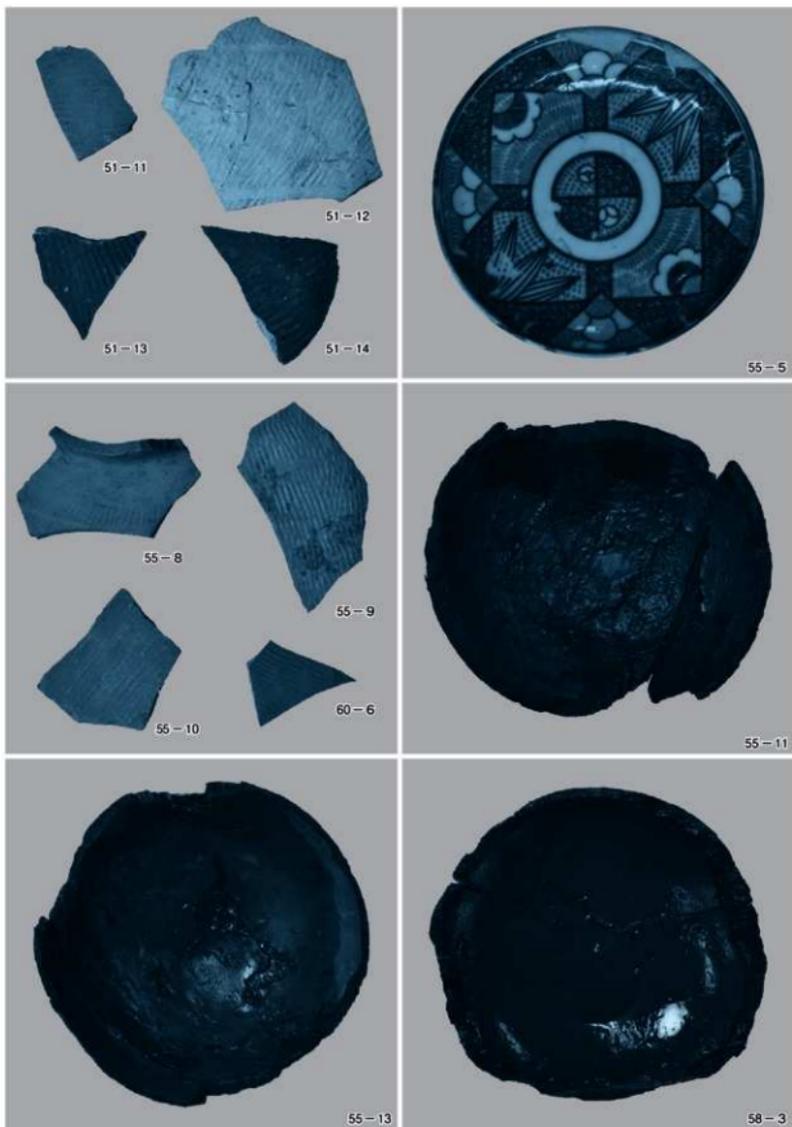
53 1号流路跡出土木製品(9)部材・クサビ



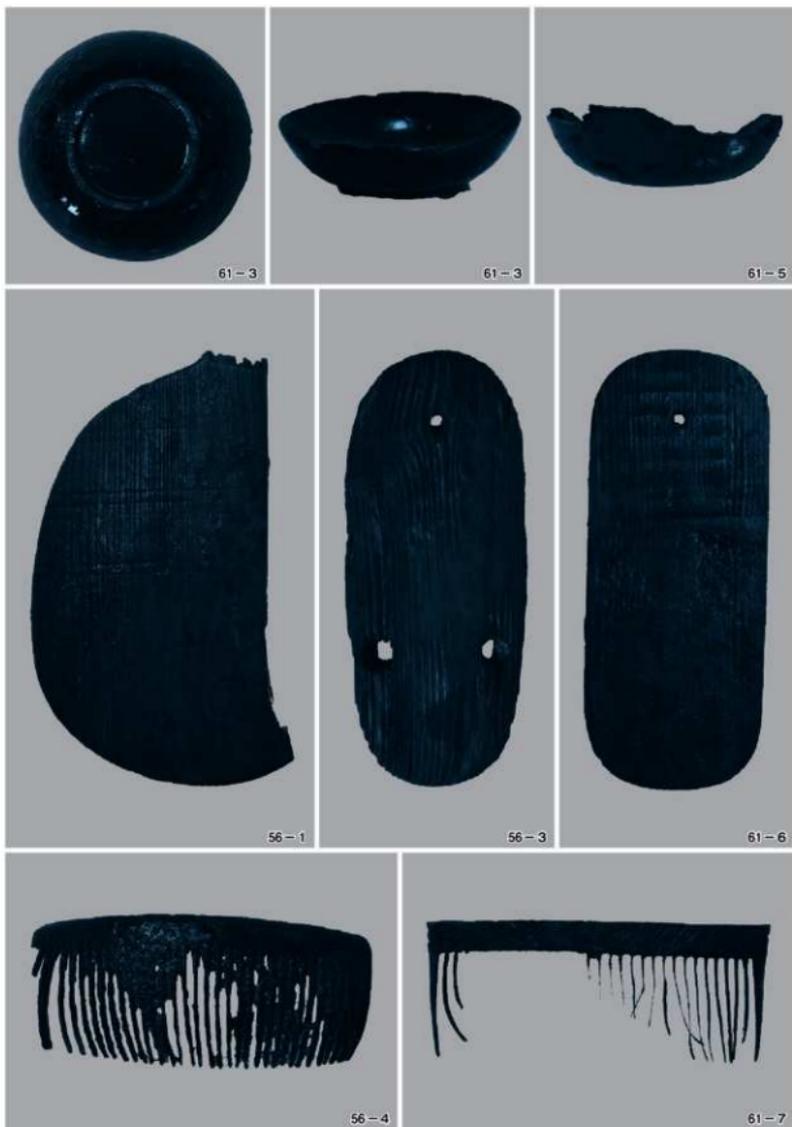
54 1号流路跡出土木製品 (10) 部材・火付木・他



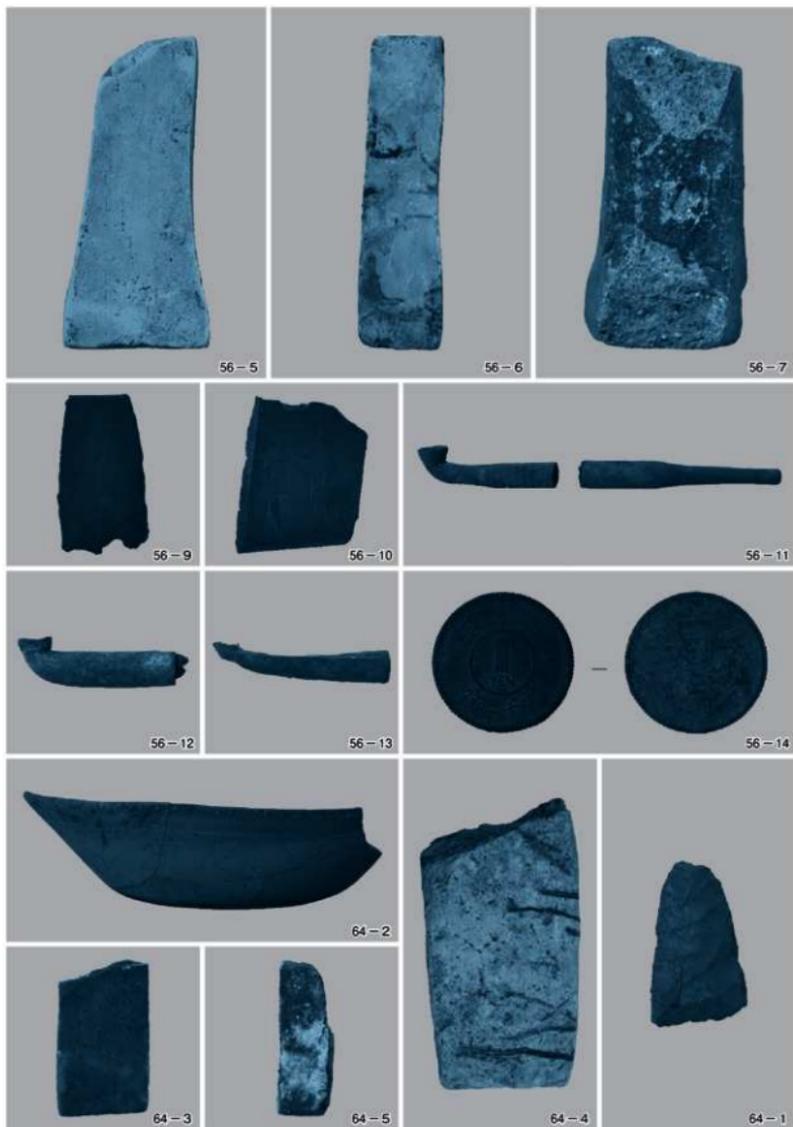
55 1号流路跡出土木製品 (11) 堅杵・コロパン・建築材・杭, 土製品・金属製品 勾玉・土錘・刀子



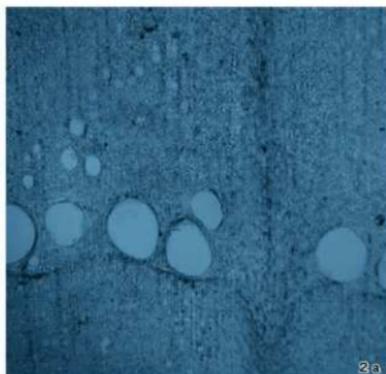
56 1·5·7·9号沟迹出土须惠器壳, 1号沟迹出土磁器, 1·3号沟迹出土木製品椀



57 1·10·11号沟迹出土木製品碗·下駄·櫛



58 1号溝跡出土石製品・金属製品。遺構外出土須恵器杯・石製品・石器



59 1号溝跡出土木製品顕微鏡写真

1 タリ (×40) 2 コナラ節 (×40)
 a : 水口 a : 水口
 b : 縦目 b : 縦目
 c : 横目 c : 横目

付 編

付編1 放射性炭素年代測定

株式会社 バレオ・ラボ

1. はじめに

会津若松市に位置する西木流C遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。試料はいずれも平安時代の流路跡から出土した木製品で、 ℓ 2層から出土したコロバシ(PLD-22167)、底面から出土した皿(PLD-22168, 22169)、 ℓ 3層から出土した板状木製品(PLD-22170)である。コロバシは芯持丸木であったが、表面が加工されていたため最終形成年輪は残存しておらず、部位不明である。皿と板状木製品も最終形成年輪は残存しておらず、部位不明である。

試料は調製後、加速器質量分析計(バレオ・ラボ、コンパクトAMS; NEC製 1.5SDH)を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

表1 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-22167 図38-6	遺構：流路跡 層位： ℓ 2 処理番号：1	種類：生材(コナラ属コナラ節) 試料の性状：最終形成年輪以外 器種：コロバシ 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N)
PLD-22168 図29-1	遺構：流路跡 出土位置：底面 処理番号：2	種類：生材(ケヤキ) 試料の性状：最終形成年輪以外 器種：皿 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N)
PLD-22169 図29-2	遺構：流路跡 出土位置：底面 処理番号：3	種類：生材(ケヤキ) 試料の性状：最終形成年輪以外 器種：皿 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N)
PLD-22170 図35-10	遺構：流路跡 層位： ℓ 3 処理番号：4	種類：生材(スギ) 試料の性状：最終形成年輪以外 器種：板状木製品 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N)

3. 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年校正に用いた年代値と校正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表

示した¹⁴C年代を、図1に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代(yrBP)の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差($\pm 1\sigma$)は、測定の実験誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い(¹⁴Cの半減期5730 \pm 40年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年較正にはOxCal4.1(較正曲線データ: IntCal09)を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2 σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

表2 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	¹⁴ C年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	¹⁴ C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-22167 処理番号: 1	-25.84 \pm 0.17	938 \pm 18	940 \pm 20	1038AD (11.5%) 1051AD 1082AD (41.6%) 1126AD 1136AD (15.1%) 1152AD	1032AD (95.4%) 1155AD
PLD-22168 処理番号: 2	-28.21 \pm 0.13	1164 \pm 20	1165 \pm 20	783AD (3.8%) 788AD 815AD (20.0%) 843AD 859AD (36.4%) 895AD 925AD (8.0%) 937AD	778AD (79.7%) 900AD 918AD (15.7%) 952AD
PLD-22169 処理番号: 3	-28.45 \pm 0.12	1289 \pm 20	1290 \pm 20	676AD (41.4%) 713AD 745AD (26.8%) 767AD	668AD (95.4%) 773AD
PLD-22170 処理番号: 4	-25.82 \pm 0.12	1249 \pm 20	1250 \pm 20	694AD (55.4%) 748AD 765AD (12.8%) 777AD	681AD (92.5%) 823AD 841AD (2.9%) 860AD

4. 考 察

試料について、同位体分別効果の補正および暦年較正を行った。以下、各試料の暦年較正結果の2 σ 暦年代範囲(確率95.4%)に着目し、結果を整理する。

流路跡のℓ2層から出土したコロバシ(PLD-22167)は、1032-1155 cal AD(95.4%)の暦年代範囲を示した。これは11世紀前半~12世紀中頃で、平安時代中期~後期に相当する。

流路跡の底面から出土した皿(PLD-22168)は、778-900 cal AD(79.7%)および918-952 cal AD(15.7%)の暦年代範囲を示した。これは8世紀後半から10世紀中頃で、奈良時代~平安時代中

期に相当する。

同じく流路跡の底面から出土した皿(PLD - 22169)は、668 - 773 cal AD(95.4%)の暦年代範囲を示した。これは7世紀後半から8世紀後半で、飛鳥時代～奈良時代に相当する。

流路跡の③3層から出土した板状木製品(PLD - 22167)は、681 - 823 cal AD(92.5%) および841 - 860 cal AD(2.9%)であった。これは7世紀後半から9世紀後半で、飛鳥時代～平安時代前期に相当する。

木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死・伐採年代が得られるが、最終形成年輪から内側を測定すると枯死・伐採年代よりも古い年代が得られる(古木効果)。今回の試料は、いずれも最終形成年輪が残存していなかったため、古木効果の影響により、年代測定の結果は木材が枯死・伐採された年代よりも古い年代を示している可能性がある。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51 (1), 337 - 360.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」: 3 - 20. 日本第四紀学会.
- Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0 - 50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 51, 1111 - 1150.

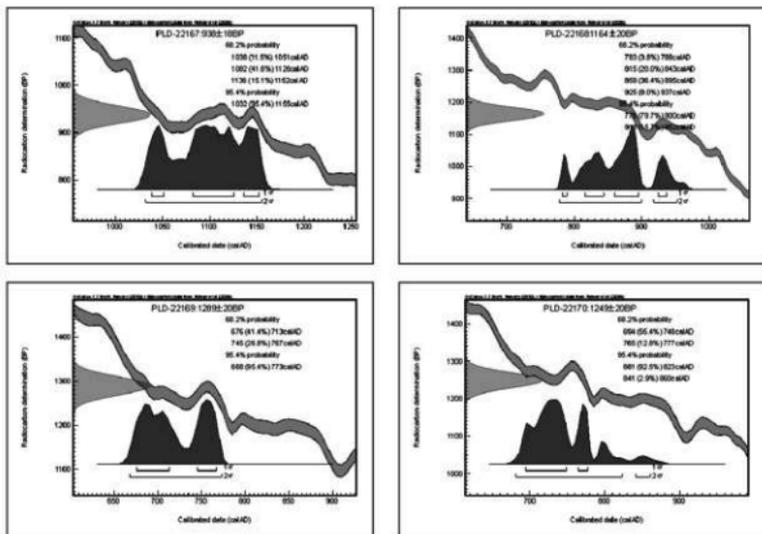


圖 1 曆年校正結果

付編 2 西木流C遺跡出土木製品の樹種同定

株式会社 バレオ・ラボ

1. はじめに

会津若松市高野町に所在する平安時代の西木流C遺跡で、流路跡から出土した木製品の樹種同定を行った結果を報告する。なお、同試料を用いて放射性炭素年代測定も行われている(放射性炭素年代測定の項参照)。

2. 試料と方法

試料は、流路跡から出土した木製品4点である。ℓ2層から出土したコロバシ(Na1)、底面から出土した皿(Na2, 3)、ℓ3層から出土した板状木製品(Na4)である。

方法としては、剃刀を用いて3断面(横断面・接線断面・放射断面)の切片を採取し、ガムクロラールで封入してプレパラートを作製した。これを光学顕微鏡で観察・同定し、写真撮影を行った。なお、板状木製品は横断面を採取すると製品の形状を大きく損なう恐れがあり、肉眼で針葉樹と判断できたため、接線断面と放射断面のみから切片を採取した。

3. 結果

同定の結果、針葉樹ではスギ、広葉樹ではコナラ属コナラ節とケヤキの2分類群、計3分類群が確認された。コロバシはコナラ属コナラ節、皿は2点ともケヤキ、板状木製品はスギであった。また、木取りはコロバシが芯持丸木、Na2の皿は縦木取り、Na3の皿は横木取り、板状木製品は柾目であった(表1)。

表1 樹種同定結果一覧

処理番号	図 No.	遺構名	出土層位	遺物名	樹種	木取り
1	図38-6	流路跡	ℓ2	コロバシ	コナラ属コナラ節	芯持丸木
2	図29-1	流路跡	底面	皿	ケヤキ	縦木取り
3	図29-2	流路跡	底面	皿	ケヤキ	横木取り
4	図35-10	流路跡	ℓ3	板状木製品	スギ	柾目

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、光学顕微鏡写真を図版に示す。

(1) スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don スギ科 図版1b-1c (Na4)

仮道管、放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急である。樹脂細胞は主に晩材部に散在する。分野壁孔は大型のスギ型で、1分野に通常2個並ぶ。

スギは暖帯・温帯下部に生育する常緑高木である。材は比較的軽軟で切削加工は容易であり、割

裂性は大きい。

(2) コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinus* ブナ科 図版2a-2c (No.1)

大型の道管が年輪のはじめに1列程度並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、単列と広放射組織の2種類がある。

コナラ節は温帯下部および暖帯に分布する落葉高木で、カシワ、ミズナラ、コナラ、ナラガシワがある。材は重硬かつ強靱で、器具や建築材など幅広く利用される。

(3) ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科 図版3a-3c (No.2), 4a-4c (No.3)

大型の道管が年輪のはじめに1列に並び、晩材部では小道管が集団をなして接線状から斜線状に配列する環孔材である。道管の穿孔は単一で、小道管にはらせん肥厚がみられる。放射組織は2～5列幅程度の異性で、上下端の細胞に大きな結晶をもつ。

ケヤキは暖帯下部に分布する落葉高木で、肥沃地や河畔によく生育する。材は重硬だが、加工はそれほど困難ではなく、保存性が高い。

4. 考 察

板状木製品は針葉樹のスギであったが、その他は落葉広葉樹であった。

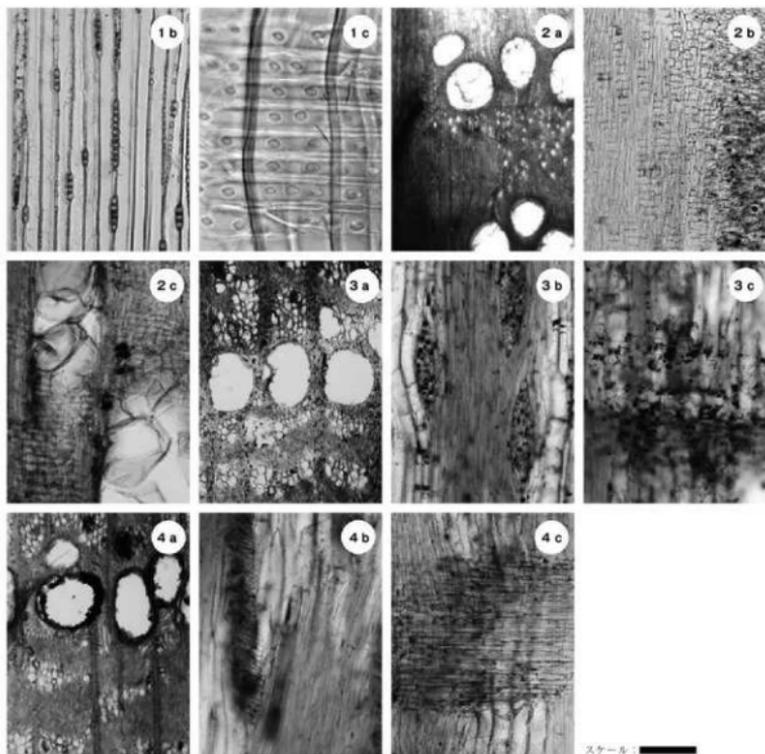
板状木製品に使用されていたスギは木理直通で加工容易な材であるため、製材しやすく多用途に利用される。

コバシは、広葉樹のコナラ属コナラ節であった。コナラ節の材は重硬および強靱であり、全国的に農耕土具に多用される傾向がある。東北地方でも古墳時代末期以降に、クスギ節やアサダ、クリなどと共に多く利用されている(伊東・山田編, 2012)。

皿などの挽物にはケヤキやトチノキ、サクラ属などの広葉樹が多用される。ケヤキは重硬で靱性があるため、薄手の器によく用いられる(北野, 2005)。福島県内では、荒田目条里制遺構において平安時代の皿が多く出土しており、そのほとんどがケヤキであった(伊東・山田編, 2012)。本遺跡出土の皿も2点ともケヤキであり、周辺の遺跡でみられる木材利用傾向と一致している。

引用文献

- 伊東隆夫・山田昌久編 (2012) 木の考古学—出土木製品用材データベース—, 449p, 海青社。
北野信彦 (2005) 近世出土漆器の研究, 394p, 吉川弘文館。



1b-1c. スギ(№4), 2a-2c. コナラ属コナラ筋(№1), 3a-3c. ケヤキ(№2), 4a-4c. ケヤキ(№3)
 a: 横断面(スケール=250 μ m), b: 接線断面(スケール=100 μ m), c: 放射断面(スケール=1c:50 μ m, 2c-4c:100 μ m)

図版1 西木流C遺跡出土木製品の光学顕微鏡写真

付編3 西木流C遺跡出土の骨片について

株式会社 バレオ・ラボ

1. はじめに

西木流C遺跡は会津若松市高野町木流に所在する。発掘調査では平安時代の流路跡から骨片が出土した。ここでは、出土した骨片の同定結果を報告する。

2. 試料と方法

試料は、平安時代の流路跡の3層から出土した骨片3点である。骨片が出土したグリッドはD2、D7、E5である。

同定は肉眼で標本との比較により行った。

3. 結果と考察

D2グリッドから出土した骨片は、哺乳綱の肋骨(右?)破片である。色調は白色であり、強い火を受けたと考えられる。残存長は約5.5cm。

D7グリッドから出土した骨片は、ヒトの右上腕骨である。部位は遠位端~骨幹である。年齢は、上腕骨滑車が癒合していることから、12歳以上と推定される。色調は白色で、収縮による亀裂が見られるため、まだ新鮮な時に強い火を受けたと考えられる。したがって、D7グリッドの人骨片は火葬された可能性がある。残存長は約8.5cm。

E5グリッドから出土した骨片は、哺乳綱の長骨骨幹破片(左右不明)である。緻密質の組織は粗で、ヒトの可能性はある。色調は黒~灰~白色であり、火を受けている。残存長は約7cm。

引用・参考文献

馬場悠男編(1998) 考古学と人類学。191p, 同成社。

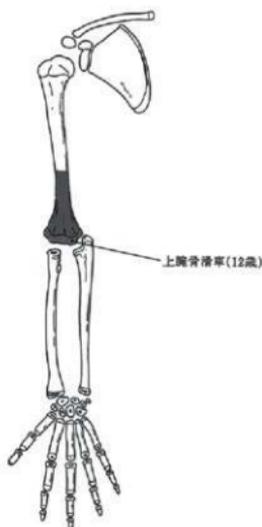


図1 同定されたヒト右上腕の位置
(馬場編1998より引用・改変)



図版1 西木流C遺跡流路跡出土の骨片

- 1 ヒト右と腕骨 (D7グリッド)
- 2 哺乳綱肋骨 (D2グリッド)
- 3 哺乳綱 (ヒト?) 長骨 (E5グリッド)

報告書抄録

ふりがな	あいづじょうかんきたどうろいせきはくつちょうさほうこく13							
書名	会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告13							
シリーズ名	福島県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第488集							
編著者名	藤谷 誠 鶴見諒平							
編集機関	財団法人福島県文化振興財団 遺跡調査部 〒960-8115 福島県福島市山下町1-25 TEL 024-534-2733							
発行機関	福島県教育委員会 〒960-8688 福島県福島市杉妻町2-16 TEL 024-521-1111							
発行年月日	2014年3月25日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
西木流C (1次)	福島県 会津若松市 高野町大字 木流字木流	202	00241	37°54'58"	139°90'77"	2012年4月23日 2012年12月15日	6000㎡	会津縦貫北道路 の建設に伴う事前 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
西木流C (1次)	流路跡	平安時代 近世 近現代	流路跡 土坑 溝跡	2ヶ所 2基 13条	土師器 須恵器 木製品 など	今回の1次調査では、平安 時代の流路跡を調査した。流 路跡からは土器と木製品が多 数出土している。		
要約	西木流C遺跡1次調査では平安時代の流路跡を確認した。流路跡からは枕列が検出されたほか、人工的に掘り込んだと考えられる箇所も存在し、平安時代の河川の利用の状況を示している。流路跡からは土器類、木製品が出土しているが、その中でも代掻きに使用されたと考えられる木製品のコロバシは、全国的にも類例の少ない貴重な資料である。							

※経緯度数値は世界測地系（平成14年4月1日から適用）による。

福島県文化財調査報告書第488集

会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告13

西木流C遺跡（1次）

平成26年3月25日発行

編集	財団法人福島県文化振興財団 遺跡調査部	(〒960-8115) 福島県福島市山下町1-25
発行	福島県教育委員会	(〒960-8688) 福島市杉妻町2-16
	財団法人福島県文化振興財団	(〒960-8116) 福島市春日町5-54
	国土交通省東北地方整備局郡山国道事務所	(〒963-0111) 郡山市安積町荒井字太郎内28-1
印刷	八幡印刷株式会社	(〒970-8026) いわき市平字田町82-13